
かみ・つき

B-POP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみ・つき

【Nコード】

N7035X

【作者名】

B - P O P

【あらすじ】

「青春、したくはないかね？」

意味不明の勧誘文句で千古修太郎^{せんこしゅうたろう}は、同じクラスの天王寺美緒^{てんのうしみお}が部長を務める「超科学部」なる謎の部に入部させられた。科学を超え、魔法を実践する部活ということだが、もちろん魔法なんて信じていない修太郎。しかし、それを嘲笑うように召喚魔法の実験は成功。『自称神様』のカナメを召喚してしまう。

青春？ 開始

忍者のように足音を忍ばせ、暗殺者のように存在を消して廊下を歩く。

「ねえ？　なんでこそこそするのよう？」

「うつせ、黙ってる。カーちゃんにばれたらぶつ殺される」

リビングからテレビの音が聞こえているが、これが消えるとゲームオーバーだ。

「なんでえ？」

「何でじゃねえ。あの女は鬼だ」

決して大げさなんかじゃない。あの女のパンチをまともに食らう勇氣なんか、十六になった今でもこれっぽっちも湧いては来ない。こんな時間に外をほつき歩いていたことなんかがばれた日には、死刑確定だ。

部屋までの残り数歩を風のように駆け抜け、廊下のきしむ音に心臓まできしませて、ノブに手をかける。最後の最後まで気を緩めるな、そう言い聞かせながら扉を開ける。

ぎりぎりセーフ。

部屋に戻ってきたところで緊張の糸が切れた。後ろ手に閉めた扉の音が、今だけはゴールのファンファーレのように聞こえる、というのも決して大げさじゃない。

ため息を吐き出すと、一緒に体を支える力まで垂れ流しているように、その場にべったりと尻もちをついてしまった。梅雨も近づく五月の末ともなれば、フローリングの冷たさが尻に心地よい。

そこで初めて電気をつけていないことに思い至って、俺は手を伸ばして電気のスイッチを探る。が、どうにも高さが足りないらしく、指先はむなしく壁をなでるだけだ。

「これえ？」

不意に頭上から降ってきた声とともに、六畳の部屋に蛍光灯の安

つばい光が充満する。

目を瞑ってもベッドに倒れこめるほどに見知った部屋なのに、吸い込む空気は他人行儀だ。微かに混入した甘い香りは、思春期男子からしてはならない。したら気持ち悪い。

「ああ、ありがと……って、はあ？」

声よりも匂いに反応したのは別に匂いフェチだからでもなんでもない。間違っても、ああいい匂いだできれば鼻を近づけて全力でかぎ続けたい、なんて思っていない。断じて。

「はい？」

目の前にはきょとんと見開かれた大きな瞳が二つ、こちらを見下ろしている。いや、それはいい。目を見て話すのはコミュニケーションの基本だ。ただ問題なのは、ここが俺の部屋で時刻はすでに十一時少し前で、俺が思春期男子だということだ。

つまりどういふことかというところ、

「何で、ついてきてんだよ！」

目の前にいるのが美少女だということだ。

「ん。だってえ、あなたはもう、あたしの下僕なんだよう」

そう言やそんなやり取りをした気もするが、混乱しすぎて記憶を呼び出せない。

距離が近すぎて全体像は見えないが、真ん丸い目や人懐っこそうに垂れた眉毛は美少女の要素としては十分だ。しかも、瞳は見たことのないほどに透き通った、きれいなガラス細工がそこにはめ込まれているようで、見れば見るほどに吸い込まれそうになる。

自信なさそうに垂れた目じりと尖らせた唇に、何をしたわけでもないのにこちらが悪いことをした気になってしまう。それでも顔立ちには思わず見とれてしまうほどだ。わずかにピンク色を帯びた肌は、つつかなくてもぷにぷになのが想像できる。

そういえば廊下を歩いてるときにもずっと声がしていたな、気配を殺すのに夢中だったからすっかり気がつかなかったけど。

「なあ、聞いていいか？」

「ん？」

「廊下でもずっと、こうやってお話してたよな」

「うん」

「声も殺さずに」

「話してたよう。普通にい」

「つてことは、リビングまで聞こえてもおつかしくねえよな、たぶん、おそらく、想像もしたくはないが」

「たぶん、じゃないかなあ？」

脂汗が音を立ててうなじを流れている。やけに部屋が暑く感じるのは、自分の体温が下がっているからだ。雪山で凍死する理屈ってこれだよな。

「いい度胸だな」

「は、はひい！」

考えるよりも早く体が動いた。直立不動、絶対服従。これが生き残るための最善の術であることを、本能が知っている。いや、実際何をやっても死ぬんだけど、せめて死ぬなら最低限の苦痛がいいだろ？ 無駄な抵抗は苦痛を増やすだけだ。

「夜遊びの上女連れ込むって、どういう了見だ？ しかもお前、とぅとぅロリコンに」

「こ、これには、事情ございまして」

ゆっくり、上半身を動かさずに振り返ると、何よりもまず怒りのオーラが見えた。そんなものが見えるはずがないと思っているのなら思えばいい、俺には見えたのだ。真紅に燃え盛る怒りの炎が。

「子の不始末は親の不始末。きつちりケジメつけさせてやんよ」

「い、いえ、これ、これこれ、こ」

掌が振り上げられ、顔面に炸裂するまでの一瞬の映像が、やけにスローモーションに見えたのだが、だからといってアイアンクローの威力までスローになるはずもない。

こめかみにめり込む圧力を感じながら、俺は少しだけ記憶のねじを巻き戻してみる。今見ているものが走馬灯ではないと信じながら、

少しだけ過去に思いをはせる

どうしてこうなった？

神がこの世にいるのなら、なぜ俺にだけこんな仕打ちを……いや、違うな。

神がいるせいでこうなったんだった。畜生。

「シュータロー、今日暇だろう？ 放課後付き合いたまえ」

六時間目の終了のチャイムも鳴らないうちからワイシャツの襟首をひっ捕まえてこんなことを言うのは、クラスに一人しかない。いや、クラスどころか学校中でも一人だけだ。全国でも片手の指で足りると思いたい。

振り返っても共犯にされるだけなので、あえて無視。後ろの席だからというよしみでお話してやるのは休み時間だけだ。

「シュータロー、聞こえているのだろう？ やばいのだよ。近日中にどうにかしなければならん問題があるのだ」

大仰な物言いに惑わされてはいけない。無視。

「シュータロー、先週の木曜にコンビ二でこっそり買っていたあの本、なんと言ったかな？ たしか『ガチベツピン』とか」

「何だー天王寺、水臭いぞ！ 用があるならあるとそういつてくれれば！」

なぜ知っている、完璧な隠密行動だったはずだ。何のためにチャリで片道一時間もの道のりを走破したと思っている。

「だから用があると言っている。そんなやましい本なら買わなければよいものを」

言いながら、天王寺美緒は自慢の胸を両腕で挟み込むようにして机の上で悩ましげなポーズを取っている。どうしてブラウスの襟がこいつだけターンチェックで、スカートにスリットが入っていて安全ピンで留められているのか。すべては天王寺美緒だからだ。こんな改造制服、ほかの人間なら絶対に許されない。いや、こいつとて許されているわけではないはずなのに、何故か生活指導につかま

っているのを見たことがない。

本については、買わずに済むものものではないから。否、買わねばならぬ本だからこそだ。と思いながら、おくびにも出さずに冷静に対処する。必要なのは冷静さだ。

「で、何のようだよ」

「青春、したくはないかね？」

「何言つてんだ、いきなり？ そりゃ、したいかしたくないかって言われると」

ちらりと、俺の視線が無意識にそちらを向いてしまう。

二つ前三つ左の席。ショートカットにセルフレームの眼鏡がトレードマークの、クラス委員。真剣に授業を聞く横顔は、こちらに気づく様子など微塵もない。

「君は想像以上に素直だね」

「うつせえな。そもそも何だよ、その「青春する」って。そんな動詞ねえよ」

ねえが、心惹かれるかと言われると……じゃない！ 何をばかなことを。

ほんのわずかでも美緒の言葉に耳を貸してしまった自分が、猛烈に恨めしい。そこまで自分が思い詰めていたのだとすると、末期症状だ。何の末期かは知らないが。

「青春、してみないかね？」

「意味わかんねー」

どうやら俺の後ろの席は、日本語の通じない異次元に通じているらしい。何だよ、いきなり声かけて「青春」って。宗教かつーの。「とろけるほどに甘くって、ちょっぴりほろ苦い。プリンのような青春だよ」

「とろけるほどに……ほろ苦い……」

そんな青春が俺にも訪れる。そう思うと、ごくりと一回では飲み干しきれない生唾が湧きまくる。興味は、ないわけじゃないけど。

「いやいやいや、ないないない。ましてや美緒の誘いで」

「今日の放課後、科学部の部室に来たまえ。そこで話す」

人の話は最後まで聞けよ。そういえばこいつ科学部だったか。あまりに傍若無人に好き放題するものだから、先輩部員がもてあましているのをこの一学期前半だけでも何度となく見たのを思い出す。可愛そうに、晴れて新入部員（しかも女子）が入ったと思ったら歩く爆弾だもんな。同情を禁じえないが助け舟は決して出さない。二次被害をこうむるのは目に見えている。

「なんか嫌な予感しかないんだが」

「ノープロブレムだ。私が君に迷惑をかけたことがかつてあったかね？」

「この二カ月弱の思い出アルバムはそれ一色だ」

授業中に話しかけてはへんてこな会話に巻き込み、休み時間にはよくわからん独自理論を語られ、何だかわからん活動を手伝わされたこともあった。迷惑百分百だ。

「というわけだ」

「どーいうわけだよ！」

「ん、うん！」

ひととき大きな咳払いが会話を断ち切る。六時間目の地理担当、海老沢が気の毒な生き物を見る目でこちらを睨み付けていた。

「あのな、そういうのは普通チャイムが鳴ってから」

別名ヘビ沢。絡みつくようなねちっこい説教が得意技という、敵にも味方にもしたくない男だ。だから三十五歳独身なのだと言うと説教が倍になるという噂は本当だろうか。

と、そこにタイミングを計ったようにスピーカーがノイズをこぼし、本日の授業終了のチャイムを盛大に吐き出す。このチャイムが一番心地よく聞こえるのは俺だけじゃないはずだが、今日だけはわけが違う。

「すまん、俺には一秒たりとも無駄にできる時間はない。話なら後日」

「ああ！ シュータロー、どこへ！」「こら、話はまだ」

へび沢の粘着質な声と、美緒のあまり焦りを感じない声が背中を引つ張るが、そんなものの振り切るようにダッシュする。帰宅準備は六時間目が始まった時には完了していた。

「悪いな天王寺、俺は今日も帰って店の手伝いさせられるんだ。サボったら殺される」

母親の営む小さな喫茶店を手伝う。響きだけは穏やかで良好な親子関係を想像させるが、その実そうではない。主人と奴隷の契約をそう呼ぶ人間がいれば話は別だが。

「驚きだよ」

背後からの声に「何が？」と半笑いで聞き返したところで、手首に激痛が走った。

そして、

「私から逃げられると本気で思っているのが、だよ」

天地がひっくり返った。床がとんでもない速度で頭上を通過し、蛍光灯がつま先を掠めるように高速で流れる。脳みそが偏って、血液が体の末端に音を立てて集まった。

そして次の瞬間には、スリッパの底が廊下を捉えて元いた位置に立っているが、三半規管はすっかりバ力になっている。まっすぐ歩けずによれよれと壁側に曲がってゆく。

手首だけが、しっかりと美緒にホールドされたまま。

うかつだった。完璧な脱出計画だったというのに、美緒の身体能力を計算に入れ忘れていた。人間離れた体力と、常識と理性の欠落した知力、これを兼ね備えた危険人物。それが天王寺美緒だ。普通に走って敵うはずがない。

「失敗だ。殺される」

「どの道逃げ切っていれば私が呪い殺していたよ」

こいつの場合は本当にやりそうだから笑えない。

「ささ、遠慮はいらない。我が城にご招待だよ、期待のホープ君」
ずるずると引き摺られる姿に視線が大集合だが、そのどれもが哀れみと好奇心を緋い交ぜにして、好奇心だけ特盛にしたような目で

俺を見てやがる。そりやそうだろう、美緒の奇人変人っぷりを知らない人間は、この満貫寺高校はおろか、一色市を隈なく探してもいいはずだ。いたらもぐりかスパイだ。

「いや、スパイなら真っ先に知ってるか」

「何を言ってるんだい？ さあ、ここが今日からの君と私の愛の巣だ」

「おい、お前の辞書に愛なんて言葉あんのか？」

あつたとしたら間違はなく誤植だ、とはあえて言わなかったが、美緒は満面の笑みで自慢のブロンドをばさりと揺らす。もちろん純粹な日本人である美緒のそれは染めているものだが、艶やかさは地毛だといわれても信じられるレベルだ。ストレスがない人間というのは、髪まで健康だとはなんとも皮肉だ。禿でお悩みの全国のお父さんに謝れ、といったくなる。

「きちんと存在しているよ、失敬な。愛ほど有効な駆け引きの材料はないよ」

予想通り『愛』の文字が欠落した辞書を持っているようで、安心した。

「で、この……何だこの部屋！ カオスみたいになってるぞ。これ、本当に科学準備室か？ かき混ぜたら日本列島ができるぞ、これ」

「君はしょーもないところで博学だな。まあ、だから面白いんだが」
到着した科学部部室は、日中は科学準備室として使われているはずの部屋だったのだが、どう見てもその機能は失われているとしか思えない。少なくとも、科学準備室に曼荼羅や謎の巻物や何やら怪しげな像があつてはいけないと思う。

「帰る」

直感でいろいろと感じ取った上で、見なかったことにするのが最も懸命だと即決する。今帰ったところですでに母親の愛のお仕置き（人間サンドバックの刑）は決定しているのだが、これはさらにやばいにおいがする。何というか、神ならぬ人の身で踏み込んではいけない領域というやつだ。

はつきり言っと、俺の健全で安全な高校生活を著しく害する何かだ。まあ、最初っからそんなもんはないけどな。喫茶店で奴隷のように働く人生なんだ。

「何を言う」

「どうやら手遅れだったらしい。」

両肩に万力のような締め付けを感じたが、体は全力で逃走を推奨する。心はすでに逃げ出していて、この場所にはない。

「ようこそ、科学部へ。部活に青春してみようじゃないか、シュータロー」

目の前に一枚の紙を取り出されたので、うかつにもその内容を読み取ってしまい、がつくりと全身から力が抜けた。部活で青春なんて意外と普通だとかそういうことではない。そんな程度で脱力するような鍛えられ方はしていない。悲しいかな。

その紙は公式な書類で、タイトルは『入部届』といった。記入日は本日、記入者は俺。ご丁寧に拇印まで押してあるが、アレは間違はなく本物だ。見なくてもそう思えるのは、紙を持っていたのが天王寺美緒だからだ。

「というわけだ。ようこそ、科学部へ」

偽造の匂いがぶんぶんする入部届けに判子を押した顧問には、未代まで子孫が禿げる呪いをかけることを決意した。今の顧問は禿げているので、効果はなさそうだが。

「何で俺が入部すんだよ？　ってか、急ぎの問題があるとか何とか言っただけだったか？」

「ああ、そんなことも言っていたな」

ぶっ飛ばすぞ、と思いながら眉間に皺を寄せて目を閉じる。ゆっくり深呼吸をして、冷静になれと心の中で三回唱えてから口を開く。そうしないと罵詈雑言しか出てこない。

「そのために呼ばれたのに、なんで入部なんだよ？」

「突然二年生が退部届けを出してしまっただけ。部員不足で科学部がなくなりかけているのだよ。緊急事態だ」

「そうか」

朗報だ。このままなくなってしまうえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる。

「ん？ 今何か、『朗報だ。このままなくなってしまうえば先ほどの失態も帳消しになるどころか俺の高校生活は安泰だ。できれば俺はこの『緊急事態』とやらをバックアップしたくなる』みたいな顔をしなかったか？」

「わあい、ここまで心が読まれると自分がサトラレになった気分だぜ」

目の前にいる悪魔が、人の心を読む妖怪『サトリ』であるぐらいなら、俺が妖怪『サトラレ』であることを認めるほうが百倍世界のためだ。

「何を言ってるのかわからないが、あと一人必要なだよ。部を存続させるには最低三人の部員が必要になる」

「で、俺が入部させられたってわけか。迷惑な話だが良かったな、俺みたいな鴨がいて。これで廃部を免れたじゃないか。クソ、これじゃ俺は青春ボツシュートじゃねえか」

まあでも、これで不足分を補ったということだし、幽霊部員でもかまわないというのなら名前を貸して恩を売っておくのも悪くない。「何を言ってるんだシュータロー？ だから緊急事態だといっているだろう？」

「わかってるよ。だから名前ぐらい貸してやるって言ってるんだろ。ってか、もう入部したことになってんだし、かんけいな」

「だから言ってるだろう、あと一人必要なのだと」
脳みそが軋む音を初めて聞いた。

確かに頭がいいほうではないが、それなりに十六年生きてきた自負はある。なのに、目の前の展開が全くわからない。目隠しで歩く迷路のようだ。

「ん？ だって、二年がやめたんだろ？」

「そつだよ」

「で、部員が足りなくて廃部の危機なんだろう？ 少なくとも、三人必要で」

「そう言っただつてもりだが？」

「で、俺が入っただろ？」

「だから言っただじやないか、あと一人、と」

空恐ろしい想像が頭の中を駆け巡り、それを否定するための要素を必死になつてかき集めてみるがどうにもうまくいかない。妙に鼓動が早くなっているのと、足元がおぼつかないのとでふわふわと浮いているようだ。

「さあ、一緒に新入部員を確保する方法を考えようじゃないか、我が科学部、いや」

あえてそこで一拍おいた美緒は、にやりとほくそ笑んだ。吊り上げられた唇と、細められた切れ長な目が妙に妖艶で、科学者というよりは魔女といった風体だ。部屋の力オスツプリと合わせて雰囲気は完璧だ。何も知らない思春期男子なら、その美貌と驚くべきプロポーションに、一秒で恋に落ちるだろう。

「超科学部に」

そして、瞬き一回の間にその恋は冷めるだろう。

「つまり、科学部でめえ一人になつたってことじゃねえか！」

「超科学部だ」

「どつちでもいいわ！ んなことより、それだつたら先にもう一人探してきて、それから俺を誘えよな。そしたら名前ぐらいは貸してやったぞ」

「何を言ってるんだ？ 君はもう科学部、おっと、超科学部員なのだ。ともに人類の最先端である科学を超越し、魔術の域にまで高めるために人生をささげるのだよ」

信じられないが、これを言っている美緒の顔は百パーセントの本気だ。どこか途中に笑いどころが挟まっているのだろうと愛想笑いを作りかけたが、思いのほか厳しい視線で心を貫かれた。

本気だからこそそのやばさに、今更ながら一度でも首を縦に振ったことを激しく後悔する。もし人生で一度だけタイムマシンが使えるなら、あの瞬間に戻って、ハリウッドアクションばりに窓を突き破って逃げ出すようにアドバイスをすること請け合いだ。

「それに、部員確保は多少なりとも手伝えるとしても、本格的な部活となると難しいぞ」

全力で後悔してしぼんだ気持ちの向こうで、冷静に事態を考える自分がそう言った。

「と、言うത്？」

「俺んちが喫茶店やってんのは前に言ったと思うけど、放課後はそっちの手伝いしなきゃだから、本格的な部活となるとちよつと時間」

この時ばかりは、帰宅と同時に始まる奴隷のような労働タイムがありがたかった。これを口実に、超科学部なるよくわからん活動に巻き込まれずに済む、という寸法だ。

「そうか。では、君の母親に許可を取らねばならないということだね」

「そういうこと」

まあ、百歩譲って部への所属を許しても、あの女がみすみす奴隷を手放すはずがない。というわけで、この駆け引きはおれの勝ちだ。悪いな、天王寺。

「すまん、俺も部活動そのものはやぶさかでは」

ポケットから出てきた二枚目の紙切れは書類でも何でもなく、ただのA4コピー用紙だったが、破壊力は先ほどの比ではない。そこにはただ一言、こう書かれていた。

『 やつていい 』

「あんのばあ！」

筆跡はまぎれもなく、毎日店のお品書きで見る字だ。紙の右下には、大好きなうさぎの絵が本人の鬼具合とは不釣り合いな、凄まじいかわいらしさで描かれている。ちなみに、『 やつていい 』の上に

失敗したのをごまかすように塗りつぶしている個所があるが、『殺』と書きかけて誤魔化した跡が透けて見えている。

「そんなもん、しかし俺にだって部活選ぶ権利が」

『くちごたえすんな』

二枚目の紙を突き付け、勝ち誇ったように天王寺が口元と胸もとを釣り上げる。第二ボタンのあいたブラウスから飛び出す、グランドキヤニオンの様な谷間に目を奪われる。

「というわけだ。ともに頑張ろうではないか、シュータロー」

差し出した手が、しばらくは握手を求めているものだとはいえ、気づけずに呆けていたが、心の整理がついたところでようやくその手を握り返すことができた。

簡単な話だ。新しい奴隷契約で、主人が変わっただけだ。

鬼から、魔女に。

こうやって、甘ったるいほどに甘くちよっぴりほろ苦い、その上ちよっと黄ばんだ大事件の幕が上がったわけだ。上げるんじゃないかな、とタイムマシンがあればそんな感想も伝えに行けるけど、ないのでどうしようもない

こうして俺は、青春から最もかけ離れた場所に引きずり込まれたわけだ。ちくしょう。

ようこそ？ 超科学部

「というわけだ」

「お前の「というわけ」は前後の文章が全くつながらん」

青春没収残酷ショーの翌日。俺はまた脱出に失敗して何らかの攻撃を食らって意識を失い、気がつけば教室の床の上に転がされていた。記憶に連続性がないことがこんなに恐ろしいとは思わなかった。純粹に、生きていることに感動したのは貴重な経験だ。

「俺に何をした？ どんな攻撃を食らった？ 記憶では下駄箱にいたはずだぞ」

思いついたのは、時間が何度もループする世界でどうやっても教室に引き戻されるというシニールな設定。決して学校から脱出できない主人公。イヤすぎる。

「さておき、新入部員確保作戦を考えなければならない。何かいい案はないかね？」

大仰なもの言いだが、演技っぽさが無いのがすごい。外見はもつと高飛車というか高慢ちきというか、そんな喋り方をしそうなのに、口を開けばどこかの研究者か博士の様な口調。しかも、それで違和感がないのだから変な奴だ

「いい案もへったくれも、そもそも俺は部に入るなんて一言も」

『くちこたえすんな』

「くっ」

目の前に突き出されたコピー用紙の破壊力に本能が屈する。

「つても、マジでなんも思いつかんぞ。そもそも俺、この部が何やつてるかもわからないのに、こんな五月も終わるうかつて時期に新入部員確保なんて、難易度高すぎだ」

実際問題、この部が何をやっているにしても、ほとんどの一年生が部活をするのか帰宅部として日陰に生きるのかの選択を終えてい

るはずだ。となれば、今更帰宅部の覚悟を決めたものを部活に誘う難易度はかなりのものだし、ほかの部からのヘッドハンティングなどもつてのほかだ。好んで天王寺に関わろうなんていう奇特的な奴はこの満貫寺にはいない。これは自信を持って言える。

「あの」

「言ったではないか、科学の域を超え、魔術にまで至ることが目標……と、誰だね？」

床に芋虫のように転がる俺と、机に腰掛けて女王様のように足を組む美緒が、同時に声のした方を振り向く。と言っても、俺の場合はほぼ体の自由がないので、かろうじて視界の隅にスカートが見えた程度だけど。美緒とは対照的な、無改造な膝下のスカート。

「鍵、閉めたいから、そろそろいい、かな？」

うつかりすると外の喧騒にも負けてしまいそうなさやかな声。

「何だ、委員長君じゃないか」

クラス委員の吹水杏子。眼鏡をかけたおとなしそうな外見に、ついたあだ名が委員長。ベタな命名だが、似合っているとも思う。

「話してるとこ、ごめん。鍵、閉めたいから」

教室の施錠のためにわざわざ待っていてくれたのだろうか。だとしたら、たとえ主犯は美緒だとしても悪いことをした。

（この時間にここにいて、部活とかしてないのか？）

「ああ、すまないことをしたね。では行こうか、シュータロー。続きは部室でだ」

「おい、痛い痛い！ 紐付けて引つ張んな。行く、行くからほどけ歩かせろ！」

「ごめんね、大事な、話なのに。部活？」

「かまわないよ。どのみち部室には行くつもりだったからね。それより君は部活動に興味はないかね？ たとえば魔法とか。何なら魔王でも魔人でも呪術でも」

「え？」

この魔女は、目につくものすべてを巻き込んで災厄を振りまくつ

もりか。さすがにそれは防がなければならない。ましてや相手は、あの気の弱い吹水だ。

「おい美緒！ 委員長巻き込むなよ。気にすんな、この部は早々に廃部になった方が人類のためだったたた、痛い！」

縄の締め付けが引つ張るほどに強くなり、問答無用で食い込む。むちやくちや痛い。

「部員、募集してるの？」

「ああ。よんどころない事情により人材不足でね。廃部回避のために東奔西走中だよ。あと一人、有用な人材がいれば紹介してくれないかい？」

「何がよんどころない、だ。ほとんど自爆みたいなもんがぁいたただだっただ」

くそう、絶妙な力で食い込む縄が、的確に痛覚を刺激しやがる。

「委員長も、今の話なんて真に受けなくていいからな。世迷言だよ、世迷言。春だから」

「言ってくれるね、シュータロー。ならば君の委員長君を見つめるその瞳も年中春真っ盛りということだ」

「やあつかましい！ ほら、部室行くんだろ部室！」

このボケ、どこでそんな下らん情報を。そりゃ、かわいいと思うし、何つつか、おとなしそうな感じとかもなんかほっとけないっていうか。でも、それだけだ、断じてそれだけだ。それだけなんだよ！「美緒、すごいね。いつも。たのしそうで……いいな」

どこをどう見てるんだ？ こいつはこいつで独特の感性してるのかもしれないな。

にしても、美緒のモデルばりの笑顔つてのもすごいと思うが、吹水のは何とも柔らかいというか、見ていてこちらも自然と笑顔になるような、

「それは君の主観が多分に含まれているよ、シュータロー」

「何故心が読める。読むな」

これが、あながち冗談として笑って切り捨てられないのが、こい

つの恐いところだ。

「では、我々はこれにて失礼するよ。もしも部活動に興味があったなら、いつでも来てくれたまえ。科学準備室はいつでも有力な人材ならウェルカムだ」

まあ、来るんなら、ウェルカムだけだな。嬉しくないこともない。「素直ではないことはなはだしいね、君も」

「声に出していないことに返事をするなっつてんだろ、だから」
なんとも奇妙な表情で見送られながら、俺たちは教室を後にした。できればこのまま学校もあとにしたかったが、どうせそれは叶わないだろうな。縛られて両腕の自由を奪われたまま歩くさまは、囚人が犯罪者逮捕の瞬間かという感じた。市中引廻しですら馬に寄せてもらえるというのに。

なんてわが身の不遇を呪っていると、これまたデジャヴのように俺の前に現れた科学準備室。残念ながら到着してしまったようだ。扉の上につけられた札は、既に『超科学部』だ。にしても、きつたねえ字だな。

「君の趣味がああいうタイプの、おとなしい女性だとはね」

「意外だったかよ。いいだろ、俺がどんな青春を所望しようが」

天王寺美緒に関わる限り、いくら望んでも手に入らないけどな。

「意外ではないが、君が女性をリードするタイプには見えなかったのね。くつついた時にどうなるのか、興味は尽きない。それに言っただけだが、君の青春はここにある」

あるわけねえ。

それと、さらっとドキドキするようなことを言うな。話題転換話題転換、と。

「んで、具体性ゼロでわからんのだが、なんだよその『魔術に至る』って。科学部のくせに魔法使いにでもなる気かよ？」

ようやくロープから解放された俺は、手首についた縄の跡をさすりながら美緒に問いかける。縄の跡って、こんなもんに見られたら変態認定されかねない。それだけは絶対に避けるべきだ。

「君はなかなか物事の本質をつかむのが得意とみた。期待していた以上の逸材かもな」

どんな期待をされていたのなんて聞きたくもないが、ポイントを上げずに、役立たずの烙印とともに放流される日を夢見る俺としては大失態だ。株が上がってしまった。

「わけわからんわ。それ、科学じゃねえだろ」

「かのシェークスピアは言った、よく発達した科学は魔法と変わらない、とね。つまり科学は魔法への入り口足りうるというわけだ。科学部が魔法を目指すのはものの道理ということだよ」

驚きだ。しかももう一度言うが、美緒はあくまでも真面目なことから始末に負えない。

謎の攻撃と縄によるダメージのせいでまだふらふらする頭を抱えて起き上がり、俺はできるだけ情けない顔を作って口を開いた。

「あのな、魔法なんぞこの世にあるわきやねえだろ。あるんだったら、それこそこの世の科学者全員、明日から箒持つて黒猫抱えて月に向かって吠え始めるわ」

さらに言う。

「ってかよ、魔法があるんだったらその魔法で新人部員を創り出すなり呼び出すなりすりゃいいだろう。RPGの召喚魔法みたいに、『いでよ新人部い〜ん』ってよ」

言いきって、ドヤ顔で美緒を見て、はっとなる。

先ほどまで意気揚々と超科学部について語っていた美緒の肩がフルフルと震え、俯いて唇を噛みしめている。前髪のせいで目元はわからない。

言いすぎた。

先ほどの表情や何かで美緒が真剣なのはわかっていたはずなのに、さすがにこれはまずかったようだ。まじめに努力する奴に向かって言う言葉じゃない。

「あ、あの、悪い。言いすぎたっていうかあわあ！」

「君は天才だな！」

いきなり弾けるように顔を上げると、華が咲いたような満面の笑みでぐくぐくと肩を揺さぶってくる。どういうことだ？ 意味がわからんぞ？

「さすがはシュータローだ。いや、さすがの私もそのことには気がつかなかったよ。はは、素晴らしい、これでわが超科学部の基盤は盤石だ！」

手近にあった謎の像（どう見ても呪いの像とか邪神像といった感じだ）を振り回して、カオスの様な有様の部室を駆け回っているんだから、よっぽど嬉しいんだろうが、はっきり言ってマジでわからない。

「シュータロー！」

「お、おう！」

邪神像を放り投げた勢いで跳躍した美緒が、両手を広げて抱きついてくる。

同じぐらいの身長的美緒に抱きつかれると、ちょうど肩口に当たる柔らかいくせに張りのある幸せな二つの物体に、意識の九割が持つていかれる。このまま死ぬのも男子の本懐かと本気で考えてしまった。

「やはり私の目に狂いはなかったよ。さあ、忙しくなるぞ！」

そう言くと、子供のようにとび跳ねながら部室の中を駆け回っては、何やら様々な書籍をかき集め、いくつかの汚い巻物やら落書きのような紙切れを一か所にまとめた。おかげで、その他諸々のカオスを構成していた物体は準備室を追い出されて、科学実験室に飛び出して行ってしまったのだが、駄目だろとは言えない。そのぐらい嬉しいそうだ。

かくして始まった天王寺の謎の行動はその後一時間以上ノンストップで続き、下校を促す校内放送が流れるころには、科学準備室に書籍の皆の様なものが出来上がった。

時計を見ると既に六時を回っており、いつの間にかグラウンドからの喧騒もぶつとりと途絶えていた。窓からこぼれるオレンジ色の

夕日に、夏がそう遠くないことを感じる。

「君は意外とロマンチストなんだな」

「何だよいきなり」

本の壁の向こうから聞こえる声は少々ぐもっているが、決して勢いを損なっているわけではない。むしろ今日一番のはつらつとした声音に、驚きを通り越して感心してしまう。

「夕焼けを見て季節を感じる、これをロマンチストと言わずしてどうするね？」

「じゃあ、本気で魔法なんかを追っかけてるお前のほうがはるかにロマンチストだろ。つつか今何してんだよ？ 俺、帰ってもいいか？」

さすがにこんなところで二時間近くもボケっと座っていると退屈極まりない。だから、窓の外の景色なんかに見とれるような心の余裕ができたと言えなくもないが。

「そのあたりの本でも読んでいてくれたまえ。もう少しだ」

「残念ながら何が書いてあるのかさっぱりだ」

手近な本を手にとって開いてみたのだが、専門用語の様な言葉や見たこともない記号の様な文字が羅列してある書籍は、俺にとって絵を見ているのと同じだ。

「そうか。しかし、もう少しなので待っていてくれないか？ できれば今日中にこの実験は終わらせてしまいたいのだよ。明日が部員募集の締め切りだからな」

「なんでそんなギリギリで行動してんだよ」

「お願いだ」

「わーったよ。つつか、お願いすんならその紙出すな」

『くちごたえするな』が終始俺の目の前をちらちらと横移動している。どうにも、あの母親に刷り込まれた本能的な恐怖にあらがうことはできない。鉄は熱いうちに打てというが、まさにこのことだ。幼少期に刻まれた恐怖は今でもしっかりと俺を縛っている。

「ありがたい。持つべきものは部員だな」

「部員じゃねえって、だから」

「と、くっちゃべってる間に完成だ。うむ、我ながらなかなかの出来だな」

本の本の要塞の向こうに立ちあがった美緒は、何やら一枚の紙切れを取り出す。思わず母親の書いた二枚のうちどちらかではないかと警戒して、体がこわばってしまう。

しかし、どうやらそうではなかったらしく、天王寺が差し出してきたのはアレよりも規格の大きいA2サイズのコピー用紙で、びっしりと文字や数字が書き込まれていた。

「部室の前の札もそうだけどよ、字いへったくそだな」

「それだけは言わないでくれたまえ。唯一の欠点なのだよ」

唯一であるはずがないが、無駄な議論ほど無駄なものはないと熟知している俺は、美緒の差し出した謎のコピー用紙を一通り矯めつ眇めつしてから一言、こう言った。

「何これ？」

ひねりのない一言だが仕方がない。どれだけ見ても、何なのか全くわからなかった。

ある場所には化学式のようなものが書かれているかと思えば、その隣にはどこの国のものかすらわからない文字が書かれ、その頭の上ではとんでもなく長い数式が円を描いている。さらに反対側を見ているとヒエログリフとナスカの地上絵を足して二で割ったような図柄が記されていて、一見すると抽象画か何かの様だ。

「魔法陣だよ。これはその計算式というか、設計図だ」

これが？　と思わず首をかしげて見るが、横にしても抽象画は抽象画のままだった。むしろ、横にしたせいで謎の度合いを深め、この角度からではこれを描いた画家は発狂していたのではないかという推測まで出来てしまうほどだ。

「魔法というのはファンタジックで直観的なものと思われがちだが、その実、緻密な計算と繊細な力の制御を必要とする、一種のアートの様なものなのだよ」

「一種のアートの様なもの」の部分にだけ同意したのだが、美緒はそれを理解と受け取ったらしく、説明を続けられた。

「その計算に時間がかかったが、もう大丈夫だ。この魔法陣があれば」

くるりと紙裏返すと、なるほど納得だ。そこには「魔法陣」の言葉にふさわしい図柄が記されていた。

A2用紙を最大限に使った真円を最外郭として、その内側にはいくつかの幾何学模様が一定の秩序をもって並べられ、その周囲を謎の文字らしき記号らしきものがぐるりと取り囲んでいる。アニメなんかで見る、魔法が使われるときに空中に描かれる光の文様に近いものだ。これなら魔法陣と認定してやってもいい。

「新入部員は確保したも同然だ。名付けて、『新入部員カモン魔法』だ」

「うわ、ネーミングセンスが神懸かってんな」

もちろん皮肉意外の何でもない発言だったのに、美緒は得意そうに目を細め、唇の端を片方だけ釣り上げる。そして一言、

「だろう？」

とだけ言って、両腕で胸の谷間を強調する。

やっぱりこの女はわからん。

魔法？ 実験

微調整を加えることさらに数時間。美緒の言う「魔法陣」とやらが完成したのはよかったのだが、問題はそれをどうやって発動させるか、にあるらしい。

もちろん俺はそんなもの真に受けてはいない。じゃあなぜこんな実験に付き合うのかというと決まっている。魔法とやらが発動しないことを見届けるためだ。

「うーん、部員一人を召喚するとなるとそれなりの広さが必要だから、科学実験室では無理だ。机が動かせない。となると」

既に日も落ちた廊下は、怪談やら七不思議やらを信じていない俺でも不気味だというのに、美緒は何の気後れもない足取りでずんずん進んでいく。消火栓の赤と非常口の緑ぐらいしか明かりのない校舎を傲然と歩くマッドサイエンティスト。そんな光景は、B級ホラー映画のように見えなくもない。あ、サイエンティストじゃなくて魔女か。

『マッド・ウィッチ』なんて言葉あるのか？

「いま私の悪口を言わなかったかい？」

「言つてねえよ。それよかどうすんだよ。もう八時前だし、先生とかに見つかる厄介だろ。とくにお前の場合」

別に俺は大丈夫というわけではないが、こういう場合は有名人であればある程旗色が悪くなるのが定番だ。そういう意味で、美緒はこの学校で最も有名といえる。悪名だが。

「うーん、条件を満たす場所が限られるだけに惜しい。できれば魔法行使の際に魔力の補助となる力、たとえば電力や気の力が確保できるに越したことはないのだが、それを考えるとかなり限られてしまつてね。設備も超科学部のものだけでは心もとない。全く、科学部だというのに以前の部員は一体何をしていたというのだ」

むしろちゃんと科学部してたからこそ、お前が困るんだろう。

「じゃあ、技術室なんかどうだよ？ あそこならなんなりと機材あるだろうし、確か教室の後ろにスペースあっただろ」

助け船を出してみる。どうせ途中で抜けて帰れないのなら、さっさと終わらせてとっと帰るほうがましというものだ。

「名案だな。うん、あそこなら大丈夫だろう。さすがはシュータロ―だ」

人差し指をぴんと立て、窓から差し込む月明かりに頬を照らされた美緒の姿を、迂闊にもきれいだと思ってしまったが、そんな思いも長続きはしない。

相変わらず暗い廊下をしばらく歩くと、廊下の突き当たりに目的の技術室が現れる。

木工や機械工作を目的としている特殊教室で、その性質から防音や遮光性にも優れているうえに工作機械には事欠かない。悪ガキじやなくても子供心をくすぐられる場所だ。

その扉を前に、俺と美緒は立ち尽くす。

「ま、普通はそうだよな」

扉に手をかけて引つ張ると、がこんっ、という重い音がしてそれっきり扉は動かなくなる。当然だが、鍵がかかっているのだ。

「ちゅうこつて、今日の部活はここまで。惜しかったな、せつかくここまで来たのに」

まあ、魔法陣の実験というのにも興味がなかったと言えぶうそになる。魔法なんてものが実在すると考えるほど夢見がちではないにせよ、あの美緒ならもしかしたら、なんていう妄想に近い期待も全くなかったわけでは

ばきんっ

踵を返して帰りかけた俺の耳に飛び込んできたのは、鈍い金属音。まあ、この時点で何パターン化の想像はついていたのだが、その中に一つもハッピーエンドにつながるものはなかった、とだけ言っておこう。というか、すべてバッドエンドルートだ。

そしてもちろん、俺の隣にいる最狂にして最凶にして最強最悪の

魔女は、何の躊躇もなくその中で最悪のチョイスをしてくれた。

「さ、中に入ろうか」

「まで！ お前、何持ってたよ。ってか、何した？」

何した、って聞くのもおかしいが、それでも聞いてしまうのが人のサガ、情ってもんだろう。いくら目の前で扉のノブが無残にもぶっ壊され、いくら魔女の手にバールが握られていても、聞くのが人の道だと信じたい。

「扉を開けたただけだが、何をそんなに」

「驚くわ！ ってか、何やってんだ、これじゃ俺たち完璧に犯罪者だぞ。なんでバールなんか持ってた！」

「ちがうよ、バールノヨウナモノだ。そう報道しないと、バール業界からマスコミに対するクレームが」

「そんな業界はいい！ バールでもようなものでもどっちでもいいわ！ とにかく」

「大きな声を出すと、警備員が来る」

あわてて口をふさいで背後を振り返る。幸い誰かが来ている気配もなかったが、あらためて自分のコソ泥行為が後ろめたい。

「じゃなくて、んあゝ畜生。俺は無関係だからな」

「あはは、君はジョークのセンスもあるのだな」

バールを肩にかかけ、悠々と技術室に踏み込んだ美緒の背中はずか誇らしげで、こちらが間違っているのではないかという錯覚を引き起こされそうになる。

そこからの三十分は、とにかく速かった。

いつ見回りの教師（そんなものがこの学校にいるのかどうかは知らないが）が来るかもしれないという思いと、さっさと終わらせないと次はどんな事件に巻き込まれるかも知れんという焦りが、俺の身体能力を何割増しにしたのだろう。

気づけば、床には美緒が設計した通りの魔法陣が直径三メートルほどのサイズで描かれ、電源につながれたバッテリーとそこにつながる一対の電極が用意されていた。

時計を見ると午後八時を少し回ったところ。三十分ちよつとでこれだけの作業を終わらせたのには、さすがに驚いた。

「うん、上出来だ。これなら絶対に成功する」

「成功したらどうなるのかはあんまり想像したくないが、まあちやつちやつとやってくれ」

実に軽くそう言ったのは魔法なんてこれっぽっちも信じていなかったからなのだ。当然、結果なんて見なくても分かっているつもりだった。

「そうだな、もたもたしていて邪魔が入るなどもつてのほかだ。始めるとうかが」

言いながら、美緒は電極の片方を俺に押し付け、自分はもう片方を手に魔法陣を挟んでちょうど反対側に移動する。

「私の合図とともに電極を指定した場所に押し当ててくれたまえ。成功すれば陣に通電し、その電力を触媒として魔法が発動、新入部員が召喚されるというわけだ」

「わかったから、合図しろよ」

見回りの目を警戒して蛍光灯も付けられていない室内には、窓から差し込む月明かりと、電極につながるコンデンサの動作を知らせるLEDランプのわずかな明かりだけ。あとは夜を切り取ってきてそのまま詰め込んだような闇が、静かに沈殿している。

そのせいで、対面にいる美緒の表情はわからない。うつすら輪郭がわかる程度だ。

ある種の静謐さを感じさせる空気に、まさかとは思いながら息をのみ、はつとなる。

何か期待してたつていうのか、俺。あほらしい。こんな実験ごっこはとつとと終わらせて家に帰る、それだけだ。魔法も発動しなければ新入部員も来ない。俺も晴れて自由の身、万事解決だ。それが俺の予想であり、望みだ。

「では、召・喚！」

「へいへい」

勢いよく宣言した美緒に対して、俺は投げやり気味に電極の先つちよを、床に描かれた魔法陣に接触させる。本来は対極の端子を接触させて放電、通電する持ち運び用のコンデンサなのだが、それはもちろん間に電気を通す物体ないし電力を消費する抵抗あったのにとだ。電気を通さないものにくつつけても何も起るはずが、

パシッ！

端子の先に、火花が上がる。

弾けるような音とともに、端子の先端が光に包まれたかと思うと、その光はあっという間に床一面に広がって教室全体を光で包みこむ。「違う、光ってるのは、魔法陣？」

「おお！ 成功だよシュータロー。はは、超科学の、魔法の夜明けだよ」

美緒の声も耳に届かない俺は、茫然と目の前の事態を眺めるだけだ。

もう電極を触れさせていないのに光を放つ描線は、魔法陣そのものを宙に浮かびあがらせているように見えた。それだけではなく、魔法陣の裏側からも光が放たれているようで、その光が雲間に差した陽光のようにこちら側を照らしている。

光の帯が、教室に滞留した闇を切り取ってゆく。

その様はまるで、この魔法陣を境にして別のどこかにつながっているようで、

「マジで、召喚、するのか」

その声が聞こえたのか否かは定かではないが、美緒が高々とバールを掲げて宣言した。

「いでよ、新入ぶい〜ん！」

神様？ 召喚

「いでよ」の部分の子供向け魔法少女の様で縁起つぽいアクセントなのに、抑揚がいつもの美緒なのは違和感を禁じえない。が、そんなものは一瞬で吹き飛んだ。

目の前の魔法陣がひときわまばゆく光を放ち、一本一本の線を識別できないほどの光の塊になったところで、一気に教室中にはじけ飛んだ。

「うわっ、まっぶっし！」

とっさに目を覆ったがタッチの差で間に合わず、目を閉じた瞼の裏には、フラッシュの焼き付けのような赤い染みがじわじわと動き回っている。

「やった、成功だよ。見たまえシュータロー、新入部員だ」

喜んでいるのはよくわかるのだが、それでもなお声の抑揚に乏しいというので、声しか聞こえない俺には一瞬どっちなのか判断がつかない。めんどくさいやつだ。

「成功？ なんも見えねえんだが、マジで魔法なんてあんのかよ。そっちのが驚きだわ」

瞼を開いてもまだぼやけて自分の掌も見えない有様だが、とりあえずあの一瞬に教室を満たした強烈な光はなくなったようだ。明暗のギャップで、今は先ほどよりもずっと教室が深い闇に閉ざされている。真っ暗闇だ。

「んあゝ、なんも見えねえ！ おい美緒、ほんとに成功したのかよ？」

確かに魔法とやらは発動したようだが、はたしてそれが召喚魔法だったのかどうか、そして成功したのかどうかとなると、どうしても半信半疑になってしまう。確かめようにもこの視界では何を見ることもできない。仕方なしに、先ほどまで美緒の立っていた方を声だけを頼りに特定して、足を進める。

両手を前に突き出して探り探りのゆっくりな足取りの中、徐々に光が戻り始めると、数歩向こうで仁王立ちをする美緒らしき人物のシルエツトが薄らと浮かび上がる。

「おい、成功したって」

見えたことが油断につながった、とは何ともお粗末な話だ。

うっかりそれまでよりも雑に一步を踏み出し、そのつま先が見事に何かに引っかかる。「うおわっ！」

慌てて体制を立て直そうとするが、完全に次の一步を踏み出すつもりだった体はいとも簡単に重力に惹かれて崩れ落ち、

「わきゃあ」

床との激突を覚悟していた俺の顔面を襲ったのは、何やらぽによつとした感触だった。

「ぽによっ？ んだこれ、何も見えん」

倒れたのは間違いなく倒れているのだが、床ではなくどうやら何かを下敷きにしているらしい。柔らかくてふかふかしていて、クッションや布団のような気もしたが、それにしても程よい暖かさや質感もある。

布というよりは生き物の上にいるような感じだ。そう思っている
と。

「ううゝ、お、おもいよゝう」

呻き声は何やらもごもごと訴えかけてくる。

「ん、喋った？」

頭上からの声に目を向けると、うつすらとした輪郭とその中に納まる二つの光が見えた。それが顔の輪郭と瞳だと気づくのは、さほどの時間はかからなかった。

俺の下に、人間がいた。さっきまではいなかった、よな？

「だれ？」

「ううゝ、いいから退いてよお。お、重い。つぶれちゃうよう」

蚊の鳴くような声に、あらためて自分が誰かを下敷きになっていることを実感して、慌てて飛びのいた。このころになるとようやく元

通りの視界が戻ってきて、正面で誇らしげに仁王立ちしている美緒の表情ぐらいなら読み取れた。

が、今問題なのはそちらではない。

「なんでいきなり下敷きなのよう。うゝ、腰打ったよう」

もそもそと足元で動いているのは、小さな女の子だった。

つややかな黒髪は夜の闇よりも深い黒なのに、月明かりを受けてきらきらと輝いている。顔立ちこそしかめっ面なのでわからないが、小さな口やほっそりとしたあごのラインは人形のようなうだ。

素直に、かわいらしいと思った。

「ひどい目にあったよう、もう。いたたたたた……ん？」

目があった。

透過通った水晶のような目は、じっと見ていると吸い込まれそう。本当にお人形さんのガラスの目玉のように艶やかだが、妙に愛嬌があるくりつとした瞳が特徴的だ。

「えーっと、これは、えっと、えっと……」

こちらの存在を認めると、それまでぐずぐずとへたり込んでいたのから一変してキリツと立ち上がり、たすき掛けにしてぶら下げられたポシェットから取り出したメモ帳を読みふけている。

まったく意味不明な行動にこちらがきょとんとしていると、お目当てのページを見つけたらしい女の子はふんふんと頷き、釣り上げられた口角をそのままに大きく口を開け、

「はぷっ」

「うごお！」

噛むな！ 首筋をかむな。痛い、むちゃくちゃ痛い、かなり全力で噛まれている。

「いだだだだだ！ 痛い、いだい、何すんだ、この、いでえええええ！」

力ずくで引つpegがそうとするが、相当な力で噛みついていようように、引つ張ってもむしろ歯が体に食い込むだけだ。痛い、とにかく痛い。

このまま首の肉を持っていかれて俺の命は終わるんだ。やっぱりこんな口でもない部活の口でもない実験につきあったのが運のつきだったのだ。美緒が召喚したのは新入部員なんかではなく、吸血鬼や悪魔の類で、俺はその生贄としてまんまと連れてこられただけだったのだ。悔しいが、そう考えるとすべてのつじつまが合う。くそう、自分の軽率さが今になって悔やまれる。遅いけど。

軽率さの代償が命という、何とも割の悪い取引を半ば強引に自分に認めさせ、最後にせめて美緒に呪いでもかけてやろうとありったけの怨念をかき集めたところで、

「ぶはあ」

首筋から少女の口が離れる。うああ、なんか鎖骨のあたりがジンジン熱い。

「うん。で、この次は、えと……」

再びノートに視線を落として読みふける。何だこれ？ っていうか、首痛い。

「あ……ああ！ しまった、間違えちゃったよう。うわあどうしよう、どうしよう」

一人で大慌てして、キョロキョロしたりメモのページをめくってみたりと忙しそうだった少女は、俺と目が合うとやたらとおびえたように体を縮こまらせた。そう言えば、なんか間違えたと言ってたけど、それと関係あるのか？ まあ、間違いじゃなくても首筋を噛むのは解せんが。

「どうしよう、願い事なんて聞いたことなかったから、やばい」
全体的に幼い顔立ちも手伝っているのだろうが、慌てる様子が何やらコミカルだ。ただし、顔のつくりは驚くほど端正で、何度も言うがよくできた人形のようなだ。

「さっきから何言ってた？ てか、こんなとこで何やってんだ？」
ほんの少しの沈黙だったが、慌てる姿もどこかほえましい。

そんな混乱を見かねたのか、それとも単にグダグダ感に耐えかねたのか（おそらく後者だろうけど）美緒が少女に近づいて名乗りを

上げる。

「ここは満貫寺高校。我々は超科学部の部員だ。ちなみに私が部長の天王寺美緒だ」

お前、部長だったのか、ってそりゃ一人しか部員がいなきゃ必然的に部長だわな。

「そっちが我が部のホープにして奴隷、千古修太郎だ」

おい。

「あ、あ、うん。よろしく」

あれ？ 意外にもあっさりと会話してるぞ？　ってか、これは召喚魔法成功ってこと？　頭の中で一人会議を開催していると、美緒が何やら少女をたぶらかし始めた。

「ようこそ超科学部へ。君が何者かはさっぱり分からないが、君はもう立派な部員だ。我々とともにめくるめく青春の日々を謳歌しようではないか」

高らかに、自信満々に宣言しているが言わんこっちゃない。いきなりのテンションについてこれない少女はきょとんとしてしまっているぞ。そもそも、呼び出していきなりお前は部員だなんて、百人中百人がそんな説明わかるはず

「わかったあ」

「わかんのかよ！」

しかもなぜか、意を決したように小さく拳を握って、頷いたりしている。

「君はいちいち突っ込みの細かい男だな」

「そりゃ突っ込むわ。ってか、まずその子誰だ？　なんで俺いきなり噛まれてんだ？」

回答を求める視線を少女に投げかけると、視線を避けるように見事なスウエー動作を見せる。いや、避けられても困るんだが。

「ふむ、確かに何者かぐらいは聞いておいても不便はないか」

「ってか、名前ぐらい聞けよ。なあ力ナメ」

ん？　俺、今なんつった？

「えと、その、もう知ってるんだから……いいじゃん」

自信なさそうに俯いて唇を尖がらせている。何かに似ていると思っただら、うちの店に来る親子連れの、子供がすねている姿にそっくりだ。

「いや、いくら神様だからっていきなりそんな不条理が通るわけがなん？　ん？　なに？　神様？　なんだそりゃ。」

「シュータロー、いきなり何を？　というか、彼女はカナメ君というのか？」

待て待て待て、俺に聞くな。俺だって初対面だって言うのにカナメが神様だなんてこと知ってるわけが、って何だ、なんでこんなことが俺の頭の中にわいてくるんだ。

「ちよ、え？　何？　何だこれ、なんで俺がお前のこと知ってたんだ？」

言うまでもないが、目の前でしょぼくれている少女とは初対面だ。それは間違いない。なのに、考えるまでもなく名前や、この子が神様であることがすらすらと出てくる。デジャヴとも違う、奇妙な感覚に錯乱状態に陥りながらも、何とか冷静に、冷静にと自分に言い聞かせる。もちろん、冷静になんてなれるわけがない。

「わ、わたしは、神様だよ。呼び出しておいてひどいよう……いきなり踏んづけられるし。おかげで、間違えてこいつを下僕にしちやったよう」

自信なさげに右に左に泳ぐ視線に、こちらまで不安になってしまふ。それでも、カナメと名乗った自称神様はおもむろに上目づかいに俺を見つめ、勿体ぶって呟いた。

「へえ……それで、間違えて、なんておっしゃったわけだ。で、俺、下僕？」

「そうだよ。願い事を、叶えてあげようとしたのに」

「へえ、願い事を……かなえようとしてくれた、んだ」

「惜しいことをしたね、シュータロー」

召喚魔法に、神様に、下僕？　もう、何が何やら勝手にしてくれ

って感じだ。俺の理解の許容量は大幅にオーバー。器は爆散してして跡形もない始末だ。願い事って、んなこと今更言われても、って感じた。でもこいつが嘘を言っていないことは、頭の中でしっかりと裏付けられている。裏付けのないものに、だけどな。

とりあえず俺は、がくりと肩を落としてうなだれておいた。いや、そうしないと体と心のバランスを保つことができなさそうだったから。やるかたない。

「というわけにございます」

必殺のアイアンクローにひとしきり悶絶して床を転がったのち、与えられた弁明の時間をフルに活用して事の顛末を説明し終えた俺は、目の前の悪鬼、もとい、おかんの反応をうかがう。コーヒーカープを傾ける無表情に、一秒毎に命を削られる思いだ。

「ですので、その、俗に言う不純異性交遊や、ましてやいかがわしい幼児性愛趣味などを持ち合わせているわけでは」

「カナメちゃん、つつたっけ？」

「は、はい？」

おい、もつと平身低頭、相手の出方を伺え。ワンミスで俺の命がなくなる局面だぞ。

「あんた、神様なんだって？」

「うん。そういうことに、なってるよう。でもお、何ていうかそんな感じ」

どこまでも自信のなさそうな口ぶりは本当に神様なのかどうか疑わしいが、俺の頭の中ではそれが事実として定着している。リングがリングゴであるように、カナメは神様なのだ、俺の中ではな。

「ふうん……神様、ねえ。そっか、神様なんだ」

「な、なによ？」

「そのへんの真偽はさておいて、こいつが魔法陣から出てきたのは間違いないわけで」

「あんたにや聞いてないよ」

「御意」

視線の圧力だけで心をへし折ると、再びおかんの鋭い視線が力ナメを捉える。

「なんだかよくわかんないけど、魔法で呼び出されて、手違いでこんな役にも立たないのを下僕に従えちゃって、家までついてきちゃったわけだ」

「うん。そういうことに、なるかな。本当は、呼び出されたら願い事をかなえてあげなきゃいけなかったんだけど、その……間違えて違うページを見ちゃって」

そういえば出てきて早々にメモ帳見たり、間違えたとか何だとか言ってたな。本当に大丈夫か、この神様？

「で、あんた行くあてとかあるの？」

「ううん、これから探さなきゃ。ここは多分人の世界、人界なんだろうなっていうのはわかるんだけど、こっちに来るのは初めてだから、焦って様式も間違えちゃってえ……」

困ったように俺を見る。タヌキのポシエットをいじる姿は、小学生程度にしか見えない。お、おい！俺を見ながら目をうるうるさせるな泣くな！

「シュウのお願い事をかなえないと、帰れないし……」

そんなルールなんだ。あ、いや、そういわれればその情報も頭の中にあるな。どうなってんだ俺の頭？

「おい、シュウ」

「はいっ！」

全ての思考をサスペンド。軍隊顔負けの素早さで返事をする。もちろん背筋はピンと伸ばし、体の真ん中を貫く鉄の芯を想像する。直立不動の基本姿勢だ。家の中なのに。

「この子呼び出したの、お前なんだろ？」

「まあ、正確には美緒……天王寺のやつだけど」

「おいてやる」

は？

「だから、この家においてやるって言ってるの。文句あるの？」

「滅相もございません！」

あつたところで自動的に却下された上に二度と逆らう気が起きない体にされるだけだ。

もうそんな体に仕上がってるけどな。

「ま、実際あたしも話を全部鵜呑みにして信じたわけじゃないけどさ。かといって嘘だからって追い出すわけにもいかんだろう、こんな時間に。女の子一人」

時計を見ると、日付変更まであといくらもない。たしかに、神様であるないに関わらず、女の子が一人でうるつく時間ではない。

「ってわけだから、泊ってきな。えーっと、あんた名前は？」

「カナメ」

「カナメちゃん。あたしはこのバカの母親で、華美。よろしくね」

差し出されたおかんの手を、おぼつかない手つきで握り返したカナメだが、それでもその瞬間ちょっとだけほっとしたように見えた。

誘拐？ 事件

「なんでお前がここにいる？」

「それはこちらのセリフだと思うのだが。授業はどうしたね？」

まったくもってお互いさまなので、あえて突っ込まずに手近な椅子に腰かける。

科学準備室。

相変わらずのカオス空間を見渡すと、何やら魔法陣の試し書きのような紙がそこらじゅうに散乱していて、新人画家のアトリエの様相も加味されている。まさか、昨日あれから帰ってないのかこいつ？

「美緒、お前授業ちよくちよく学校休むと思ったら、こんなことしてたのかよ」

「そのことに関しては訂正しておこう。授業など私にとっては余興でしかない。ちなみに、学校に来ているかどうか、という意味では私は皆勤賞だよ。土日も」

しかもこの女、出席しても教室ではいつも授業に関係のない本を読んだり寝ていたりするくせに、この間の中間テストの成績は学年上位という、教師からすれば何とも鼻つまみな存在だ。まじめに出席してノートを取っている俺が真ん中あたりをうろろろして、うっかりすると下位グループというのは解せない。世の中間違って

いる。

「まあそれはさておき、連れてきたのかね？」

美緒が指差したのはおれの隣、所在なさげにおどおどと立っている力ナメだ。

俺は力ナメを学校に連れてきた。いや、正確には、連れてこざるを得なかったため、教室に直行できなかったのだ。

「仕方ねえだろ、離れられねえんだからよ」

「ほう、これはまた朝からお熱いことだね。たったの一晩でそこまでの関係になるとは、愛の力というのは偉大なものと」

「違う。そういう甘ったるい意味じゃない。本当に離れることができない、距離をとることができないんだ。物理的に、空間的に」

変な誤解が生まれる前にその芽を摘んでおく。とくにこういった問題は早期発見早期対処が基本だ。が、さすがの天王寺美緒をして俺の言っていることは俄かには信じられないらしい。そりやそうだろう。俺だったら間違いなくそいつの脳を疑って憐れむ。

「ま、口で言ってもわかんねえと思うから、見てろ」

「ん？ うん、見るというのなら見るが？」

美緒の返事を待たずに俺は回れ右をすると、全力で床を蹴って廊下に飛び出した。準備室を飛び出してすぐに『廊下を走るな』の張り紙があつたが当然無視。朝日の差し込む授業中の廊下は、現実から切り離されたように静まり返っている。

その中を俺は走りぬけた。そこそこに本気の疾走で。

生物実験室を通り過ぎた所でちよつと減速、角を曲がって隣の特殊教室棟への渡り廊下に差し掛かった。窓から差し込む光を目指して再び加速し……と、そこで視界がぐにやりと歪み、

「というわけだ」

「ほう……これはすごい。確かに、離れられない関係、だな」

俺は再び科学準備室にいた。

もちろん、走って戻ってきた過程を省略しているわけではない。

ちゃんと角は曲がったし、渡り廊下に向けて走った。なのに、次の瞬間の俺の視界には、科学準備室としての機能をほぼ失いかけている力オスな空間が広がっている、というわけだ。

駒落としての映像で次の絵を間違えたような、とでも言えば分かりやすいかもしれない。

「いきなり現れたように見えたが」

「多分それでいいと思うぞ。俺はついさっきまで渡り廊下んここにいたからな」

「ワープだな、まるで」

そう、これが俺がカナメから離れられないといった理由。

「どうやら、一定距離以上カナメから離れられないらしい。今朝もそれで大慌てだった」

今朝は本当にびっくりした。なにせ、学校に行こうと家を出て、しばらく歩いているといきなり家の中に戻っていたのだから。しかも土足で。オカンに意識が飛ぶほどブツ飛ばされたのは言うまでもない。が、さらに問題だったのは、カナメの説明だ。

「わ、私はシユウを下僕にしたからあ、そのう、勝手に離れたりできないようになっていて、だから、逃げ出そうとしても戻ってくるようになってるんだよう」

「ってことらしい。しかも、カナメは自分ではこの状態を解除できないらしい」

「メモ、し忘れてたみたいなんだよう」

「何ともお熱い関係だね、君たちは」

「お前、今の話聞いてたか？」

ほくそ笑みながらマジマジと俺とカナメの二人を見つめ、美緒は何やら考えているようだが、どうせ口くでもないことだろうから、俺は話を進める。

「で、ここに来たわけだ。学校サボったらかーちゃんにぶつ殺されるし、でも教室にメイド服着た女の子なんか連れてけねえだろ」

カナメはなぜかメイド服を着ていた。というのも、我が家には女の子用の服というのが皆無で、唯一タンスの奥に眠っていた、店の開店イベントで使ったメイド服が唯一カナメの着られる服だった、というわけだ。ちなみにカナメが最初に着ていた着物のような不思議な服は、今朝がたおかんが思いっきり洗濯機にぶち込んでたが、大丈夫なのか？

もちろん正門を通って堂々と登校もできないので、校舎裏にあるフェンスの裂け目を潜り抜けるといふ裏ワザで学校に侵入している。「説明としてはわかったのだが、それでなぜここに？」

「いやいや、どう考えてもこうなったのは昨日の魔法実験が原因なんだから、解決しようと思ってここに来るのは普通の考え方だろ」

「解決？ 何か問題があるのかな？ 特にそういったものは認められないと思うが」

さらりと言つてのける表情は、本気でそう思っているようだ。それどころか、なぜおれがそんなことを考えているのが疑問だと言わんばかりの疑いに目を向けてくる。頼むから、首をかしげてアホな子供を見るような表情をするのはやめてくれ。

「大ありだろ！ お前、どんな思考回路してんだよ。どう考えても不便だろ！」

「そうかい？ 美少女メイドが四六時中べったりと付き添ってくれる生活など、思春期真っ盛りリビドーいっぱい夢いっぱい男子にとっては、むしろ願ったりかなったりの環境ではないのかね？ そもそも、デメリットは何だね？」

たしかにその物言いだけを聞いていれば、これほどハーレムで男心をくすぐる設定もない。が、それはあくまでも言葉のマジックではないことも、実体験済みだ。

「あんな、どこに行くのも絶対一緒って、既にデメリットだろ」

この呪いの場合、中心はあくまでもカナメであり、俺はその付随物、おまけなのだ。先ほどのように俺が遠ざかれば強制的にカナメのところに戻るが、カナメのほうから離れて行った場合でも、俺はそこに強制的に呼び寄せられてしまうのだ。

「しかし、その瞬間移動はどちらなんだろうな」

「どっちって、何がだよ？」

「大別して、瞬間移動というのは二種類あるといわれている。空間移動方式と、空間置換方式だ。私個人としては後者のほうが現実的だと思っているのだが、カナメ君は神だから何があってもおかしくないだろう。というわけで、実験を」

「やらねえよ！ どっちでもいいわ。それよか美緒、さつさとこの呪いをといてくれ」

「呪いだなんて、ひどいよう」

ギョツと両手を握ったカナメが、半泣きの目で訴えかけている。

なんでお前がここで必死になつてんだ？ 多少の驚きとともに見つめてみると、カナメは急激に顔を真っ赤にしてしまった。項や耳まで真っ赤にしてしよばれる神様つてのも滑稽だ。

「お前の魔法なら何とかできるだろう？」

「無理だね」

即答かよ。

「そもそも、魔法というのも万能ではない上に、私に使えるのは召喚魔法のみだ。今はまだ。まあ、因果律から神の力から何でもかんでも断ち斬るインチキのような剣でも呼び出してくれというのならやってみないでも」

「やめておこう。世界の終末が目に見えるようだ。にしても、なんだこの不便さは」

「あ、あああ、怒らないでよう。私だつていきなり呼び出されちゃつて、びつくりしたんだもん。願い事のために呼び出されたのなんて初めてで、だから、その……」

唇を尖らせて、こちらの様子をうかがっている。くそう、無駄に仕草が可愛いぞ。

「まあ大丈夫だ。実害はないのだろう？ のんびり構えてキャツキヤうふふしていれば」

「見つけましたよ、誘拐犯」

勢いよく扉が引き開けられる音とともに放たれた一言は、見事にその場のグダグダな空気に張りを与える。ツヤは与えてくれないが、そして、そんな空気が一瞬にして凍りつく。そりゃそうだ。扉を開けたのが鳩時計だったら、誰だつてそうなる。

「時計から、足がはえとるな」

時計といつても多種多様だが、目の前にあるのは人間一人がすっぽり入るサイズの巨大な鳩時計だ。そこから生えている手足がすらりと長くて細い。その部分「だけ」を見ればモデルも真っ青だが、ほかの部分を見れば違う理由でモデル以外も真っ青だ。

ぱっぱー、ぱっぱー

「もう九時か。今日は一時間目は諦めたほうがいいようだね、シュータロー」

「だな」

「見つけましたよ、誘拐犯」

鳩時計のてっぺん、ハトが飛び出す扉が開くたびに、そこから顔が見える。どうやらそこがのぞき穴になっているようだ、それだと一時間に一回しか外が見えなくて不便だろう、と突っ込んだりはしない。こんなことを突っ込んだら、鳩時計コスプレそのものを認めてしまうことになる。許されざる非常事態だ。というか、非常識事態だ。

「でだな、俺としてはさすがに教室にまでカナメを連れていくわけにもいかんだろ」

「無視をなさらないでください。意外と傷ついてしまいます」

「自分で鳩の扉開けにやまともに顔も出せないようなやつ、相手にするわきゃねえだろ」

しまった、相手をしてしまった。もろに鳩時計の中のやつと目があってしまったが、それもすぐに扉が閉まって見えなくなる。

「ごそごそ手が動いて、何とももどかしく宙をつかんだのは同じところを行ったり来たりしている。何がしたいのかわからん。」

「もしかして扉を開けたいのではないか？ 手伝ってやりたまえ」

「まじかよ？ 相手したくねー」

と言いつつも、さすがに一回突っ込んでしまっているので無視するのも忍びない。俺は親切にも鳩時計に近寄り、ハトが出てくるころの扉を開けてやる。あ、ちゃんと木製だ。凝ってるな。

「見つけましたよ、誘拐は」
「パタン。」

「何をなさいます？ 開けておいていただかないと会話が成り立ちません」

「やかましい。いきなり現れて何が誘拐犯だ。ってか、鳩時計に誘拐犯呼ばわりされる覚えはない。通報されなくなかったらとつと去

れ」

「盗人猛々しいとはまさにあなた様のことでございますね。私とい
たしましては一刻も早く貴方様に制裁を加えたのちに。と、それよ
りもカナメ様、カナメ様はいずこに？」

いきなり何かに気づいたようにきよろきよろとし始める鳩時計だ
が、そのでかい図体で動き回るな。ただでさえサイズがでかいのに、
動くと装飾やらなんやらが引っ掛かりそうになって危ない。

「目の前にいる！ 動くとかナメを轢いちまうぞ。って、あんた力
ナメの関係者か？」

今更ながら、俺の知り合いに鳩時計を着るような女はいない。美
緒ならこういう知り合いの一人や二人いてもおかしくはなさそうだ
が、先ほどの反応は他人のそれだ。となると、必然的にこの氣ぐる
み女はカナメの知り合いということになる。

「ナイアガラはカナメ様の付き人であり保護者であり身元引受人も
買って出ております。わかりやすく申しますなら、恋人でございま
す」

「ち、違うもん！ こ、こい、びとなんかじゃ。ね、違うんだから
ね！」

「いや、俺に向かって力説せんでも。そもそもどっちでもいい」

「ふええ〜。ひどいよう」

「で、その辺はいいとして、あんたが」

「ナイアガラ、でございます。人界の方が軽々しく声をかけてよい
ナイアガラではございませんが、それだと会話が進みませんので親
切にも返事をして差し上げます。ああ懐の深いナイアガラ。それで、
なんでございましょう？」

めんどくさいやつだが、とりあえず今は我慢だ。冷静になれ、必
要なのは冷静さだ。

「ナイアガラさんは、カナメを連れ戻しに来た、ってことでいいの
か？」

「ふえ？」

カナメが素っ頓狂な声を上げる。いや、そこはお前が疑問に思うなよ。

「左様にございます。本来ならば、人界のものが軽々しく声をかけてよいナイアガラで」

「そのくだりはわかったから」

「情緒を解さないのでございますね、人界の方は。と珍しく非難がましいことを考えたことは内に秘めたままお答えいたします。半分正解といったところでございましょうか」

「半分？」

澄まし顔でナイアガラはすつと目を閉じるが、いかんせん鳩時計を着ていてはどんな演出も効果を發揮しない。というか、ずつと扉を開けているのはそろそろめんどくさい。

「ええ。残り半分はあなたでございますよ、誘拐犯」

びしっ、と指つされたので、思わず扉から手を離してしまう。パタン。

「ちよつと、何をなさいます。卑怯でございますよ」

落ち着いた声音とは裏腹に、慌てて扉を開けようとしているようだが、先ほど同様にうまく開けられずに手がおろおると宙を泳いでいる。

もちろん、そんな光景を見た俺が導き出す答えは一つだ。

「さーって、二時間目までたっぷりあるし、食堂にジュース買いに行くかな」

「私はカルピスだ」

「似合わねーもん飲んでんじゃねえよ。つつか、さらつとパシらせんな」

「あ、あたしは、おしるこがいいんだよう」

控えめに手を挙げて、人差し指をくわえたカナメが申し訳なさそうに要求する。だから俺は優しい笑顔を作つて頭をなでてやる。

「おめーは来るんだよ。さもないと俺は食堂にたどりつけん」

「あっ」という顔をした直後に、失敗に顔を真っ赤にして俯いて

しまう。どうやら本当に気づいていなかったようだ。

「やれやれだぜ」

ため息がこぼれたが、とりあえず今だけは逃避しておく。

背後で何やら文句を言いながらドタバタと動き回る鳩時計という、非常に彩られた非現実から。こんなもん、誰が現実だって認めてやるか。

食堂の自販機で俺はカルピスとおしるこ、そして自分の缶コーヒーを購入し、その場でコーヒーの缶を開ける。おしるこはカナメに渡してやったが、熱々の缶を両手で持てあましているようで、落としてしまわないか心配だ。

ただ、そっちに気をまわしてやれないのっぴきならない事情もある。

「つつか、付いてくんやな」

「どこまでも付いてまいります。私には大事な使命がございますゆえ」

食堂のテーブルに腰を下ろした俺の向かいには、鳩時計を着たまのナイアガラが堂々と仁王立ちしている。サイズがでかすぎて食堂用の丸椅子には座れないらしい。

「俺が誘拐犯ってどういうことだよ？」

缶コーヒー独特の、ちよつと酸味の強い味が口いっぱい広がる。

「どうもこうもございません。あなたには、カナメ様の、つまり神様誘拐の容疑がかかってございます。というわけで、私はあなた様を確保せねばなりません。おわかりいただけますか？」

「いただけねえな」

「では、おとなしく私とともにおいください。貴方様には黙秘権も弁護士を依頼する権利もございませんのであしから」

「まてまて、いただけねえつつてんだろ。人の話聞けよ」

まったく、どうして俺の周りには人の話を聞かない奴しか寄ってこないのかね？

「何がご理解いただけませんでした？ 黙秘権についてでございますか？」

「違う。その前、俺が誘拐犯だつてとこがそもそもただけねえの」「これはまた異なことをおっしゃいますね。カナメ様の姿が突然掻き消え、人界に強制的に呼び出されたかと思うと一向にお戻りになられません。これを誘拐と申さずして、なんと申しましょう？」

たしかに、そのくだりだけを聞けば文句の一つも言えない気がする。だがそれでも、

「俺は誘拐なんかしてねえし、下僕だかしもべだかにされたのも勝手にやったことだ。俺はむしろ被害者だ」

「なんと……いや、騙されません。そのような戯言で私を謀ろうとするなど、言語道断でございます。願い事を叶え終わったらすぐに神界に戻るはでございます」

「しんかい？ ああ、神界ね。はいはい」

神界。俺たちの住む人間界とは別に存在する神様の世界ってことらしいけど、知らない間にかこういう知識が刷り込まれているのは、なんだかむずがゆい。

「嘘じゃねえし。なあ、カナメからもなんか言ってやってくれよ、このままじゃ俺、誘拐犯扱いだ」

ようやくプルタブを開けることができたカナメは、ホクホク顔で中身をすすっている。あんまりにもうれしそうだったので、「ちゃんと缶振ったのか？」とは聞けなくなる。

「修太郎は、誘拐なんかしてないよう。あたしが手違いで下僕に、しちゃった、から」

「マジでございますか？」

「マジ、なの……突然のことではびっくりして、その、手順間違えちゃってえ……」

もじもじと申し訳なさそうにうつむきながらも、おしるを嚙るのはやめない。よっぱど甘いものが好きなんだろう。ただし、空いた方の手で、ポシエットから取り出した例のメモ帳を差し出してい

る。開かれたページに視線を落としたナイアガラのかめかみが、びっくりするほど痙攣している。血管はじけ飛びそうだぞ。

「なんという軽率なことをなさったのですか。カナメ様は神様でいらつしやるのですから、もったご自身の御役目というものに責任をお持ちになってくださいませ。たったの一晩でもあなた様がいらつしやらなかったおかげで神界はそりゃあもう芋の子を洗うような大騒ぎでございましたのに」

「たぶん日本語間違つとるぞ」

「それは、わかってるよう。でもでも、あ、あたしだって予想外つて言うか」

神様の世界でも大騒ぎになるのか。俺には全く想像もつかない話なので、とりあえずは傍観を決め込む。おかげで缶コーヒ―はあつという間に空っぽになってしまふ。こんなことならサイズのでかいお茶やコーラにでもすればよかった。

「そのようなご無体を……しかし、問題なのは何よりもかような下賤のものが、カナメ様から離れなくなってしまったという由々しき事態の方でございますね。むしろ私とそういう関係に……」
「ごによ

「んなこと言われたつて、俺だつて離れられんなら今すぐ離れるつーの」

「ええー、シュウひどいよう」

「やかましい。誰が好き好んで」

「でもでも、だつて、あたしだつて、その……」

「と、お話はここまででございます」

鳩時計がクルリと回れ右をし、カナメを背中にかくまうように両手を広げる。

何やらただならぬ気配を感じた俺は、息を殺してじつとナイアガラの視線を追う。鳩時計のせいで顔は全く見えないが、多分この変だろうとあたりをつけて睨む。

そのとき、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

と同時に、ボタンという音がして再び扉が勢いよく開き。
ぱっぽー、ぱっぽー

鳩が飛び出す。

「九時半、でございますね」

「俺の緊張感、返せ」

また？ 召喚

そして再び部室。

二時間目の授業にはさすがに出ておきたいという俺の要望は、鳩時計の問答無用の一言で却下された。何が「世界の危機と授業、どちらが大事ですか？」だ。俺にとっては授業に出ない〃おかんにブツ飛ばされるほうがよっぽど危機だ。俺という一つの宇宙の。

「では、整理をしまいましょう」

「その前に、その鳩時計をどっかに片付ける。邪魔でせまつくるしい」

「むう……ぎゅうぎゅうだよ」

ただでさえ狭い科学準備室は、美緒による占拠以来、超科学部の備品と称するがらくたによってさらにその空間を圧迫されている。

そこへ来て、超巨大な鳩時計の着ぐるみなんかを置いた日には、満員電車並みの人口密度になってしまふ。いまも、すぐ隣のカナメの腕が俺の太ももに押し付けられている。しかも反対側には、

「ん、確かにこれは狭いな。というわけでシューター、この着ぐるみを実験室のほうに動かしてはくれまいか？ そうしてくれれば、肘で胸の谷間を堪能していることについては不問に」

「んなこたしてねえ！」

とは必ずしも言えないまでも、そこには決して劣情やら破廉恥やら青春の熱き血潮などは介在しない。仕方がないのだ。この狭苦しい空間で、他者と触れ合わないなどというほうが無理なのだ。不可能なのだ。だから、この程よい弾力と柔らかさに包まれた右腕の感触を一秒でも長く、なんてことは微塵も思っていない。断じて。

それを証明するように、俺は鳩時計の着ぐるみを抱えて、泣く泣く準備室から実験室に移動させる。にしてもこれ、むちゃくちゃ重いぞ。本当に木で作るなよな。

「変態でございますね」

「ちっげえ！」

準備室に戻った俺に浴びせられた第一声は、ナイアガラによるその一言だ。しかも、道端のごみをみるような、蔑みの視線というオプシヨン付き。

「ぴと」

「ん？」

心をえぐる精神攻撃に深い傷を負っていると、カナメがすぐ隣に寄ってきて、何やら俺の腕に抱きついていてる。

「何をやっ取るんだ？」

「だからその……み、美緒が終わったから、つ、次はあああたしの番、かな、って」

「すまん、よくわからぶえ！」

後頭部に凄まじい衝撃を感じ、とっさに床に手をついて体を支える。あまりに強すぎる衝撃のせいで思考はぐらぐらと揺れたまま、世界は震度二か三といった感じた。

「ってえな！ 蹴ることねえだろ。つつか何で蹴るんだよ！」

振り向くと、案の定ナイアガラがこちらに靴の裏を差し出して、先ほどのごみをみるような視線に殺意と呪いをプラスしたような、とんでもない視線をぶつけてきていた。

「ふん、でございます。この蹴りの意味がわかりにならないようでしたら、わかるまで蹴り続けて差し上げますよ」

さすがにそれは勘弁だ。こんな重い蹴り、おかんでも滅多に打つてこない。この時点で、ナイアガラは超一級の危険物として認定しておく。同列の危険物（人物、ではない）としては、おかんと美緒のほか、ICBMやゴルゴサートーティーンが名を連ねている。

なぜかしょんぼりと俯いているカナメを横目に、俺は美緒を促した。こういう場合、俺よりもこいつの方が的確に事態の核心を捕まえるだろうから。にしても、カナメのこの姿はたった一晚とちよつとの間なのに、もう定番のようになってしまっている。よっぽど引っ込み思案なのだろう。神様のくせに。

「どうやらカナメ君が神様だというのは本当らしいね。しかも人の願いをかなえに来たとは、何とも奇特な」

「だからそれ、何度も言ってるのにい」

その自信なさげな態度が、信憑性をレベルダウンさせる一因なのだが。

あらためて考えてみると、普通の人間の場合、疑問はそこから始まるものだということをつっかり忘れていた。カナメが言うには、下僕化に伴って、神の下僕としての最低限の知識は注入される仕組みらしい。噛みついたのはそういうことか？　どういう仕組みかさっぱりだが、便利を通り越してご都合主義すぎだろ、神様。

「しかし、なぜ神などというものが現れたのだろうね？」

「そりゃお前が呼び出したからだろ。召喚した人間の言うことじゃねえぞ」

その無責任さにほとほと呆れさせられるが、片や美緒は真剣に悩んでいる。まさかこの期に及んで、召喚魔法が成功するなんて思っていないかった、とは言うまいな？

「私が呼び出したのはあくまでも超科学部の部員だ。神である必要などまったくない」

「たしかにな」

「偶然だと言われればそうなのかもしれないが、私はどうにも根拠の乏しい偶然というのを信じたくなくてね」

「何事にも因果関係はある、とおっしゃるわけでございますね」

「神様を前にして、偶然やら奇跡を否定するようで申しわけないが、その通りだ」

なんとも美緒らしい。へ理屈も理屈のうちというが、美緒が言うとは理屈でも不思議とそれらしく聞こえて説得力が与えられるのだから、これもある種の才能といってもいいのかもしれない。

「ときに、美緒様はまだその時の魔法陣をお持ちでいらっしやいますか？」

「うん？　設計図でよければね。あの時の魔法陣はどういうわけか

光の粒子になつて霧散してしまつたからね。大方、陣そのものが触媒となつたのだから、発動と同時に消滅したのだろうとは思つてゐるがね」

もちろん言つてゐることはさっぱり分からないが、自信満々なのでそういうものなのだろうということにしておく。

「ふむ……左様でございますか……ふんふん」

美緒の手渡したメモ用紙を見つめながら、しきりに何やら頷いてゐるナイアガラだが、唐突にそのメモを机の上に置き、ある一か所を指差した。円形の魔法陣を取り囲むようにして書かれている文字と図形の間のような場所だ。

「ここに、何と書かれましたか？」

「ここかい？ これは、えっと、前後が『目の前』と『引きずり出す』だから、ここには新入部員と書いたはずだね」

「誤字でございます。これだと『神入部員』という意味になつてしまいます」

手近な黒板に、漢字で「進」と「神」の二文字を書いて説明するナイアガラ。おいおい、なんだこの初歩的かつ致命的なミスは、と呆氣にとられるがもちろんこの程度で美緒は動じない。いつも通りの涼しい顔で、片方の眉を少し持ち上げるだけだ。

「本当かい？ いや、それは勉強不足だったよ。それなら納得だね、これは神を召喚する魔法陣だったわけだ。しかし妙だな。このようなミス、気付かないものか？」

「わけだ、じゃねえよ！ やっぱ諸悪の根源はてめえじゃねえか！」

「まあまあ、実験には失敗や犠牲はつきものだよ、シュータロー。大事なものはそれをどうリカバーするかだよ。とまあ、そんなことよりだ、本題は」

自分の失態をここまで棚上げする能力の方が、ある種の魔法だと突っ込みたくなる。

「ああ、このままじゃ俺が授業に出られないってこと」

「魔法陣が発動していること、かな」

やれやれといった様子で美緒が首を振る。それもそのはずで、足元に落ちてるルーズリーフには、見覚えのある魔法陣が描かれて、しかもぼんやりと光っている。

「わあい、ほんとだ発動してるね……じゃねえよ！ 何してんだ、この一瞬の隙に」

「いや、先ほどの誤字を修正すれば新入部員が現れないかと、ね。

興味がわいた瞬間には実行に移していたわけだよ。まああることだ」
もう、突っ込む気概もわいてこない。誰だよ、目の前の事態を解決するより、新しい問題を生み出すことに情熱を燃やす馬鹿に、燃料を与え続けるのは。

隣では、好奇心丸出しの目をしたカナメがおしるこの缶をぎゅっと握りしめている。アルミ缶だったら潰れてただろうな。

とか何とかやっている間にも、魔法陣は明るさを増し、昼なお薄暗い科学準備室を煌煌と照らし始めた。何もかもが昨夜の再現のようだ。

「もー、神様とか悪魔とか、変なの出てくんのやめてくれよ」

悲痛なまでの魂の叫びだが、たぶん無理だろうなと、心のどこかではもうちゃんと諦めている。何せ魔法の行使者が美緒だ。穏便な結果など、絶対にあり得ない。

「神様、いやなの？」

好奇心むき出して光を見ていたカナメが、ふと俺を見つめて泣きそうな顔をする。

「いや、そういうわけじゃない。神様が嫌いだとか変だとか、そんな意味じゃない」

「じゃあ、その……好き？」

何でこんな時に、白の裏側は黒みたいな話になるんだ。世の中にはグレーだったり色が付けられなかったりするものがたくさんあるんだと、誰か教えておけよな。

「さあ、どうなのでございます？」

「なんでおめえまで絡んでんだよ」

「いえ、つい出来心でございます。と、ナイアガラは自身の好奇心に蓋をしつつも、申し上げます。いよいよ陣の発動でございますよ」
発動はいいとして、何でうちの制服なんか着てるんだ？　どこで手に入れた？

なんて細かいところに突っ込みを入れる隙を、魔法陣の発動に奪われた。

これも、まんま昨晚の再現。急激に膨張した光が空中にはじけ、視界のすべてを光で埋め尽くす。

「うお！　まつぶっし！　忘れてた」

そしてフラッシュバックする昨夜の記憶。もちろんそんな愚は犯さない。人間は学習するのだ。このままはやけた視界の中をよろばい歩けば、召喚で呼び出された何者かとぶつかってしまつて、またまたあらぬ厄介事をしよい込むことになるわけだ。となれば選択肢は一つ、

「後退あるのみ！」

その場から撤退すべく、両手で目を覆ったままバックステップを華麗に決める。自分の後ろにはこまごまとしたごみしかないのは確認済みだ。

がちゃ

「美緒、千古君、いる？　さっき食堂の方、歩いてるの、見えたから。実は、入部とど」

鼻っ面の数ミリ先を扉が通過する。間一髪直撃を避けられたものの、現れた人物が予想外すぎて一瞬思考が蒸発する。

「いいんちよ、何でよりにもよってこんなタイミングで」

「え？」

凄まじいまでの光を反射した眼鏡のせいで目元こそ見えなかったが、表情は驚きの色一色に塗りがためられていた。そりゃそうだろう、扉を開ければ中で閃光弾が炸裂したようになってんだからな。戦場だつたら決着がついてるレベルだろ。

「なに？　え？　みお？」

部室で弾けた光は廊下にまで溢れだし、立ちつくしている吹水を問答無用で包み込む。

光の粒子が質量を持っているようにまとわりつき、吹水を覆ってしまうと、徐々にその姿は輪郭を失ってうすぼんやりとぼやけ始めた。

「おい美緒、今度も成功しちゃったのか？ 何だ？ どうなってんだ？」

「あれ？ 私の手、消えて。足も。あれ？ あれ？」

見る間に俺の目の前で消えてゆく吹水。まるで消しゴムで消しているかのように、指先から徐々に輪郭が溶け出し、透き通ってゆく。このままじゃ、

「おい！ 委員長が、吹水が消えちゃうぞ！ どうなってんだ！」

返事はない。周囲を見渡してみても、ただただ真っ白な何も無い空間があるだけで、先ほどまでいたはずの部室は影も形もない。霧の中にいるような、白一色で塗られた箱の中にいるような、不思議な場所だ。どこだよここ？

そうこうしているうちにも吹水の姿は消え続け、今では陽炎のように揺らぐ姿がぼんやりと確認できるだけだ。完全に消えてしまうのも、時間の問題に思えた。

「くっそ！ 間に合ええええ！」

何に？ 言った自分でも意味はわからないし、間に合ったところで代わりに自分が消えるのか、仲良く一緒に消えるのかもわからない。とにかく俺が言いたいのは、

「きえるなあああ！」

とにかく絶叫していた。

喉の奥を雑巾のように引き絞り、バランスを取るのも忘れて吹水に向かって手を差し出す。その手を握れば助かるとでも言うように。俺の手の中にある、光を。

光？

おかしい。やけに世界がスローモーションだとは思ったが、それ

にしても時間がたちすぎていやしないか？　それどころかまるで時間が止まっているような。

「いや、止まってるな、これ」

消えゆく自分の手を見つめていた吹水の動きも、ビデオの一時停止ボタンを押したように静止している。しかも、その周囲に漂う光の粒子までもが、ピクリともせず、その場に浮かんでいる。

「シユウウ？」

「お、か、カナメか？」

そんな中で聞いた聞きなれた声って、なんて安心できるんだろうな。うつかり、へたり込んでしまいそうになる。

「シユウウ。その手」

カナメの言うとおり、俺の手は光に包まれていた。何やら温かくて、柔らかい感触のする不思議な光だが、血縁に蛍光灯や懐中電灯がいるなんて話は聞いたことがない。手が光るなんて不思議現象、自慢じゃないが生まれて初めてだ。

「ああ、なんだろうなこれ？　なんかいきなり光出して。って、お前は動けるんだな」

「はやく、触れてあげよう」

何が何やらさっぱり俺が、山もりの聞きたいことを整理できずにいると、カナメは落ち着いた口調で吹水を指差した。

「え？　触れるって、なんで？　それよりこれ」

「いいから、早くしないと、せつかくの奇跡も間に合わなくなっちゃうよう」

「お、おう。さ、触れば、いいんか？　つつか奇跡って」

取り合えずカナメの方が何か知っていそうだったので従っておくことにした。「間に合わない」という言葉にチキンな俺は抗うことができないのだ。

先ほどまでが嘘のように落ち着き払った俺は、ゆっくりとした足取りで吹水に近づき、手を差し出そうとして一瞬ためらってしまう。だって女子の体だ。触れたと同時に痴漢認定か変態認定された日に

は死んでも死にきれない。そうでなくても女体だ……いや、いかがわしいことなんか考えてないからな。断じて。

「シユウウ、早くう」

「わぁつとる！ んええい！」

やけくそ気味に、肩と二の腕の境目あたりを掌で軽く触れる。あくまでもソフトに、ポンと肩を叩くように、エロさを感じさせないように。

すると、それまで俺の手を包んでいた光がふわりと広がり、あっという間に吹水を包み込み、周囲のすべてを飲み込んでいった。

その光に包まれながら、ゆっくりと意識が白濁してゆく。眠気に耐えて意識を現実につなぎとめるのに近い。どうにも抗いがたい。暖かくて、柔らかくて、まるで冬の朝の布団の中のように……

「シユウウ。駄目だよ、あんな無茶しちゃあ」

ん、て言っても吹水が危ないって思っ

「ほんとに、ほんとに危ないんだよ」

知らねえって。危ないって、何がだよ。

「消えて無くなっちゃったら、ど、どうしようかと……思ったよう。だからあ」

なんだそれ？

「かぶっ」

……痛い。

魔王？ 誕生

うなじのあたりに、ジンジンと疼くような痛みを感じて意識が呼び起こされた。

「ん？ ねてたのか？」

寝ぼけたままつぶやいたせいで、半分ほどがむにやむにやと意味不明の雑音だったはずだが、俺の隣にいるそいつは意図するところを察してくれたようで、首を縦に振った。

「バカ面でございましたよ。眠るアホの図として後世に残したくなるほどございました。写メには残しましたが」

差し出されたのは俺の携帯で、ご丁寧に液晶画面には激写された俺の寝顔がでかでかと映し出されている。我ながら、賢そうには見えないのが残念だ。

後頭部に感じる柔らかい感触に再び眠りに落ちそうになりながら、何とか踏みとどまる。ここで二度寝なんかした日には何を言われるか考えるだに恐ろしい。

見覚えのある部屋だが、レイアウトは記憶の中のそれとは異なっている。まあ、いつ見ても常にアップデートを続けるカオスな空間なので、細かな違いなどないに等しいが。

どうやら俺は、あの真っ白な世界から無事に科学部の部室に戻ってこられたらしい。

「ちなみに、可能な限りのお知り合いに送信しておきました」

「わあい、俺のプライベート万歳」

「とまあ冗談はさておき」

本当に冗談なんだろうな。後で送信履歴見て死にたくなるとかやめてくれよ。

「修太郎様、何をなさいました？」

「なにつて、魔法陣が発動して、光って、そしたら委員長が来て…委員長！」

慌てて跳ね起きた。

勢い良く起きたせいで、こちらを見下ろしていたナイアガラが顔が一気に近づき、

ゴキッ

「いでえっ！」

頭突きが炸裂する。絶妙な角度で頭をずらしたナイアガラは、あろうことが自らの額を俺の鼻っ面に向かって振りおろしやがった。鼻が、もげるっ。

「失礼。貞操の危機を感じましたものですから、カウンターいたしました。あしからず。とナイアガラは、童貞に危うく触れられそうになったのをうまく回避した喜びを押し殺してお伝えします」

ずきずきと痛む鼻の頭を抑えると、異様なほどに熱を持っていた。鼻血が出ているのかとも思ったが、どうやらそれは免れたらしい。にしても痛い。鈍器で殴られたみたいだ。しかも向こうは涼しい顔をしてやがる。なんちゅう石頭だ。

「ほ、ほれより、そう吹水！ あいつは？」

「そちらにおられますよ」

体を起こしながら見ると、パイプ椅子に座る吹水の姿。足元から肩口あたりまでをざっと一瞥して、手も足も消えていないことを確認すると、ほっと溜息が洩れた。

「委員長……だいじょうぶ、なんだ、よな？」

えらく縮こまってしょぼくれた顔を俯かせている姿に、何かあったのかと心配になる。

「ご、ごめんな、さい。その、ぼ……僕のせいで危ない目にあわせて、しまって」

「いや、それはいいんだけど。っーか危ない目にあわせたのはこっちだし、むしろそれならこっちの方が謝らないと」

その間にも吹水は委縮して、というよりは怯えたように首を振っている。まるで、現実から逃げるように、目も耳もふさいでしまいたいと言いださん勢いだ。

ただそれよりも、吹水が僕っこののに驚いている俺はダメ人間な
んだろうな。

「んでまあ、こっちの無事は確認できたとして、今回の成果がそれ
か」

足元にあつた何かをひいといつまみあげる。

両手サイズの毛玉……のような生き物。特徴的なのは、体のわりに
小さな頭と短い前足。それに対して、全体的なバランスで見ると
かなり大きな、ヒコヒコと動く耳。

「そうらしいのだが、どうにも迫力に欠ける結果になってしまつて
ね」

背中をつまんでいるせいだろうが、ウサギって意外と長いんだな
と変なことを思う。

「その態度はただけねえな。ここはもちつとびつくりしたり感動
したりするとこだろ？ ましてや何でも願い事を叶えてくれるこの
あたし、魔神様が」

「喋るウサギか。まあ神様よりは魔法成分たつぷりだな。しかし、
この程度で驚かなくなつてんだもんな、俺も」

「ふむ、やはり魔法陣の小ささが原因か。なかなか調整が難しいな」
何を呼び出したいのか、とは聞きたくもない。どうせこいつの場
合、でかければかいほど喜ぶという悪魔的な発想なんだ。

「おい、聞けよな！ あたしの」

「か、神様だつて不思議要素いっぱいだよ。願い事だつて、か、
叶えるんだからあ」

「ミスたっけどな」

「うにゅう」

勢い込んで背伸びをしたカナメが、あつという間にしょぼくれて
唇を尖がらせている。神様がすぐにへこむなよ。

「だからあたしの話を、おい、願い事を」

「やかましゅうございますね。肉のパイにして食卓に並べられたい
のでございますか？」

「マニアックな知識だね。マクレガーさんだね」

「もーっ、何なんだよこれ！ もうやだ、さっさと願い事叶えて帰りたいい〜！」

「じゃ、じゃあ、僕を魔王にして」
え？

決して大きくないその一言に、部屋の中の混沌とした時間が静止する。

言った本人ですら、自分の言葉に慌てて次の行動を起こせない静謐な空間の中では、窓から差し込む光さえ止まって見える。息を止めるのはばかられる、そんな停止。

「委員長君？」

そんな中で最初に動きを見せたのが美緒だったのは、必然に思えた。こんな空気の中で動くんなんて、俺にはできない。さすがだ。

「ぼ、僕を、ま、魔王、に」

弱々しくしりすばみになる口調は、いかにもいつもの吹水だったが、その言葉が何とも吹水らしくない。なに？ 魔王？

「どうした吹水、故障か？」

そう声をかけたのも、無理からぬことだと思ってもらいたい。さもなければ美緒の毒電波に感染したのだろうというのが、俺の考える第二候補だ。こっちの方がありそうだな。

しかし、そうではないらしく吹水の首がふるふると横に振られると、

「強く、なり、たい……」

いつも通りの眼鏡越しの瞳は、今にも泣き出しそうに潤んでいる。なのに、きゅっと握られた拳に、引き結ばれた唇。マジでか？

「チーンっ！ オッケーだ、願い事は受理された。あんたは今から魔王だ！ ……え？」

そう言っただけで元気がいっぱい飛び上がったウサギは、ひくひくと鼻を動かしていたかと思うと、唐突にぴたりと鼻の動きが止める。そのまま重力に引かれて落下し、べちゃりと床に尻もちをついた。

そのままぐるりと周囲を見回したウサギは、左右の耳を器用にはらばらに動かしてそこら中の音を拾う。が、残念なことに声らしい声はそこになかったはずだ。あの美緒でさえ呆気にとられて口を閉じていたんだからな。

活動？ 開始

「つまり君も、願い事を叶えるために召喚に応じてあらわれた、と」
「ったりまえだろ。うちに言わせりゃ、呼び出しって何言っただって感じだよ」

「どうやら、召喚業界（何だその業界？）では、呼び出す＝願い事を叶える、ってのが常識らしい。この部にいると、とことん世界つてのがわからなくなるな。」

「ということは、委員長君は魔王になつたのかい？」

その場にいた全員が一斉に吹水に注目する。あるうことが、当事者その一と目されるうさぎまでもが吹水に熱い視線を送っている。ただのうさぎにしか見えないが。

「なつた、の？」

「実感はどうだね？ 内から湧き上がる憎悪の念や、あふれ出る魔力を感じたりは？」

美緒の質問に、日常的には聞かれない言葉が混じっているが、わかつてしまうのはRPGのおかげだ。

「特に、そういうのは……」

「闇の住人のささやきや、亡者の呼ぶ声が聞こえるとかは？」

「ちよつと耳鳴りがする、かな？」

「頭の中に闇の魔法の呪文が浮かぶとか、属性が闇になったとかこの世ならざるかくりよの住人が見えるようになったとか」

「あ」

「どうした！」

思わず駆け寄る俺だったが、美緒とナイアガラは喜々とした視線を送っていやがる。こいつら、完璧に楽しんでやがるな。

「乱視、治った。眼鏡をしてると、気持ち悪い。でも近眼はそのまま」

眼鏡をはずして目を細めてこちらを見ている。睨んでいるように

しか見えないが、本人に全くそのつもりはないらしい。ってか、眼鏡ないと別人だな。

「つまり？」

総括を求める美緒だが、その後に続く言葉は簡単に想像できたし、予想通りの言葉が吹水の口からこぼれたのは言うまでもない。

「あんまり、変わってない」

「どうということだね、ウサギ君」

命の危機を感じたのだろう。逃げ出そうとしたところをいとも簡単につまみ上げると、全員が注目すると真ん中にウサギを突き出した。

「うちに聞くなよな。願いが受理されたってことは、もうそうなってるはずだよ。あとは本人の問題だよ」

なんだその無責任は？　まるで勇者を任命した王様の発言じゃないか。ヒノキの棒とはした金を渡して「お前は勇者だ魔王倒して来い」って。でもそう考えると納得できてしまうな。

「たしかに、願いを叶えた後どのようになるか、どうなさるかはこの本人次第でございますからね。この場合、委員長様がどのようなものを想定なさって「魔王」とおっしゃったかにもよりますね」

「ということはつまり、魔界の権力者としての魔王を想定したのか、悪意の塊としての魔王なのかで今の彼女がどうなっているのかわかるわけだね」

「ご明察でございます」

少なくとも吹水が想定したのは今しがた美緒が言ったようなものじゃない、ってことか。どう見ても悪意なんかかけらも持ってなさそうだし、魔界の権力を握ったにしてはおどおどしすぎだろ。

「もちろんそれは、あのうさぎ君が本当に委員長君の願いをかなえたなら、という仮定なしには成り立たないがね」

つるしあげたままのうさぎに挑発的な笑みを向ける美緒。そしてまんまとそれに乗ってバタバタと暴れ出すうさぎ。どっちが悪魔だかわかったもんじゃないな。

「叶えたにきまつてんだろ？　うちを誰だと思つてんだ。魔神だぞ魔神！　どんな願いも思いのままの、ビッグな存在なんだからな！　魔界のエースをなめんなよ」

「じゃあ君は、今から、僕のパートナー、なの？」

ひょいとうさぎをつまみあげ、吹水が合わない乱視用の眼鏡越しに見つめる。

意外なほどの行動力に、ちょっとびつくりだ。

「いや、まあそういうことにはなる……のか？　わかんねえけど」

「な、名前、は？」

「……もも」

「ミヒヤエル・エンデの作品のようだね。モモか、なかなかキュートではないか」

そついや、そんなのもあつたな。小学校の国語で教科書に載つてたな。しかし「キュート」とは、美緒に似合わないことはなはだし

い。

「違う。食いもんの方だ」

「桃？」

アクセントを逆にした発音に、うさぎがこつくりとうなずく。

「昔、とーげんきよーとかいうとこにしばらく住んでたら、なんか、その喰いもんに似てるとかって名前付けられて。くそ、あんなまん丸くないっつーのに」

しぶしぶといった様子で語っているが、うさぎの表情の変化なんて読めるわけもないので、聞き流すしかない。まあ、色々あるんだろつ、つてことにするしかない。

「それにしても、魔界のエースで桃源郷にも顔が利くとは、凄いものを呼び出したようだね、我々は」

そりやそうだろう。なんせクラスメイトを魔王にしちまうんだからな。経歴のでたらめ具合なんかも含めて、色々と胡散臭いが。

「でもそうなる、今度は気になるのは委員長の方だよな。どんな魔王なんだろうな。何か実感ないのか？」

当の本人はひたすら眼鏡をかけたなり外したりしているだけだ。気になるのそこかい。

「うん。ない、かな？」

うわ、めっちゃしょんぼりしてる。これで魔王とか、もつと魔王らしいのがすぐ隣にいるだけに、信じられん。

「ではこう質問を変えよう。うさぎ君、彼女が魔王であることを証明したまえ」

「それは良い案でございますね。（カチャ）ぜひナイアガラも見とうございます、と物見遊山ながら申してみます」

ナイス方向転換だ、美緒。俺は心の中で称賛を贈りつつも、証明されたら何かヤダという二律背反に微妙な表情を浮かべるだけだ。完璧に傍観者として楽しみ始めたナイアガラが憎い。そのティーセツトはどこから持ってきたんだこら。

「んだと！　ほんつと疑り深いなお前ら。いいか、よつく見てろよ！」

強気の口調のわりには、視線や首の動きが明らかに挙動不審だ。見ているだけで気の毒になるノープランっぷりだが、残念なことに俺以外の二人は見逃してくれないぞ。

ん？　ふたり？　そう思ってたカナメを探してみると、道理で入ってこないはずだ。教室の隅っこに横たえられてすやすやと眠っている。実に愛嬌のある寝顔だが、備品と思しき段ボール箱（『天岩戸』の張り紙あり）の中に寝かせるなよな。

そうこうしているうちにも、うさぎがとうとう強硬手段に出る覚悟を決めたらしい。

「見ってるお！　あの眼鏡は魔王なんだから、うちぐらいの魔力で体当たりしてもびくともしないはずだ、びくともするなよ、しないよな？　しないで！」

最後がお願いになった悲しい叫びとともに、うさぎは全力ジャンプ。

「おお！」

弾丸のように、とまではいかないまでもなかなかの勢いで飛び出したうさぎの体が、淡い光に包まれ、赤い尾を引いて一直線に吹水に向かっている。悪魔云々を抜きにしても、当たったら痛そうなエフェクトだ。

「赤い彗星でございますね」

「ということは、通常のうさぎの三倍だね」

緊張感のかけらもない会話は却下して、俺はうさぎの軌跡を目で追う。

「きゃっ」パシーン「ぎゅう」

までもなかった。

赤い光が吹水に触れる瞬間、電極がショートしたような光が一瞬はじけたかと思うと、うさぎが全身の毛を逆立てながら墜落した。なんか、でかい埃みたいになったうさぎが不憫だが、その役割は十分に果たしたぞ。

「これ……なに？」

「うむ。これなら確かに魔王を名乗ってもよさそうだが……色が、な」

吹水が混乱するのも無理はない。なにせ、自分の体を薄い光の膜がすっぽりと覆ってしまっているのだ。しかも、体を動かせば陽炎のように揺らぐ光が、時折はじけて空気を震わせている。アニメやゲームなんかでよく見る、魔力のエフェクトそのままだ。

ただし、

「えらくかわいい魔王様でいらっやいますね」

「だな」

これには俺も同意せざるを得ない。

ピンクとか、さすがに、な。

かくして、ここに魔王が誕生した。ということらしいんだが、この魔王の誕生が、まさか超科学部とその関係者各位を巻き込みでの壮絶なまでにアホな日常の火ぶたを切って落としたなんて、さすがの美緒ですら想像だにしなかったはずだ。

しなかった、よな？

「にしても、何で魔王なんかあったんだ？」

どうやら魔王様になってしまったらしい吹水に、それとなく聞いてみる。委員長なんてあだ名の吹水が、魔王になりたいなんて言っただから、気にならないわけがない。美緒だったら問答無用で納得なんだけだな。

「どういう意味だね？ 魔王の何が悪いというのだ？」

「悪いってわけじゃねえけど。いや、悪いのか？ どっちにせよ、魔王になりたいなんてあんまし考えないだろ」

「そうかね？ 私など幼少のみぎりにはなりたいたいのものの筆頭だったかね」

「お前はそうだろうな。あと自分にみぎりって使うな」

「よく気づいたね。さすがはシュータロー」

どうやら所々で俺は試されているらしい。なんだこの常在戦場見たいな訓練。

「えと、その、僕はすごく気が弱くて……でもせっかく高校生になったから、強くなりたいって、思ってた」

そう言われると、クラス委員を決めるときにもなし崩しで押し付けたような感が無きにしもあらずだったな。ノーと言えないタイプなのは間違いない。

「それで、願い事を叶えるって聞こえて、とっさに、強いもの強いものって考えて」

「で、出てきたのが魔王、か」

「変、だよな？」

まあ、変か変じゃないかと聞かれれば変だと思う。普通、女子高生になりたいものを聞いたときに『魔王』は出てこないだろう。とはいえ、弱い自分を変えたいという思いの強さの表れだと思えば、さほどおかしい話というわけでもないだろう。ただ一点、実際に魔王になれてしまったことを除いては、だけどな。

「変だな」

「おめーは黙ってろ」

「何を言う。魔王がこんなに弱気でどうするのだね。魔王というのはならもつと強気の姿勢で常に自信に満ち溢れているものだと思うがね」

たとえばお前みたいにな。

「そ、そうだよ。うん。僕も、そうだと、思うん、けど……まだ、自信なくて」

「大丈夫だ、魔王たるもの唯我独尊でなければならん。よし、こうなったのも何かの縁だ、超科学部を上げて委員長君を立派な魔王にする協力をしようではないか」

おいおい、なんか言い出したぞ。

「ほ、ほんとに？ いいの？ 僕なんかのために？」

「ただし、この超科学部への入部が条件だよ。私としても、魔王には魔王らしくしていてもraithたいからね」

「うん、入部、する」

しかも人員不足まで一気に解決とか、どんだけ敏腕部長だよ。悪徳だけどな。

「ってか、委員長までノリノリになるなよ。考えろよ、こいつはあの天王寺美緒だぞ。何かあってからじゃ手遅れおんぎあつ！」

頭蓋骨が軋みを上げる。何でナイアガラが俺を驚掴みにしてんだよ。

「お黙りくださいませ。あなた様がお邪魔をなさるので、進む話も進みません」

「なん、で」

「興味本位でございます」

「いいな」

ぽつりとどさくさで呟いた吹水の一言を、俺は聞き逃さなかった。いいなって、何？ もしかして吹水が求めている強さってこういうの？ だったらまずい。今すぐにも止めないと、俺の体は苦痛が快

楽に変換されてしまう素敵ボディに改造されてしまう。俺にその気はない。

「く……は……」

「しばらくは声も出せませんので、あしからずでございます」

額関節をやられたのか、まともに声を出すことができない。まずい、このままだと誰も止める者がいないままに、この部が魔王育成部になってしまう。そうなれば俺が日常を取り戻すのが、どんどん繰り下げで後回しになるのは目に見えている。それはまずい。

「では、異論はないね」

「ございませんね」

「か……は……」

「うん。いいよう」

おいカナメ！ 神様が魔王作ってどうすんだ。世界の平和は？ 秩序は？

「では、満場一致で超科学部の活動方針を、委員長君を立派な魔王として改造することとするよ」

ちょ、待て。ここにいて、反対派がここに……わかってますよ。無駄なんですよね。

悲喜？ 交々

結局その日は一度も教室に顔を出すこともなく、部活動終了のチャームが鳴るころになってもまだ俺たちは部室の中でダラダラと議論を戦わせていた。

とはいってもその九割以上が無駄話で、わかったことといえば吹水が自分の意志で魔王の力を操れないことぐらいだった。

帰り道。吹水と別れた俺とカナメ、ナイアガラ三人は特に会話もなく、街灯が夕闇を切り取る田舎の道を歩いていた。さすがにナイアガラを置いて自転車で帰るのも気が引けるし、かといって三人乗りは難易度が高すぎる。ちなみに、うさぎは吹水が連れて帰るこ
とになったので、鞆と一緒に自転車の前かごに突っ込まれていた。
とことん魔神に見えない。

すーすーと、カナメの立てる寝息だけが夜の静けさの中に規則正しく聞こえる。

風のない静かな夜だ。こんな日の散歩も、悪くない。

「ほんとに願い事をかなえる神様や魔神なんているんだな」

「ええ。そのために人は神や魔神を呼び出すのでございましょう？」
まあそうなんだが、おとし話や作り話でしかそんなもんが語られない現代に生きてると、こうなるんだよ。

「それよりも、あなた様がなさったこと、おわかりですか？」

唐突すぎる質問に、ボケつと月を見上げて歩いていた俺の心臓がとび跳ねた。脅かすなよ、いきなり声かけんじゃねえ。

「な、なんだよ藪から棒だな。何の話だよ、俺がやったことって？」
すると、やれやれといった風に首を振り、哀れなものを見る目を向けてきた。やめろ、その目は意外とこたえる。

「あなた様が魔神召喚の瞬間になさったこと、本来ならあつてはならないことなのでございますよ」

「何の話だよ？ 召喚の時って、俺なんかやったのか？」

「やはり無自覚でいらつしやいましたか。それはそうでございますよね、何せあなた様が引き起こしたのは、奇跡なのでございますからね」

「奇跡を起こした？ 俺が？ なんかの間違いだろ？ まさか、召喚が成功したのが俺のせい、ってんじゃないだろうな」

だとしたら笑えないが、どうやらそうではないらしい。首を横に振るナイアガラに、ほっと胸をなでおろす。

「私も知らなかったのでございますが、どうやら魔界からの召喚というのは、代償が必要なものだったようでございます」

「へえ。まあありがたい話だよな。悪魔の召喚には生贄が必要、つての」

魔法陣の真ん中に横たえられた動物やら、時には人間の少女。その周りを取り囲む怪しい衣装の連中に、禍々しい燭台などの器具の数々。創作物なんかでよくみられる悪魔召喚のシーンが、簡単に想像できた。

「あなた様は、その際に本来なら失われるはずの、杏子様の命を救われました。あの方は、あのままでしたら召喚の代償として消滅していたはずでございますので」

なんだと？

「もちろん、本来ならあり得ないのでございますが、どうやらそのようでございます。それが証拠に、こんなにも消耗なさって……」

一変して優しい目元で、肩口にあるカナメの顔を覗き込む。どこまでも慈愛に満ちた、本当に慈しむような瞳だが、鼻息が荒いのはやめておけ。今にも齧り付きそうで怖いぞ。

「取り乱しました。とにかく、あなた様は奇跡を起こされたのです」「うん。すまん。全くわからん」

「愚図で屑でございますね」

ひでえ。泣きそうだ。

「本来ならカナメ様の目の届かぬ今この瞬間に分子にまで木っ端微塵にしてやりたいところでございますが、ばれたときの言い訳が面

倒でございますので、ナイアガラは実に慈悲深い行動に出ます」

「わあい、そりやありがたいやー」

危ういところで分子レベルの分解を免れたらしい。何この死亡フラグ満載の無理ゲー！

「奇跡というのは神の御業でございます。その効力に際限はなく、全ての理を凌駕し、あらゆる束縛を受けることのない、まあ言ってしまうえばチートでございます」

「身も蓋もなさ過ぎてわっかかりやすいな。最後の一言ですっげえわかったわ。そーいや確かに、消えていく吹水の姿を見た覚えがあったけど、あれ夢じゃなかったんだな」

自分がどれだけ下世話な生き物なのかを痛感したよ。

「んで、それが何かまずいのか？ それに、俺が奇跡を起こしたつてもピンとこねえんだよ。今の話だと神様にしか使えないんだろ、チート……じゃなくて、奇跡って」

「はい。仰る通りでございます。だから、伺っているのでございますよ。何をなさったのですか、と。どうしてのですか、と。ナイアガラは問うわけでございますよ」

一拍間をおく。

その間が絶妙で、ほんの一瞬の沈黙にもかかわらず、山ほどたくさんのが頭の中を駆け巡る。なにやらいやなこと聞かれそうだなっていうのも考えるし、衝撃の新事実を突き付けられそうな気がする。しかも、こいつの場合は俺には一切の遠慮なしだ。一撃で精神を崩壊させられてもいいように、十重二十重のガードを構える。

「あなたはなぜ、奇跡を起こせたのでございますか？」

再び間。

この時点で、俺の頭はもう空っぽだ。一瞬前にあれほど頭の中に溢れた思考や記憶の断片は、もれなく行方不明で尻尾も掴めそうにない。何故？ 何故だろう。

「納得できかねます」

俺もだよ。

「ですが、一つだけナイアガラの見解がございますので、お聞かせしましょうか？ 聞きたいですよ、では」

「喋りたいんじゃないか」

「あなたは、カナメ様の神気を体に流し込まれ、人でありながら神の僕となっておられます」

「みたいだな」

「認めたくねえけどな」

「ご存じではいらっしやらないようですので申し上げますと、あなたの体はすでに人のそれとは異なっております。まあ、わかりやすく申しますと」

「初耳だぞ、それ。っていうか、何？ 俺、人じゃなくなっちゃったの？ 他人が魔王になったとかで一喜一憂してる場合じゃないんじゃないのか？ 衝撃の事実過ぎてなにやら心臓が異常に激しくドキドキしてるんだが。そして妙に腹のあたりがスーッするっていうか痛いっていうか、

「おい！ なんで手刀が腹にめり込んでるんだ！」

「百聞は一見出ございます。ちなみにめり込んでいるのではなく、貫通してございますよ。ほら、背中が触れます」

確かに、ナイアガラの肘が俺の腹にあるのに、背中をさする感触がある。貫通確認。

「じゃなくて！ 死ぬ、死ぬからああああ、何だよこれ、なんで、なんで」

「冷静にお聞きください、大したことではございません。肉体が少々変性し、神気そのものに近い構成になっただけでございます。言ってみれば、肉を持った精神生命体とでも申しますか」

「ま、待て。ちょっとタンマだ」

さすがに息が苦しい。頭の中で整理をつけようとするが、どんなパーツがどんなふうに分らばっているのかすら纏められない。パニックというのはこういうものなのだと、変なところだけ冷静だ。

「それが証拠に、ごらんください。血の一滴も出ておりませんし、

あつという間にふさがります。ほら」

言って手を引き抜くと、確かにナイアガラの手には返り血どころか、汚れ一つない。

「あ、ほんとだ。もうふさがり始めて……ふさがった。って待て！」
「待ちません。神気というのは神の存在、力そのものの具現化でございまして、今の修太郎様はカナメ様の力の一部といって差し支えございません。ですが」

ぺたぺたと腹を触ってみるが、そこには今までと何ら変わらない皮膚と肉の感触があるだけだ。人体切断マジックでも見せられた気分だが、背中に残る掌の感触だけが、妙に際立って思い起こされる。

まだなんかあんのかよ？ と、もはや俺の魂は風前のもしびだいや、もう神気とやらになってるから人間としては終わってるのかな。あははは。笑えねえ。

「それも、カナメ様の意思ありきでございます。と、聞いておいでですか？」

「ああ、音声は届いている」

処理されてねえけどな、半分以上。

「にもかかわらず、あなた様はご自身の意志で力を使われました」

「それが、なんか変なのか？」

神妙な空気なのだろうが、混乱しているせいで置かれた状況がさっぱり理解できない。

「あなた様は、スイッチも押さないのに蛍光灯がともるとどう思われます？」

「そりゃ、まあ……びっくりする、な」

「それほどに、あり得ない事態ということでございます」

俺、とうとう蛍光灯扱いですか。

「それともう一つ、大事なことをお伝えしておきます」

「まだあんのか？ 俺の耐久力とはつくにゼ口だぞ。次の一撃が重かった場合」

「あのような無茶をされた場合、修太郎様を構成する神気が著しく消耗いたします。場合によってはご自身が消滅することも念頭に置かれますよう」

「なんだそれ？ 自分の意志では本来神様の力は使えないけど、俺は使っちゃった。でもそれは俺を形作る力で、使っちゃうとかわらばになつて消えちゃうよつてこと？」

「そして何よりも、あなた様が失った力を補給したがために、カナメ様は眠りに落ちてしまわれたのだということも、でございます」

「なんか、乾電池みたいだな」

「言い得て妙でございますね。意外と賢いんですね」

「ええ。意外と賢いんですよ」

こうして俺は、びっくりするほどあつさりと衝撃の事実を告げられ、人として終わっていたことを実感させられたわけだ。意外にも冷静でいられるのは、この数日の間に発生したとんでも事件の数々が俺の心を鍛えたからだろうか。

涙が止まりませんがね。

「まあでも」

足を止めた俺は、ふと自分の掌を見ながらこぼした。まだあのときの、暖かい感触が残ってるような気がしたが、実際にはそんなことはない。ただの、見慣れた手の平だ。

「それでも、吹水がいなくなかったんなら……よかった」

それはまぎれもなく、俺が願った奇跡だ。わかっていなかったくせに、俺G」。

「よくもまあそんな恥ずかしいことをぬけぬけと考えられますね。思春期というのはかくも恥知らずに黒歴史を量産するのでございますね。きんもー、でございます」

「いーだろ別に！ このぐらいの青春したって！」

「別にかまいませんが。せめてそのゆるみきつた顔面さえ何とかしていただければ」

うそつ、そんなに俺の顔ゆるかったの？ まじで？

「シュウウ……ほきゅうう」

寝ぼけて囁むとか、どこの猫だよ。うなじが痛い。

「戻って来たのかね、委員長君。忘れ物かい？」

窓際に置いたパイプ椅子で本を読んでいる美緒は、視線を本に落としたまま来訪者に声をかける。一度も見えていないはずなのに誰が来たのかわかるのは、超能力でも何でもない。予想が当たっただけだ。

たぶん、戻ってくるだろうという予想。

「ん、そうじゃ、ないんだけど……いいのかな、って」

「何がだい？ 質問が抽象的すぎて回答しかねるね」

嘘ばかりだ。本当は何を聞きたいのか、何を求められているのか、おおよそで当たりは付いている。

「あの、僕……中学の時、みたいに、もう、弱いままは、いやだから」

太もものところでぎゅっと拳を握る姿に、決意が現れているように見える。

「美緒がいなければ、僕、ここに、いなかった」

「たまたまだよ。バカどもの興味が私に移った、それだけのことだよ、あれは」

「でも、そのせいで、美緒は」

「本人が気にしていないのだから、よいのでは？ 恩義を感じるようなことは何もなかったはずだし、むしろ今は私の方が助かっているよ。部の存続が約束された」

美緒と杏子は同じ中学に通っていて、三年のときには同じクラスにもなった。

そこで美緒が見たのは、杏子に向けられる心ない感情の発露。全国どこへ行ってもこの年代の、いや、年代に関わらずこの手の悪意は存在する。

杏子は、イジメられていた。

露骨な暴力こそなかったものの、気の弱い杏子は格好的だったわけだ。クラス内にはいくつかの女子グループが存在したが、杏子に目を付けたのはとりわけ派手で発言力のある集団だった。その中心になっっている女子生徒が、杏子を利用したというわけだ。自分の立場を維持するために。

誰かを貶めればそのぶん自分が浮き上がる、そんな安直で蒙昧な思考。

そして、同じクラスにいた美緒は、問答無用にその事実を突き付けた。

「他人を貶めねば自らの価値を確立できないとは、笑止だね」

昼休みに購買部へのパシリを要求されて教室を出て行こうとした杏子の、襟首をひつつかまえて美緒はそう言った。

教室中どころか廊下に出ている人間までもが何事かと振り返るほどの、凜とした声に教室は水を打ったように静まり返った。

いじめを見たら見て見ぬふり。それが暗黙の中学生にすれば、地雷を踏んだようにしか見えなかった。いじめられている人間をかばうという横槍は、自身がスケープゴートになることと同義だ。案の定その直後からいじめの対象は杏子から美緒にシフトした。

もちろん、その行為そのものが愚の骨頂であることに気がつくほど賢い女子なら、そもそもいじめなどしなかっただろう。

相手があの天王寺美緒であると、ほんの少しだけ考えるべきだった。

小賢しいまでのいじめの数々はことごとく美緒によって笑い飛ばされ、見るも無残なほどに体裁を失っていった女子生徒は、ついには最後の手段に訴えた。

やめておけばよいものを、具体的な暴力にうつたえようとしたわけだ。当然のように美緒は全力でボールを叩きつけ、その一瞬でいともたやすく一連のいじめ事件は終息を迎えた。

教室中が凍りつくようなボールの一撃は、教卓を直撃したただけにとどまった。が、真つ二つに割れた天板を見つめる怯えきった瞳に、

それまで最大派閥だった女子のグループは呆気なく解散することになった。女子の仲良しグループの、よくある哀れな末路だ。グループの中心をなしていた女子は、昼休みには一人で弁当をつつく姿が見受けられるようになったのだが、そこに美緒が叩きつけた「人を呪わば穴二つ、だよ」の一言は、完膚なきまでにとどめを刺した。

美緒に悪意など、あろうはずもない。

もちろん、そこに至るまでの「イジメ」の過程について、美緒は認識すらしていなかったたので、実質いじめていた側の独り相撲だったわけだが。

「あの、あのときの、こと」

「現実を突き付けたただだよ。瑣末なことだ」

しれっと言つてのける視線は、相変わらず本の上だ。もちろん、この言葉にも他意などあるはずがない。美緒にとっては実際にその程度なのだ。

「ぼ、僕は、そのおかげ、で、ここにいられて……もう、弱いのは、いや、で」

強くなりたい。もう、弱いままの自分が嫌だ。その切実な願いを両手に握った杏子は、それを美緒に告げに来た、というわけだ。

「なら」

美緒の視線が本を離れ、杏子を見に向けられる。美緒らしい、真っ直ぐで力強い視線。

杏子の求める「強さ」を持った、視線。

「強くなりたまえよ。君はもう超科学部の部員なのだから、遠慮など必要はない。魔王でも魔神でも淫魔でも、自らの求める強さをまっすぐに求めればいい。我が超科学部にはそれが最善だと、私は判断した」

この言葉も、美緒に言わせれば「現実を突き付けただけ」なのだろうが、その言葉の持つ魔力に気づかぬは本人ばかりなり、だ。

「いい、の？ 僕なんかで。僕が、いても」

部室に一步を踏みこめないつま先が、そのまま杏子の迷いを表し

ている。

気の弱さゆえに、自分の存在を肯定できない杏子の心境は、ひたすらに揺れていた。

認められることの少なかった、認められている実感の持てなかった過去が、今回の行為を自らで肯定できていないのだ。

「入部届けはもう受理されているよ。やめたいといっても、我々は君を逃がさない。地の果て、それこそ魔界の果てまでも追いかけるよ。委員長君。いや」

部室を横切って、杏子の前に立つ。窓から差し込む夕日を背負った美緒の姿は、血の色に染まった魔女のようだ。そこに浮かんだ不敵きわまる笑みが、何とも似合っている。

「魔王君」

眼鏡の奥の瞳が、色彩を取り戻す。

「ともに青春しようではないか」

杏子のスリッパ履きの足が、部室の敷居を超える。

自らの意思で。

敵？ 襲来

「超科学部だよ」

美緒の声と同時に、目の前を高速で何かが通り抜け、血の気が引くような「ぶんっ」という重い風切り音が頬をかすめる。

「分かった。超科学部なのはわかったから、いちいちバールを振り回すな」

どうやら標準装備らしい。お前はどこの世界の世紀末だ。

「ま、まあ、そのあれさ、超科学部に入部するなんて思いもしなかったさ」

誰だっと思うだろうな。今でも脳裏にへばりついて離れないのは入部の翌日。つまり、吹水が魔王になった翌日の放課後。授業終了のチャイムと同時に立ちあがった吹水が、おもむろに美緒に歩み寄って放った「部活、いこ」の一言に、クラス全員の時が止まったあの光景だ。クラスメイトはおるか、教室を後にしかけた担任がわざわざ戻ってきて一時停止していたほどだ。

「そのあとの一週間で受けまくった風評被害の方が俺には大変だったけどな」

曰く、弱みを握って脅した。曰く、金で買った。曰く、呪いで操った。エトセトラエトセトラ……。まあ、好き勝手に憶測してくれるのは構わんのだが、それを美緒に直で言うのが怖いからって全部おれに持っていくんなよな、クラスメイトども。

そして、興味深そうに鞆から顔をのぞかせるな、うさぎ。お前はあくまでも吹水のカバンのマスコットだ。クラス委員の用事で出た持ち主が返ってくるまで黙ってる。

『退屈だー。鞆の中でできることなんて限られてるしさ。授業やってる間はまだ話聞いてりゃ暇つぶせるけど。なー、出ていいだろー？』

そして、テレパシーが使えるからと好き勝手に話しまくるうさぎの存在。何でよりにもよってテレパシー受信できるのが俺だけなんだ。

『なー、かまってくれよ。肉体がほぼ神気のアンドロイドしかこうやって話せねーんだよ。ナイアガラ怖いし』

「シュー、唐揚げ落としちゃった」

「しかし、どうすれば魔王らしくできるものかな。シュータローも一緒に考えたまえ」

「何さ？ 魔王って、ゲームでもやってるさ？ ギャルゲーなら大得意さ」

『なー、その唐揚げくれよ』

「ねえ、千古君に手紙を渡してくれって、二年の人がきやつ」

「うううおわああああ！ いっぺんに喋んじゃねえ、飯ぐらい静かに食わせろ！」

聖徳太子の偉大さに感心するとともに、絶対によくてに三人分ぐらいしか話聞いてなかっただろ、と全力で突っ込んでおいた。歴史上の偉人に八つ当たりするしかないとは我ながら小心者だが、笑いたければ笑えばいい。

「落ち着きたまえ」ごきつ

「はっ、俺は一体。ってか、痛い」

「パールだからね。それより手紙？ シュータローにラブレターとは、奇特な人類もいるものだね」

人を静かにさせるために脳天にパールを叩きつける人類ほど、奇特じゃないと思いますかね。と言いつつも、驚きのあまり腰を抜かしてしまった女子に詫びておく。手紙を持ってきただけで突然叫ばれたりしたら、そりゃひくよな。ああ、こうして俺はまた変人への階段を着実に上るわけだ。怯えきった女子（もう恋の可能性はないだろうな）の目が辛い。今俺の頬を濡らしているのは、頭から噴き出した血液だと信じたい。

「どれどれ」

『なんだよ、うちも混ぜろよなー』

「で、もうすでに俺あての手紙が開封されているのはどういうわけだよ、美緒」

「なになに、超科学部員に告ぐ。科学準備室を返していただきたくそうろう。ついては、本日放課後、話し合いの場を持ちたくそうろう。準備室にて待たれてそうろう。ピーえす、こちらには奥の手がありそうろう。何だねそうろうそうろうと。下ネタではないか」

ビリビリばい。やっぱりな、そうすると思ったわ。

「下ネタはお前だ。っつか、部室返せって、どういうことだよ？

あーあ、破っちまったから差し出し人わかんねえじゃねえか。くっつけんのめんどくせー」

かと言ってほっぽっておくとさらに面倒なことになるんだろうな。仕方ねえな。パズルにしては簡単だが一向にテンションは上がらない。床に散らばった紙切れを机の上に並べ、「そうろう」だらけの文章を再生する。最後の署名の部分に目をやるが、敢えてここだけ細かくちぎったあたりに、悪意を感じる。

「えー、親、違うな、新、か。新科学部。なんだそりゃ？」

「知らないな。我々のパクリか？ まあどちらにせよ、取るに足りない存在だよ」

「だいいいな。とりあえず飯食っちまおう。放課後になりやわかる話だ」

『なあなあなんだよ、うちも混ぜろよー』

「シユー、唐揚げ」

「わかったから、俺のと変えてやるから。三秒ルールだほら。全然三秒じゃねえけどな」

カナメの差し出す、フォークに刺さった唐揚げにかぶりつき、代わりに俺の弁当箱から一つ唐揚げを輸出してやる。ホクホク顔のカナメは、この昼休み唯一の救いだ。

何故か背筋が凍るような寒気がしたのは、あくまで気のせいだ。そう思うことにした。

そして訪れた放課後。俺たちはそろいもそろって食堂にいるわけだ。コーヒーが旨い。

「カナメ君は甘党だね。女子力が高いな」

「いちごミルク。おいしいよう」

「僕は、抹茶ミルク」

「これうめーなあ。うちのも買ってくれよ、杏子」

傾けた紙コップに頭を突っ込んでジュースを飲むうさぎ。見た目だけなら微笑ましい光景なのに、今の俺にはそれすらもが心を荒ませる。

「一応聞いておくが、俺たちはなぜ部室じゃなくて食堂でだべってんだ？ 今日部室で待つてろって言われなかったか？」

「待てと言われて待つバカはいないよ。交渉事というのは自分のペーすに持ち込んだものの勝ちだからね、わざわざ相手の言う通りにおとなしく待つこともない」

たしかに、一方的に手紙を押しつけて「待つてろ」で待つてやるほど暇ではない。

カナメを俺から引っぺがす方法に吹水を立派な魔王にする方法。加えて、美緒の悲願である魔法の研究も同時並行でやらなきゃいけないっていうんだから、大忙しだ。

「それに、もし私の想像通りだったとされるなら、わざわざ交渉のテーブルに着いてやる価値もない相手だよ」

「まあ、お前がそう言うんならそうしておこう。それより、こっちはどうすんだよ？」

手紙の差出人への興味なんてもととないに等しかったので、あつという間に興味は他所に移る。といつても、目の前でこんもりまゐるくなっているうさぎに、だが。

「うちか？ 何だ？ あんたも願い事叶えてほしいのか？」

口の周りに抹茶オレがついて、緑のルージュを引いたようになっている。ひげなんてジュースで濡れまくっているのだが、大丈夫な

のか？

「そうしてもらえるとありがたいんだが、いかんせん先約があつてな。俺はとつとと神様の奴隷を解雇してもらつて、神様に願い事を叶えてもらわにゃならん」

「忙しいな、あんたも。で、うちのことつてどういうことだ」

「言いたいことはただ一つ、実にシンプルな疑問だ。」

「お前は帰らんでも大丈夫なのか？　というか、神様やら悪魔やらがうるうるしてて、この世界は大丈夫なのか？」

「いまさらと言うなかれ。この一週間、実に普通に俺んちでお手伝いをして飯を食う神様やら、かばんから頭をのぞかせて物珍しそうにするうさぎやらを見ていると、それが非日常であることが意識から離れていくのだ。だって、うさぎなんか人参与えたらバリバリ食うんだぞ？」

「うゝん……何かまずいのかな？　カナメ、何か知つてつか？」

フルフルと首を振るカナメ。神様と魔神の会話には絶対に見えないよな。

「つてわけで、まあいいんじゃないのか？　うちも別に、願い叶えたらすぐ帰らなきゃいけないってわけでもないみたいだし」

「むしろいてくれなければ困る。委員長君がまだ魔王として未熟である以上、願いがかなったとは言い難い。最後まで責任を持って魔王にしてもらわねばな」

なんだその理屈は、と突っ込もうとしたのだが、隣りで何やら納得顔の吹水が首を縦に振っているの、そういうわけにもいかなかった。あれ？　なんか俺の常識がおかしく見えるのは気のせいかな？　「ま、いいけどよ。うちもこっちのがなんだかんだで面白いし。そのかわりもう願いは叶えねえぞ。願いが叶うのは呼び出したとき一回きりだからな」

「そういうもんなのか？　それ以上はなんか都合でも悪いのか？」

「昔は三つとか叶えてやったんだけど、みんなおんなじようなこと頼むからつまないんだよ。だから一個にした。その方が緊張感あ

「んだろ？」

「まあ、カナメも願いの数は増やせないとか言ってたし。魔神の定番、アラジンの魔法のランプでもキツチリ限定三つだったしな」

「ちなみにその数の話は、後付けの設定だね。原典では回数についての表記はない」

興味がなさそうにカルピスを飲みながらの回答だが、さすがは美緒。無駄に博学だ。

「へえ、うちもけっこう有名なんだな」

「有名？ 何がだ？」

「だって、ランプに入ってた頃のあたしのこと知ってたんだろ？ あの頃はけっこうホイホイ願いたい事聞いてやったもんだよ。アラジンとか、そういうやそんなのもいたな。願い事定番すぎてつまらない奴だったけどな」

気にするのはやめよう。この世の秩序って、意外といい加減なんだな。

「と、そろそろいい頃合いかもしれないね」

美緒に促されて、カナメ以外の全員が食堂の時計に目をやる。いい頃合いどころではない。たっぷり四時半だ。

「いい頃合いって、さすがにこれはダメだろ。まあどうでもいいんだが。何を持っていい頃合いなんだ？」

そう聞かざるを得ない。なんせ、あの美緒がやたらと得意満面なのだから、何のたくらみもないわけがない。と思っていると、

「行けば分かるよ」

今この瞬間、聞きたくないセリフナンバーワンの称号をやってもいい。

某プロレスラーの詠んだ詩の一節のようなセリフを吐きだした美緒は、その歌を体现するように一人意気揚々と歩きだす。どうなるものか？ 危ぶむわ。

そして案の定。

「危ぶめばよかったな」

その惨状に対して口にできたのは、ただそれだけだった。

科学準備室、もとい、超科学部部室はいつもとはちょっと違うジヤールの力オスを内包していた。何が違っていたか、一番大きいのは、中に死体が転がっていること、かな。

「とうとうやつちまったか」

床に無造作に転がされた男子生徒の遺骸が三つ。どうあれ超科学部に、というか、天王寺美緒に関わった己の不運を呪ってもらえない。俺に出来るのは誰にも知られないように死体进行处理し、懇ろに弔うことだけだ。合掌。

「人死に」

「こ、殺さないで」

あ、生きてるんだ。カナメが手近な棒きれで突つくと、ゾンビのようにもぞもぞとうごめいて、ノイズのような声でそう言った。喋り方は亡者そのものだ。

「やはり君達か。どうせこんな事だろうと思っていたよ。さあ、これに懲りて二度と」

「おいおい、事態が飲み込めない俺たちのために説明してくれないか？ 部室に来たら見ず知らずの死体が転がってた、じゃあ怖いだろう」

誰がやったのかは聞かなくてもわかるから省略だ。死体三人の顔に、くつきりと締め付けられた跡がある。アイアンクローの跡だ。

「よりにもよって私めを美緒様と間違えられるとは……失礼にもほどがございます」

ブツブツ文句言うのはいいが、本人いないとこでよろしく。

「彼らは元科学部の部員。私の先輩だった輩だよ。とはいえ、早々に退部を宣言して今では無関係のはずなのだがね」

「なにがだ！ ちゃんと手紙読めよな、相変わらず人の話を聞かない奴だな」

「読む価値のない手紙だったのね、失敬」

先輩三人の顔色がみるみる真っ赤に染まってゆく。科学部時代は

毎日こんな有様だったのだから容易に想像できる。憐憫の情を禁じえない。

「くそう、だから直接言うべきだと言ったんだ」「なにを！ 言っても無視されるだけだと言ってビビったのは甲斐屋だろ！」「違う、それは織手の案だ、俺じゃない」「ちがうってー、増鵜が言い出したんじゃないか。何でいつつ僕ばっか」

見事に責任転嫁がぐるぐると回っているのはいいが、美緒はもうとつくに興味を失って何か別のことに始めてるぞ。できるならこういうのは決めてから話を持ってきてもらいたい。さもないと、

「本当に、お亡くなりになってみられますか？」

いった瞬間には既に実行に移している。まさに有言実行の見本のようで素晴らしいが、ここは止めるべきなんだよな。だってもうチアノーゼが始めてるんだもん。

「イラつく気持ちはわかるがその辺にしとけよ、ナイアガラ。ほんとに死ぬぞ」

先ほどの会話で、おそらく三人のリーダーと目される甲斐屋なる人物が、アイアンクロウのまま持ち上げられるという狂気じみた技で今際の際をさまよっている。他の二人なんか、さっきの攻撃を思い出して委縮しきっている始末だ。トラウマ生成の瞬間に立ち会ったようだ。

「で、話は何だね？ 端的に言いたまえ。ちなみに部室を明け渡すつもりはない」

「もう交渉ですらないな、それ」

ぐつたりと死体に逆戻りした甲斐屋はもう使い物にならないと判断したらしく、もう一人の増鵜なる人物が震える声で喋り出す。

「お、俺達は新しい部を立ち上げた。それに際して、この科学準備室を明け渡してもらいたい。そもそもここは、俺達科学部が使っていた」

「ふん、しかし君達は部を出て行き、科学部を前身とした超科学部がここを使用するのはものの道理。ポツと出の君らにその権利はな

い」

まあ、どっちもどっちだが、今回は美緒の方が正論っぽい気がする。俺は黙って頷くだけにとどめる。にしても、美緒の方が正しいなんてことあるんだな。信じられん。

と、決着がついたかに見えた瞬間、それまで死体だった甲斐屋がもそりと起き上がる。

「あ、ゾンビだ」

「きんもー。動きがきもい。うちああいいう男キラーイ」

そして崩れ落ちて、三度死体に逆戻り。うさぎにとどめ刺されるなよな。ちなみに、ちゃんと姿かくして言ってるあたり、喋るウサギの立ち位置を分かっているらしい。常識的な悪魔って何かやだな。「えーっと、じゃ、僕が代わりに言うけど。ここの顧問は？」

「そんなもんいらん」

即答ですか、さすがですな美緒さん。

「いや、要るとか要らないとかじゃないと思うんだけど。いるかいなかなんだよ」

そういうウィットに富んだ返しだったのかと、この織手なる人物の会話能力に少々感嘆する。伊達に美緒と同じ部に数カ月とはいえたわけではないようだ。実際、この三人の中で一番使えるのはこの人なんだろうな。って先輩に失礼か。

「さあ。考えたこともないが、科学部の体制をそのまま引き継いでいるので、幕部がそのまま顧問のはずだ」

幕部といえば、冴えない理科教師だったように思うが、一年の授業を持っていないので、さして面識はない。ハゲなのを知っている程度だ。って、お前は教師を呼び捨てか。

「その幕部先生、新科学部の顧問だよ。僕らの窮状を見かねて、こっちの顧問をやるように言ってくれたんだ。というわけで、天王寺さんのところは顧問なしの状態ってわけ」

あらま、一発逆転されちゃったわけだ。

「なんだと？ そんな横暴がまかり通ってたまるものか。きちんと

規則にのっとって、公正に行われるべきだ」

美緒が言うと何かの冗談にしか聞こえない。

「といってもどの部の顧問をするかは先生の方に一任されてるわけだし。それと、こんなわけのわからない、実績も残らないところの名前だけ顧問よりも、理科の先生としては僕らを応援してくれるんだってさ」

ううん、なんて正論なんだ。

「これね。ちなみに、顧問の掛け持ちはできないから、天王寺さんがこの部を存続させるならちゃんと別の顧問探さなきゃだめだよ」

絶妙のタイミングで差し出されたのは『部活動申請用紙』なる一枚の紙切れ。しっかりと「新科学部」の文字に加えて、想起人の欄に三人の氏名。さらに、顧問の欄には幕部なる人物の直筆サインと印鑑まで押されている。

何の裏打ちもないような口ぶりではないとは思ったが、見事な下準備には頭が下がる思いだ。これだけの自信ということは、おそらくこちらが新しい顧問を見つけれないことまで織り込み済みなんだろうな。

「こりゃ本物だわ。美緒、さすがにこれは」

「で、これがなんだというのだね？」

「や、だからここは正式な部じゃなくなったんだから、ここを部室として使う権利は」

そりゃたじろぐわな。どう見ても自分たちが圧倒的に正しいことを言っつて、筋も通しているんだもん。でも、一つ忘れてますよ、先輩方。自分が誰を相手にしてるのか。

「簡単な理屈だ。我々も顧問を確保して、もう一度部としての申請をし直せば済む話だ。そうなれば、ここは引き続き我々のものだ」

「でも、もう顧問できる先生なんかあまってないし、っていうかも僕たちは申請を出してるわけで」

「とにかく」

勢いよく立ちあがる美緒。どこから湧いてくるのかと聞きたくな

る自信を漲らせ、自慢のブロンドヘアを勢いよくなびかせる。こういう立ち居振る舞い、様になるよな。

「超科学部はこのようなことではくじけないよ。黙って指をくわえて見ていたまえ」

「いや、ちよつと、もう僕たちは申請して」

「文句でもあるのかね？」

「いや、その、もう」

「待っていただきたいとお願い申し上げておりますのが、お分かりいただけないので？」

パキパキとナイアガラ指が鳴る。

「わ、わかったよ。こ、今週いっぱい立ち上げを待つから、その間に」

それだけを言うつと脱兎のごとく駆け出した三人。背中が気の毒なほどに小さく見えた。

「学校は社会の縮図とはよく言ったもんだな」

勝てば官軍、力が正義。超科学部のキャッチフレーズはこれで決まりだな。

「魔王らしく、なってきたね」

おいおい、吹水までこんな色に染まってきたのかよ。

「では、今週の目標も決まったところで作戦会議だ」

「おー」

何で美緒が生き生きしているのかはさておいて、ノリノリの吹水は何を期待しているのか？ あと、楽しそうに身を乗り出しているカナメとモモ、お前たちは絶対に何のことかわかってないだろ。

にしても、なんでこう次から次へ一大事に事欠かないかね、この部活は。

防衛？ 作戦

科学部が超科学部として本格稼働して、はや一週間。というか、まだ一週間しかたつてないのかというのが実感だ。どういう意味だった？ あえて言わなくても、科学準備室の素晴らしい惨状を見れば、言葉は必要ない。少なくとも、部活で本気の暴力を自称神の世界から来た女に叩き込まれるような世界、日常だなんて信じたくない。

「何でお前んとこの部長様は生活指導にも風紀委員にも生徒会にも文句言われねえさ？」

「本人に聞いてくれ。そして、できれば告発してきてくれ。風紀委員でもなんでもいい」

目の前でカレーパンを食いながら携帯をいじっているのは、根隅真樹夫。席が近かったので話すようになった、入学以来の付き合いだ。

「滅相もねえさ。緑一中の魔女に関わろうなんて、そんな命知らずの親知らず、この学校にはいねえさ。一名を覗いて」

うるせえ。俺だってお前みたいに中学の時からアレを知ってりやこうはならなかっただろうよ。しかしあだ名が『魔女』とは、美緒はやっぱり中学時代からああなのかと、その一言だけで想像できてしまうのがすごい。名は体を表す、だな。

「魔女？」

フォークとスプーンで俺と同じ中身の弁当箱をつついているカナメが、きょとんとしている。俺なら三分とかからずに食いきれるほどの小さな弁当箱だが、きちんと栄養バランスがとれているのはすごいと思う。喫茶店オーナーはだてじゃない、ってどこか。

「ああ、すごかったさ。二年の時だったかな？ 科学室の薬品パクってものすげえ爆薬の実験したんだけどな、おかげでグラウンドが一週間使用禁止になったぐらいさ。隕石落っこちたみたいだったさ」

「なんだそりゃ？ 核爆弾でも作ったのかよ？」

「テルミット反応だよ。金属アルミニウムを用いた一般的な酸化物還元法だ。その特徴である高温で膨大な熱量を利用したかったのがうまくいなくてね」

聞いてないのに説明に來なくてもいい。黙って飯食つてろ。

「おお、うまそうな弁当だね、カナメ君。華美さんの手作りとはうらやましい」

「おいしいよう」

『うちも腹減ったー』

「にしても、カナメちゃんが飛び級クラスの実力つてのは、この姿からは想像もできないさねえ。なんか妹がいるみたいさ」

笑うと目がびっくりするぐらい垂れ目になるが、それがなんとなくいやらしいという女子がいるのは、本人にだけ内緒だ。

「あんまそういうこと言わん方がいいぞ。命が惜しいならな」

こわーい保護者がいるからな、と胸の中で付け足してから俺も力ナメを見る。

満貫寺高校の制服であるセーラー服に身を包んだカナメ。さすがに美緒のような改造こそ施してはいないが、サイズが微妙にあつていない。さすがのナイアガラでもたったの一日でカナメサイズの制服を調達してくるのは不可能だったらしく、既製品の最小サイズを折り込んだりして着ている。

そう、カナメはおれたちのクラスに入学してきた。転入生として。ただし、あまりにも唐突なうえに強引な転入だったために担任はおるか、ほかのどの教師も把握していなかった。そこに、書類だけは整っているという無茶苦茶なごり押しで高校生になったというのだから、CIAもびっくりの手腕だ。もちろん、その書類の出所や戸籍や住民票なんかについては全てナイアガラが準備したのだが、俺は一切関与していない、するつもりもない。世の中知らない方がいいこともある。

「ロリコンシユウがカナメちゃん一人占めのためにそんなこと言っ

てるさ？ 変態さ」

「冗談でもやめてくれ。俺の沽券にかかわる。それ以上に、生き死にかかわる」

『あいつ怖いよな！。こないだうちもマジで殺されるかと思った！』
ま、死なない体になっちまったんで、生き死に縁のない俺だけだな。

「それよりびつくりしたのは委員長さ。まさかあの科学部に」

というわけで翌日。

「なんで俺は包帯でぐるぐる巻きにされてるんだ？」

部活から逃げ出そうとした俺は、例によってげた箱で謎の攻撃を食らって気がつけば部室、というわけだ。しかし毎回、俺はどんな攻撃食らってるんだ？

「部の存続のために決まっているじゃないか。それとも私が個人的な趣味でこんなことをするとでも？」

あり得るのでやめてもらいたい。

「ぐるぐるー。ぐるぐるー」

「そうでございます。できれば首のあたりを重点的に力を込めて」

「死ぬ、それ死ぬから！」

嬉しそうに包帯を俺に巻くカナメに、殺人を指導するナイアガラ俺、殺したいくらい嫌われてるとかどんだだけだよ。死なないけど。

「それもいいね。いっそ息の根が止まっていると説得力がある」

そろそろ俺を生き物として尊重しようぜ、美緒さん。

「んで、包帯ぐるぐる巻きの俺はどこに運搬されるんだ？ このままミイラ男としてお化け屋敷にでも売っ払おうってんじゃないだろうな？」

「まさか。ただちよつと保健室に行ってもらっただけだよ」

げっ！ なんつった？ 今まさか、保健室って言わなかったか？

「冗談、だよな」

「本気、だよ。この学校でどこの部の顧問もしていないのは養護教

諭の浜だけだ」

うそだろ？ 保健室ってあの保健室だぞ。足を踏み入れたものは決して無傷では帰ってこられないとすらいわれる、満貫寺屈指の魔窟。骨折した野球部員が患部にばんそうこうだけを貼られて帰ってきた、という伝説がまことしやかにささやかれているが、それすら真実味があるレベルだ。

「だめだだめだだめだ！ 俺を殺す気か！」

「あなたは死にませんのでご安心を。まあ、不死ゆえに死ぬほどの苦痛を延々と受け続けるという素敵な体験はなさるかもしれませんが」

「ぐるぐるーう」

「イヤすぎだろ、放せ！ くそう、動かない。カナメ、どんだけ包帯巻いてんだ！」

既に両手両足をガツチガチに固められていて、芋虫のように動くのが精いつばいだ。しかも、ナイアガラが俺を抱え上げているので脱出はほぼ不可能。ちくしょう、なんでこんな時に絶妙の連携を發揮するんだ、この部は。

「さて、ではこの生贄をささげに」

「おい！ 生贄ってどういうことだ、おい！ おいいい！」

もちろん、抵抗なんて無駄だってわかってる。でもさ、無駄だってわかっていても生きるためにあかくもんだろ？ それが命ってことだろ？

「あなたは既に人間ではございませんけどね」

「夢も希望もあつたもんじゃねえな」

「と騒ぐ間に到着だよ。たのもー！」

消毒液独特のにおいが廊下にまで滲み出しているが、この匂いに戦慄を覚えるなんて世界中でもここぐらいのもんだ。

「やかましい！ 帰れ！」

おいおい、信じられんがこれが保険教師で二十代女の発言かよ本当に病人だったらどうすんだよ。と、口に出してはいけない。何せ

これがこの保健室を魔窟たらしめている悪の元凶。保険教師兼擁護教師、浜茜。名実ともに満貫寺最強の教師だ。

漂白したように真っ白な白衣に健康サンダル、ざっくりと後ろでくくった髪型はポニーテールというには少々ぶっきらぼうだ。見るからに柔和そうな顔立ちのくせに、口からは罵声しか出てこない。

「病人です」

「ほっとけ、若いんだから勝手に治る」

「ぐるぐるー」

「この通り、包帯ぐるぐる巻きの重症患者でございます」

「あ？ もう処置済みだろそれ。だったら廊下にも転がしとけ。

それとも壊れてんのは脳みそか？ だったら専門外だ。脳と性病はここじゃ治らん」

ひでえ。このやり取りだけで、保健室の本質が垣間見える。

「というのはここに来る口実で、茜先生にお願いがあつて来たのです」

「断る。あたしは今プリン食うのに忙しいんだ」

すげえ、美緒が問答無用で断られるとこなんて初めて見た。しかも、プリンを食う片手間で断られている。何でプリンなんだ？ 似合わないな。

「プリンほどの食いもんは他にねえだろ。幸せはプリンでありプリンは幸せである、だよ。プリンのためならダークサイドに落ちてもかまわん」

心配すんな、もう落ちてる。

と、そんな浜のプリン至上主義の演説などさらつと無視した美緒も負けてはいない。

「我が部の顧問になつてもらいたい」

自分の主張を貫くだけの者同士の会話なんて、こんなもんだわな。

「断るつつただろ……なに？ 顧問？」

安物の事務椅子をギシギシいわせながら振り返る姿は、どこことなく先日的美緒を想起させる。傍若無人な輩というのは、仕草が似る

もののなのか。

「ええ、顧問です。我が部の顧問を担えるのは厚顔無恥にして傍若無人、唯我独尊の浜先生以外にないとの結論に至ったわけです」

「ほう、それで人が首を縦に振ると思ってるあたりがすごいな。天王寺美緒」

「私をご存じとは見上げたものです。さあ、この契約書にサインを」
「断る」

だろうな。そのつもりだった人間でさえ返答を変えるレベルだ。これをマジでやっているんだとしたら、ある意味で天才だ。

「何故です？」

何故です、ってお前に聞きたいわ。

「私は忙しい。ただでさえ面倒な事務作業に無駄な職員会議、果ては怪我をしたバカの面倒まで見ねばならん。そんな中で部活動などに時間を割くなんて、面倒だろう」

たぶん本音は最後の一言なんだろうな。ここまで露骨にめんどくさそうな顔をする大人もどうかと思うが、その分ストレートでわかりやすい。曖昧に茶を濁されるより、いくらかすつきりする。

「さあ帰った帰った。私は忙しい」

取りつく島もない、ってのはまさにこのことだな。顔はこっちを向いているのに、話を聞く気なんてさらさらないのが丸わかりだ。にしても、ここまで邪険にされるってのも解せない。なんて思っていると、それまで黙っていたカナメが不意に口を開いた。

「シュー、攻撃」

「ええー！」

「ナイスだ、カナメ君！ それでこそ超科学部員だよ」

なんだそれ？ 何で攻撃？ そして何で勝手に動く俺の腕。これじゃあまるで握った拳を浜に叩きつけようとしてるみたいじゃないか。やめろ、俺の意志じゃない。

「いい度胸だ。要求を吞まねば実力行使とは、その意気だけは認めてやろう。けど」

「いいいいや、ちちち、ちが、ちが」

「そうか、血が見たいか。望むところだ」

振り上げられる俺の拳、逃げたいのに逃げられない俺の体、迫りくる浜の鉄拳。おい、何で保健室にメリケンサックがあるんだあああああああ。

黒幕？　もしかして

「な、見られたらう」

「鼻血が、止まりばせん」

しかも、何で俺の鼻血を俺が掃除させられてんだ？

「まあ意気込みはわかったんだが、何故私なんだ？　他に教員がないにしても、私には言いにくいだらう、普通」

「ご自分のことがよくわかっていらっしゃるようだが、だからと言ってメリケンサックでカウンターはひでえぞ。いくらなんでも。」

「見ての通り、我々の目標は彼女を立派な魔王として育成することです」

うん。どこをどう見ても、見ての通りにはつながらないな。

「そこで、魔王を地でいく存在ならば顧問としては申し分ないと考えたのです」

「さらつと失礼だぞ、天王寺」

「というわけで、お願いします」

物言いはいつものソレだが、俺達としゃべっているときにはない真摯さが垣間見える。こいつはこいつで本気なんだろうな。自分の目標ってこともあるだろうけど、吹水のことを考えているのも事実なんだろう。さもないければ、ここまでではないはずだ、こいつの性格なら。だったら、

「俺からば、おでがいしばす。ぜひ、超科学部どこぼんでい」

鼻にポッチを詰めているせいでちゃんと発音できない。うわあ、情けねえ。

「しかしなあ、魔王だ魔法だと俄かには信じがたいな。何でもやってみることは大事だろうけど、さすがに部としての体裁を保つのであればそれなりに筋の通った活動趣旨が必要だろう」

痛いところを突かれる。たしかに、そもそも魔法という概念そのものが世界の常識にないところに、魔王ときたもんだ。お遊び仲良

しサークルの電波満載活動にしか見えない。そうなれば、部活としての認定そのものが難しいだろう。いくら科学部が前身の実験活動といっても、限度がある。

その上で少なくとも、目の前の人物だけは納得させなければならぬ。難易度高いな。

「なーなー、うち思うんだけどさ、魔王の魔力であの科学部とかいう連中をぶっ飛ばした方が早くないか？　なんかめんどくさくなってきたよ」

「黙れウサギ。あんな、それだと解決にならんとさつきも」

「いやあゝゝん、かつわいいいゝん」

「ゝゝゝえ？」

誰の口からともなく漏れた音は、例外なく目の前の光景が異常事態であることを告げている。ナイアガラや美緒でさえもがそうなんだから、間違いないだろう。

「きやうゝ、しゃべるうさたん、うさたゝん。もういい、魔法でいい魔王でもいい、うさたんがしゃべるんなら先生何でも許しちゃう、きやるゝん」

「ちょ、放せよな。くるし、くるしい！　抱くな！　モコモコすんな、くすぐりたい！」

「いやあん、もゝもゝあかねちゃんモフモフだいしゅき、しゅきゝん。魔法さいこゝん」

誰からともなくその光景から目をそらす。そうしてやるのが優しい。耐えろ。

「ちよつと、助けるよな。シュー、杏子！」

がんばれうさぎ、お前の存在でこの人が魔法の存在を肯定するんだ。耐えろ。

いつもの自分に重ねながら、人身御供ならぬウサ身御供と化したモモを見つめておく。犠牲になったやつ姿を目に焼き付けておくのが、せめてもの礼儀ってもんだろう。

「ときに、魔王というのが出来上がってしまうのはどうなんだ？

私の知る限りで、魔王が現れると大体世界は滅びないか？ ゲームなんかだとたいていそうだろう」

たっぷり十分は喋るウサギを堪能した後に、そんなキリツとした顔してももう遅い。あんたの胸元でぐったりと疲れ切っているモモがその証拠だからな。

しかし、あのでれで後の後とは思えない、ズバリ鋭いご質問。俺もそれは気になるところなんだが、誰か明確に答えられるんだろうか？

「だいじょーぶじゃねえの？ 魔王から世界滅びるオーラが垂れ流しなわけでもないだろうしさ。ま、魔王になった影響で精神的な変化が現れちゃったら話は別だけどよ」

うさぎ、投げやりすぎる説明だぞ。

「というわけで、安全です」

「は、はい。頑張つて、いい魔王になりますから」

「なんとすれば美緒様の魔法で魔界に送ってしまえばよろしゅうございます。人界に危険はございません」

なんだかもう、收拾がつかなくなってるんだが……いい魔王って何だよ。

「ふん……半信半疑ではあるが、面白そうだな。私に立ち向かってくる生徒なんて今まで一人もいなかったしな、その意気に免じてハンコを押してやろう」

うそつけ、喋るうさぎにやられただけのくせに。

「ありがとう、魔人」

「急にハンコを押したくなってきたぞ」

「美緒、余計なことを言うな」

とか何とか言いながら、部活動申請用紙の顧問の欄にきっちり署名捺印をくれるんだから、ありがたい。あとはこれを生徒会に提出すれば万事オッケーってわけだ。

いや、もっと大きな問題を据え置きにしているのはわかっているんだ。あるだろ、現実から目をそらすために、目の前の小さなことに

集中するって。テスト前の部屋掃除みたいなもんだよ。

「でもまあ、これで一段落ついたわけだな。よかったな、委員長」
「う、うん。あ、ありが、とう。これで私も、もっともつと強く、なれる。」

必死に言葉を探しながらの、オドオドとした態度はまだまだ魔王には程遠いが、俺としてはこのまんまでいいんじゃないかと思う。
っていうか、これ以上俺の周りに魔王的な奴が増えていくと、命にかかわる。美緒とナイアガラだけでも十分だったのに、顧問まで魔王だ。おかんは……考えないようにしよう。

「あ、あと、ね。さっきの、あれ」

あれって、どれだ？ 何を言われるのか気が気ではない。まさか、数々の変態的所業に愛想を尽かされてしまったのだろうか まずい、それはまずい！

「い、いや、さっきのあれはなんていうか、その」

「ぼ、僕のために、先生に飛びかかっていった、の。びっくりしたけど、嬉しかった」

やばい、上目づかいに何かドキドキしてるぞ。静まれ、静まれ俺のリビドー！

「ん」

こういうときは必要以上に喋るとぼろが出る。にしても何だ、今のは。確かにおどおどした感じが可愛いと思うが、この距離がこんなにやばいとは想定外だ。

「ん、ああ。俺もびっくりだ」

俺の意志じゃないんでほんとにびっくりだったけどな。まだ心臓バクバク言ってる。しかもたぶん、このバクバクはその驚きだけじゃない。

「イラっとくるほど青春してるとこ申し訳ないんだが、あと一つ気になることがある」

メリケンサックをもてあそびながら話す白衣の養護教師。新手の戦闘漫画に出てきそうな光景だが、反対側の手がずつつさぎを撫

でているせいで当初ほどの恐さはない。

「魔王ということは、やっぱアレも出てくるんじゃないのか？」

「アレ、と言うと？」

「あれだよ、ほら、RPGなんかだと必ず魔王とセットで出てくる」
ああ、そう言われれば考えなかったわけじゃないけど、確かにそうだよな。普通ワンセットだよな。アレ。でもな、敢えて言わなかったんだよ。

「勇者だね！ 私としたことがうっかりしていた。そうだ、勇者を倒してこそその魔王だ」

あゝあ、こうなるのわかってたから黙ってたのに。火がついちやったやつがいるよ。どうすんだよめんどくさいな。

もちろんこの直後に発せられた勅命が、俺を平穏な日常からさらに遠ざけたんだが、そんなもんはもう返ってこないと思った方がいいってことか？ どうなんだ、神様？

「おい！ どういうことだ、言われたとおりにやったのに部室が返ってこなかったぞ」

「おかしいじゃないか、また部室で好き勝手できる上にあの天王寺に一泡吹かせられるって話だっただろ？ 話が違う」

「まあ予想外だったけど、どうするの？ 科学部の活動、部室ないとできないよね？」

放課後の空き教室。グラウンドから聞こえる運動部の掛け声は、どこか別の世界の音のようだ。埃っぽさと生乾きの雑巾のにおいが鼻をつく。

一か所に集まった新科学部三人組は、机を取り囲むようにして声を荒らげている。その声の向けられた先に、一人の男子生徒が鬱陶しそうに眉をひそめて座っている。

「おい、聞いているのか？」

その一言に、それまで無言を貫いてきた男子生徒のこめかみがひきつるように痙攣する。かれこれ十五分、下手に出るのにも限界が

あるといった風体だ。

「聞いてるからこんな顔してるんだろ？ 自分たちの役に立たないつぷりを棚に上げて俺に文句言うつて、どんだけ使えないんだよ」

人睨みで三人を閉口させる眼光の鋭さは、美緒やナイアガラにも引けを取らない。

さらに男は眉間のしわを深めながら続けるが、その口ぶりに遠慮会釈はない。それどころか、相手を切りつける刃物のような残酷ささえうかがえる。顔立ちはどこか柔和な雰囲気をもっている、そのギャップが口ぶりのえげつなさを際立たせている。

「も、俺だつて暇じゃないんだからな、勘弁してくれよな」

気さくな言葉の中に、露骨なほどの棘。しかも向けられた本人でなければ気づけないような巧妙さで隠されたそれは、ピンポイントで相手の心を抉る。しかも、無意識に。

「とりあえず、もういいから適当に部屋探しなよ。もう俺はどうこ
う言わないし。ごめんね、あれこれ口出しして」

「いや、そんな」

「なに？ まだなんかある？」

実に朗らかな笑顔。教科書や予備校のポスターあたりに採用され
そうな百点満点の笑みだが、その内実を知る者には刃物を首筋に突
き付けられているに等しい。

「あ、いや、そういうことじゃなくつてね」

「も、織手君なら大丈夫かなて思ったのに、痛いなあ。やっぱ天
王寺は難攻不落かあ」

「そんな、なんていうか、その」

「ま、仕方ないつて。俺だつてビビるもん、あんな怖い人」

「でもね」そう言つて男、続ける。

「そうも言つてられないんだよねー。世界のためなんだつてさ」
ふざけた物言いのくせに、男の眼はその瞬間だけは、笑っていな
かった。

「世界つて何だよ。マジで救うのかよ、副会長」

小馬鹿にしたような口調とは裏腹に、その眼光には気弱そうな色彩がゆらゆらと揺らめいて、やらされている感がたつぷりあふれ出ている。

生徒会長、桑戸仁。

誰もある程度の尊敬と、「あそこにいるのが自分じゃなくて良かった」という思いを込めて、こっ呼ぶ。

副会長の犬、と。

覚醒？ 魔界の王

「今、なんつった？」

「よく聞こえなかったが、重大発表だったように思うよ」

というわけでリクエスト。ワンモアタイムだ。

「あ、あのね。昨日からね、魔法、使えるように、なった」

「へえ」

うん。今日の卵焼きはいつになく美味だ。あの鬼のようなおかも伊達や酔狂で喫茶店経営をしているわけではない。若いころは手当たりしだい料理で道場破りをやったとかいつてたが、あの女ならあり得る話だ。

「シューウー、卵焼き落としたあ」

「あのな、何でもかんでも落としたもんを俺に食わせるな。大丈夫だ、三秒ルールだ」

「はい」

はいはい、結局食うのは俺ですよ。

「何故そんな大事なことを昼休みまで黙っていたのかね！ 授業なんかに出ている場合ではない。シュータロー、我々は午後から休講だ！」

んな訳あるか、大学じゃあるまいし。高校生の自主休講なんて、それこそ俺の場合は命の危機に直結だからパスだ。否定の意味合いを込めて無言の視線をくれてやる。

「み、美緒、声おつきいよ」

「カナメ君、来たまえ。部室でラムネを飲もう」

「うん」

「おらあ！ なにこずるいことやってんだてめえ！」

しかもラムネごときに釣られてのこのこついて行かないでくれよな、神様。何故だかこいつは人間の世界の駄菓子やらジャンクフードやらが好きらしい。先日など、一銭焼きを与えたらとび跳ねて喜

なんだから、安上がりだよな。

「何を言っているんだね。私はカナメ君を誘っただけだよ。それとも君は、彼女とひと時も離れたくないような劣情を胸に秘めているのかね？」

「ひゅーひゅー、お熱いさー。唐揚げもーらい」

「てめえ、何とさくさでラス一食ってんだ！ だいたいなあ……うつ」

何だこの背筋に直接ブリザードを吹き付けられたような寒気は。体よりも、むしろ魂の方が凍りつくような冷たさは初めての体験だった。直後にその正体が判明する。

殺意。

窓ガラスの向こう、廊下を挟んだはるか彼方からこちらに向けられているのは、間違いなくナイアガラ視線。視力ではなく、体が神気になったせいでやたらと気配の類に敏感になった俺が感じるようになった、ありがたくないものの一つだ。

「こ、この話題は封印しよう。精神衛生上よろしくない」

「何さ？ シューがカナメちゃんにぞっこんつてのはもう」

「だから！ うああ、内臓を抉るこの不快な感触はああああ」

「せ、千古君は、そうなの？ カナメちゃんみたいな子が、こ、好み？」

『うお！ 何だこの殺意のオーラ。自分に向けられてるんじゃないのに、こつちまで鳥肌立つてるぞ』

うさぎのくせに鳥肌たつのかよ。

「ともかくだ！ くすぶっている時間が一秒でも惜しい！ 急がないか！」

とんでもない量の弁当を恐るべき勢いでかつ込む姿は、テレビで見る大食いチャンピオンそのものだ。あの細い体のどこにそれだけの飯が入るのか、納得いかない。四次元胃袋を搭載しているとしたか考えられない。広辞苑サイズの弁当箱って、おかしいだろ。

「さあ、早く部屋で」

「あ、ちよつと美緒。僕まだご飯が途中で」

「そんなものは部室で食いたまえ。魔法が先だよ、魔王君！」

かわいそうに。左手でギリギリランチパックを一つ捕まえられたようだが、残された蒸しパンとパックの牛乳が不憫だ。あとで届けてやるう。っていうか、結局部室行かなきゃなんだよな、はあ。

「なんていうか、お前ら、毎日が全力さね」

俺の唐揚げを咀嚼する根隅のほつたを無意味にくにくにと押しやるが、男同士でほつたを触るといふ異常なまでのむなし行為にすぐに心が折れた。

「ギリギリ、とも言っけどな」

残りの弁当をかつ込みながら、ようやく訪れた束の間の平穩を噛みしめる。美緒がいなくてだけで教室は春風のような穏やかな空気に包まれ、光の粒子さえふわふわと宙を舞っているようだ。というか、なんかきらきらしたものが本当に舞ってないか？

「どうしたさ？」

「どうしたって、お前。これ、見えないのか？」

「これって、何がさ？」

「何が、って……え？ めっちゃキラキラして……え？」

きょとんとしている根隅。マジで見えないのか？ 蛍みみたいな光の粒が、こんなにも教室に充満してるっていうのに。何なら理科の教科書に出てくる天の川みたいになってる場所まであるっていうのに。

「何言ってるさ？ とうとうシユウまで脳内お花畑になったさ？」

確認のためにカナメを見ると、カナメはしっかりと光の粒子を目で追っている。が、どうやら見えているのは俺達二人だけのようで、クラスの他のやつらはまるで見えていないらしい。それこそ会話をしている二人の間を光が横切ってもピクリとも反応しない。

しかも、よく見るとその光は人の体をすり抜けるようにして飛んでいる。

ためしに指先でつまんでみると、ほわつとした綿毛のような感触

とともににはじめて消滅してしまう。どうやら魔法的・神的・魔王的な物質だろうことが、想像された

「カナメ、聞いていいか。これ、何だかわかるか？」

面白生物を見るような眼で俺を見ている根隅はさておいて、俺はカナメに尋ねてみる。

「ん。神気みたいなものかなあ？ でも、ちょっと違う気もするう。ねえ、知ってるう？」

「あゝ？ ああ。こりや魔力だよ、魔力。うちの力の源だけど、すげえなこの量。こんだけあればどんな魔法でも使いたい放題だな」
鞆からひよっこり顔を出したウサギは、クンクンと鼻を鳴らしているばかりか、時折口を開いてパクリと宙に舞う光の粒子を食べては舌なめずりをしている。

『食うのかよ』

『お前らだつて餌食つて体力補給するだろ？ こうやって直接食つても補給できるんだよ。にしても、こんなにも具現化した魔力がそこらじゅうに飛んでるなんて初めて見た』

『人間の世界では、ってことか？』

それにしてもあまりにもうさが物珍しそうだと思っていると案の定、

『うちの世界でもこんな状態そうそうないよ。それこそ天の恵み状態だ』

魔界だか地獄だか知らんが、天の恵みっていう表現が適切だとは思えないが、まあそうなんだろう。どうにも最近、悪魔が身近で困る。

『たぶん、杏子だろうな』

『委員長が？』

「のわ、どうしたさいきなり？ お花畑のみならず脳内彼女と会話まで始めたさ？」

やべ、すっかり声に出しちゃった。

「あー、いや、おう！ カナメ、食い終わったか？ そしたらこの

パンと、おわあなんてこったカバンまで忘れてるじゃないかー、ひどいなあ美緒のやつもー」

ごく自然にリカバリー。忘れ物を哀れな吹水に届けてやる体裁を整えて、しかも鞆にいるうさぎまで回収するファインプレー。俺、グッジョブ。

めっちゃ憐れみの目で根隅に見られるなんて屈辱以外の何でもない。しかし、ここで話しているといつまた口に出しちまうかもわからん。めんどくせえな、テレパシー。

「しゅうう、演技下手あ」

「うつせえ、とにかく脱出すりゃなんだっていいんだよ」

『え？ アレ演技だったのか？ てつきり気が狂ったふりかとおキヤアアア』

全力で鞆をぶん回す。縦横斜めにふつとんで無重力体験でもしやがれ、うさ公。ああああ、どうせ俺は演技下手ですよ。中学の文化祭で全てのセリフをカットされた男だよ。

『ふあ、ふあう、ふあう、星が、ほしがまわるうるるう』

よし。悪魔撃退。じゃなかった。

「んで、さっきの話だけだよ、委員長とふわふわぴかぴかの魔力とどう関係があんだ？」

勢いで教室を飛び出し、あてもなく廊下を歩きながら鞆のなかのうさぎに尋ねる。

『ふうええええ。な、かんけいって、そりゃだって杏子はまおーなんだからまりよくぐらいふりまくにきまって、ふええええ、まわるう』

「あ、それでなんだあ。杏子のおいだあ、これ」

匂いなんかすんのか？ くんかくんか……あ、いや、通りすがりの女子が俺をものすつこい変なもん見る目で見て、いや、違う、俺はそういう趣味ではなくああああ……

「シュウウ、どうかしたのお？」

「いや、忘れてくれ。今俺は大事な何かをたくさん失った」

「ふぬ？」

だろうな。お前にやわからんよ。お子様で、なおかつ神様なんて言う純粹な心の持ち主には、穢れ始めた思春期男子のリビドーなんて。

にしても何が悲しいって、あてもなく歩いてるはずなのに、俺の脚は吸い寄せられるように部室に向かうんだな。まあ、吹水の荷物を持って行ってやるんだから当たり前なんだが、それにしてもあまりにも自然に足が向いたのは悲しかった。天王寺美緒政権の恐怖政治の影響なのは間違いない。

「ふわあ」「おおっ！」

扉を開けた瞬間に、目の前を何かが横切った。あわや直撃コースのそれを霞めるような紙一重で交わしたが、鼻っ面を捕らえたほのかな熱に顔をしかめる。何か、トカゲみたいな鳥みたいな生き物にも見えたが、はつきりとは分らない。

「で、お前らは何をやってるんだ？」

第一声がため息とともにこぼれる。いや、ため息だけにならないかったのは、褒めるべきところだぞ、これ。

「何って、決まっているではないか。魔法が使えるというのだからやるべきは一つ、魔物の生成だよ」

「ナイアガラ希望としてはドラゴンが見とうございます。架空の生物もえー、でございます」

まず、部室を開けるとんでもない量のピンク粒子が狭い室内にぎゅうぎゅう詰めになっていた。扉を開けたとたんに勢いよく噴き出すような魔力を部屋に溜めるな。

しかも、魔物を作るだと？

「あ、え、千古君は違うのが、いい？ 私、どんなのがいいのか、わからなくって」

部屋の真ん中では、その魔力を粘土のようにこねながら何かを作っている魔王の姿。興味津津にそれを覗き込んで、邪悪なアドバイスをする悪魔のごとき存在二人にはもう何を言つべくもないが、

手にした資料だけは奪い去っておいた。

「ああ、それがないと具体的なドラゴンのイメージが伝えられないではないか」

「伝えんでいーわ！ お前らは何だ？ 世界を混沌の海に沈めたいのか？」

ゲームの攻略本の、モンスターのグラフィックが掲載されたペー
ジを閉じる。なんで本の後ろの方の、凶悪なモンスターばつかのペ
ージ開いてんだよ。

「でも、魔王はとにかく世界を征服するものだって、美緒に言われ
て、そう言われれば、そう、かなって」

「そう、かなって……じゃないよもー。委員長ものせられるなよな。
基本的にこいつらの言うことは聞き流さなきゃ」

「いい度胸だなシュータロー」

「じゃあお前の言うとおりにドラゴンだかキマイラだかが出来上が
った暁には何するつもりだったんだよ？」

「決まり切ったことを。まずは一色市を混乱の渦に巻き込み、次は
政府にけしかけ」

「というわけだ。いい魔王になるんならこれはダメだろ？」

「うん……」

シュンとする吹水が、ある程度形になりかけていたピンクの光か
ら手を離すと、ふわふわと宙に舞って霧のように散ってしまう。と
りあえず世界の危機は去ったと思いたい。

世界の命運がこんな薄汚い小部屋にかかっているなんて、正直解
せない。

「にしてもすごいな、杏子。昨日の今日でこんなに濃度と純度の高
い魔力が溢れるなんて、魔王の才能あったのかも」

鞆からぴよこんと飛びだしたモモが、嬉しそうに魔力の粒に頭を
押しつけたり、前足でつついたりしている。そのたびに光の粒がは
じけて、キラキラと星のように散ってゆく。たしかに、純度はわか
らないが濃度はすごそうだ。目に見えるんだもんな。

「そう、かな？　でも、昨日のは失敗しちゃって、どこかに行っちゃったし」

ん？

「あとはこの調子で制御の訓練と、魔力のキャパシティを大きくしていけば魔王としては申し分なしだな」

「うん。何だか、実感があるって、嬉しい」

「でも、ちよつとここまでの才能は想定がいすぎるっつーか、そのモモが何やらもごもごと口ごもっているが、結局何を言うてもなかった。何だったんだろうな？　聞きたいような、聞きたくないような。」

「さすがだね。我が部自慢の魔王だけはあるね、委員長君」

「あー、ちよつとよろしいか？」

おずおずと、給食費を盗んだのは僕です、ぐらいの申し訳なさを纏わせた右手を挙げると、実にめんどくさそうなナイアガラ視線に貫かれる。そういう目はコスプレしながらすると迫力が半減するぞ。今日はシンプルにワニのコスプレですね。ドラゴンが見たいって言うてたけど、そこにかかってるんだろうか？

「仰ってみてください。場合によっては許可いたします」

逆だろ普通。そのワニの尻尾はどういう理屈で動いてんだよ。お前、尻尾はえとらんかっただろ。

「さつき、昨日のは失敗してどっか行つた、とか聞こえたけど空耳だよな」

「何を言っているんだね、委員長君はちゃんとそう言っていたではないか」

「で、さつきは何やらモンスターののようなものを作ろうとしてなかったか？」

「まったくもって節穴でございますね（びたんびたん）魔物の精製以外の何にお見えになったのでございますか？」

ワニの口の部分から顔を出しているので、見ようによってはワニに食われているように見えなくてもないが、できればほんとに食われ

てくれないかな。願望を形にするべく、とりあえず口を閉じてひもで縛っておいた。

「もちろん、探し出してる、よな？」

きよろきよろして、今初めて気がつきましたみたいな視線をぐるりと巡らせている様子だが、マジですか？ 誰に助けを求めても、この場所にまともな助けを提供できるような業者はありません。むしろ青少年の健全な育成からは程遠いやつの巣窟です。とくに、そこで楽しそうに魔力の粒をついついている金髪ロングの女なんかはもつてのほかだぞ。何だその、額に貼った紙切れは。キョンシーごっこか？ 古いな。

「見たまえ。この魔法陣を額に貼ると魔力が見えるのだよ」

そうですか。魔力になっちまえ。

「つまり、まだ野放し、と」

返事はないが、その慌てっぷりは首を縦に振られるよりわかりやすい。

「ちなみに、何を作ったのか、教えてくれるか？」

気が進まないがやむを得ない。あー、胃が痛くなりそうだ。

「えと……」

もじもじ、もじもじ。いや、恥じらう姿がそれらしいのはわかるし、眼鏡の奥でうるんだ瞳も女の子っぽいのだが、今は魔王様らしくしてくれ。

「ま……ま、じょ」

「へえ」

「初めてにしては上出来だったよな。ちょいイメージと違って物理攻撃重視だったけど」

「へえ」

魔女ってモンスターだったんだ。っていう以外に俺に何か期待しているとしたら大間違いだ。魔女が放し飼いになっている町に魔王と神様がいて、神様の下僕の俺以外は例外なく非常識の極北を極めたようなやつらばかりだ。何が言える？ 強いて言うなら、

「何やっとなじゃー！」

「ひうう、ご、ごめん、なさい」

「だいたいなあ！ あぶつ」

胃がねじ切れるかと思うような衝撃が脳天まで突き抜けて、意識がそのまま頭のとっぺんから離脱する。部室を俯瞰する不思議な経験は、何だか心地よかった。

ああ、俺、ワニにボディブロー食らったんだ。道理で重いわけだよ。

「シユウタロー。人間だれしも失敗はつきものだ。大事なのはリカバリ」

「ぞ、それは、ぎいだ」

ごふつ。血反吐でもはくかと思ったら、出たのはただの咳だけ。くそう、吐血すればさすがにこの集団から抜けられ……ねえわな。

「どっかで聞いたセリフだが、なら何でリカーバーに入ってないんだ」

「入っていたではないか。今度こそ委員長君の思い描いた通りの魔女を」

「そっちじゃねえよ！ リカバーの方向が直角に間違ってるよ！

違うだろ普通！」

「まったく、何が不満だというのだね？ 君はこの超科学部の活動を加速させたいのか減速させたいのかどっちだね？」

「停止しろよ停止！」

「ええゝゝ」

神様と魔王がそろって「ええゝ」って言うな。

「カナメ、お前は言っちゃダメだろ。特に」

「でも、そうしたら杏子は立派な魔王になれないんじゃないの？」
魔王が大成するのはもはや神様公認ってことなのか？ まあそこは今更だからもう目をつぶる。というかつぶつてもはつきり見えるぐらい我らが超科学部は大魔王を作り上げる気満々だが、だからと言ってこの世をモンスターの跳梁跋扈する魔界に変えるわけには

いかんだろ。

むーむーもごもご。

ワニが何か言いたそうだけど、うるさい。

「その魔女は勝手に消滅したりしないのか？」

「たぶんしねえな。きつかけこそ魔力による精製とはいえ、与えられたのは命だ。魔力を使いきりでもしない限りは消滅しないよ。今のあんたみたいにな」

うさぎの鼻がツイツと俺に向けられる。

今の俺のように、つてのはぐさりと来るものがあつたが、今はそんなことを言ってる場合じゃないと心を奮い立たせる。ああ、俺の命…… やっぱ奮い立たねえ。

「つて、てことは、今もその辺を逃げ回ってるってことか」

「たぶんな。突然生成されてびっくりしたんだろ、慌てて飛び出して行っちゃった」

笑い話じゃないんだが、まあ魔神のこいつに言っても実感なさそうだ。同類の生き物の存在そのものに疑問を持てて言ってるようなもんだもんな。

「しかし、まずくないか？」

「確かに一理あるな」

おお、思いもよらないところから良識たつぷりの声が上がった。美緒、お前にそんなまともな思考回路が搭載されているなんて想像もしなかった俺を許してくれ。

「魔女を一刻も早く捕まえ、我らのしもべとするべきだったな。その点に思い至らなかったとは、少々気がはやっていたということか。自重せねばな」

はい。想像どおりでした。やっぱり、搭載されてませんでした。それでも、

「とりあえず、探した後のことは後になってから考えよう。そうしよう。うん」

こんなにも未来を夢見ない高校生に、俺はいつからなったんだろ

うな。ごめんな、中学んときの俺。夢も希望もなくしたかもしれん。
最初からあったかどうか怪しいが。

進展？ 魔王軍

「これで、十匹目、と」

体育倉庫の裏手。ほぼ朽ち果てたサッカーゴールのネットに絡まるようにして身動きが取れなくなっているそいつをつまみあげる。そいつが「何なのか」と尋ねられると、俺は即答で「何だろうね」と答える。だってわかんねえんだもん、こんな生き物。ってか、これ本当に生き物なのか？

「これなにい？」

「なんだろうな」

はい、宣言通りの会話、ってわけだ。

にしても、カナメの疑問ももつともだ。なんせ、二足歩行するネズミに蝙蝠の羽が生えている、としか言いようがないんだからな。

「んじゃ、よろしくな」

「あ、うん」

その「何か」を吹水に放つてよこすと、そいつはさしたる抵抗も見せずに吹水の掌の上に着地し、そのまますうっと姿を消してしまう。あとに残るのは、指の隙間からこぼれるようにして落ちる淡いピンクの光、魔力だけだ。

俺の指先にはじわじわとしびれるような感触が残されているが、俺の体を構成する神気と、吹水の作りだした魔力がぶつかっているからだ。魔力と神気というのは相反するエネルギーらしく、お互いをぶつけると対消滅してしまうとのことだ。その辺はなんとなく、納得できる気がする。RPGの光と闇の属性みたいなもんだな。

「何回見ても不思議だよな。ちゃんとつめるのにな」

言って指先をこすり合わせるように動かしてみると、まだそこには生き物の体独特の温度や体毛の感触がふんわりと残っている。

「あんまりおっきいのとぶつかると、シュウの存在自体が消えちゃうんだよう」

さらりと恐ろしいことを言わないでください。

「使い魔、なんだって。ば、僕の、魔力に引かれて、魔力そのものが形に、なるって」

だから、吹水の指先一つでそいつは魔力へと還元されてしまう、ということらしい。

しかも、そいつらのイメージが妙にほわほわとかわいらしくなるのは、吹水の中にある生物のイメージが影響しているらしいというのだから、手に負えない。先ほどのやつも、ネズミというよりハムスターに近い感じだ。魔族をあんなにかわいく作られてもな。

もとが魔力なので、魔力の見える者にしか見えないのが救いだっ
た。こんなもんが誰かれ構わず見えたら、大騒ぎ間違いなしだろう。
「こんな小物追っかけてる場合じゃない気もするけど」

「でも、美緒が来るまで待ってる、って」

美緒は今この場所にはいない。なんて平和なんだ。これほどの平和がいまだかつてあつただろうか。まあ、あつたっちゃあつたが、最近の記憶の中にはない。

ただ、いないからといって心が平穏を保っているかといわれるとそれもまたそういうわけではない。何せ今、美緒のやつは戦闘まっただ中だろうからな。

敵の名を、生徒会会計という。

実に事務的な話だが、美緒が科学部ではなく「超科学部」なる組織を立ち上げた際に、生徒会としては新組織の発足という体裁になったのだという。それはつまり、科学部としての実績を引き継いだ組織ではなく、全くまっさらな組織だということだ。

まあ素晴らしい。真っ白なキャンバスに七色の絵の具で夢という名の俺達だけの物語を描こう、なんて夢いっぱい希望いっぱいの甘酸っぱい話ではない。

予算。

この二文字が大きいのしかっかってくるわけである。腐っても科学部は長年の歴史を持つそれなりの部活動であり、それなりの予算

は確保されていた。しかし、超科学部は何の実績もないうえにポツと出の一年生だけの部活動だ。となれば、予算の審査は相当に厳しくなると考えるのが妥当だ。そのために、さすがの美緒も予算会議への出席を余儀なくされている、というわけだ。

「あいつ、すげえよな。金属バット持って乗り込んで来たもんな」
三十分ほど前の話である。突然部室の扉が開いたかと思うと、そこに現れたのはえらく小柄な女子生徒。それこそカナメと比べても遜色のないコンパクトボディは、やはり制服のサイズがないのか、だばだばのカーディガンを着ていたのが印象的だ。

そのちびっこがいきなり、金属バットを振りかざしながらぼそりと呟いた。

「天王寺美緒、部費横領とはいいい度胸だ」

「私の部に宣戦布告とはいいい度胸だね。木安春」

そして幕を開ける、第一回物騒な棒きれ王者決定トーナメント決勝戦。金属バットvsバールの火ぶたが切って落とされたわけだが、教室に響き渡る、金属同士がぶつかる衝撃音というのは思い出しても悪寒が走る。

「すごかった、ねえ」

「ああ」

すごいなんてもんじゃない。怒号の合間に響く金属音。それを食らいつくすように口を開いて言いたいことを言い合う両者。纏めればたったの二行「科学部時代の部費を返納しろ。新たな部として部費を申請しろ」で終わる話なのに、何故か延々五分以上も互いの武器を叩きつけ合った。たぶん、底知れない私怨があるんだろうが、首を突っ込むような馬鹿はやらない。俺だって成長するんだ。

というわけで、魔女探しは一時中断。俺達は校内をぶらつきながら細かい魔力生命をつまみ上げては魔力に返すという、地道な作業に没頭しているわけだ。モモ曰く、たぶん大丈夫だけど念のため、だそつだ。魔王の魔力ってのはそれほど影響力があるのかなんとか、いよいよ魔界じみてきたぞ。

「ぶちようは、大変、だね」

今なお絶賛魔力生産中の吹水が、眼鏡にピンク色の光を灯して話している。その間にもまた一匹。今度はまんまハムスターだけどちよつと尻尾が長いかな、という生き物が吹水につまみ上げられて光になる。十一匹。

「もうちよつと僕が、魔力を制御できれば、あんまり生まれにくいんだ。ごめんね」

申し訳なさそうに言う。

「ま、しゃーねえって。魔王になってまだ何日もたってねえんだし、慣れればいいさ」

「う、うん。あり、がと」

魔王になって、か。しかし、お願いすれば魔王に慣れてしまう世界だったなんてちよつと驚きだ。ナイアガラではないが、この世にチートがあるなんて複雑な気分だ。

とはいうが、こっちはこっちで一向に人間に戻る手段を探せそうにもないし、かといって神の使いとして何かができるかといえば、ただ死なないだけという消極的な能力だ。

「でも、たとえばなんだけどよ、魔物の類って委員長がやってるみたいに魔力に還すんじゃないかって、戦ってやつつけても魔力に戻るのか？」

「あ、え？ どう、なんだろう？」

「たぶん、消滅すると思う」

意外なところからの回答だが、まあカナメが知っててもおかしくはないか。

試してみるように、俺は手近にふわふわと綿毛のように浮かぶ魔力の粒を手にとって指先で強めにつまんでみると、はじけて消えたキラキラと光る粒子がゆっくりと薄れて消えていく様に、なんとなく見とれてしまう。

「そういうこと、だよ」

「ふーん……体が魔力できてるから、やつつけると消滅、か……」

そついや、俺の体もそうだってナイアガラが言つてたな。神氣、だ
つけ？ が空っぽになると消えるんだろ」

「うん。でもシユウは大丈夫だろう。あたしがちゃんと補充するよ
う」

「そりやどーも。こりやますます人間離れだな」

「も、もし、僕の力でもいいなら、ぼ、僕が補充」

「ん？」

「なな、な、なんでも、ない」

なんだろな？ 神様と魔王から心配される不死身の肉体ってのは。
「ちよつとトイレ。先帰つて……はもらえないな。カナメ、ちよつ
と待つてくれ」

コクンと首を振るカナメ。ふにふにと魔力の粒を指先で弄ぶのが
ら楽しいらしい。

「にしても、トイレ一つ行くにもカナメとの距離考えるつて、やつ
ぱ不便だよな」

もう慣れてはきたが、ふとした瞬間に感じる不便さが自分の立場
を再確認させる。

カナメと吹水を残した俺は手近な扉から校舎に入つて、最寄りの
トイレを探索。昼下がりの廊下の冷氣に強まった尿意を全力で抑え
込む。なかなかのイメージンシーだ。

「それじゃもうちよつとウロウロして、我らが部長様の帰りを部室
で待つか……ん？」

というわけにもいかなさそうだな。さて、どうするかな。

面倒な選択はしたくないんだけど……はてさて、どうしたものか
ね。

とはいつても、目の前に現れた『尿意とは別のイメージンシー』
は、どうやら俺の人生をからめ捕る気満々のご様子だ。

考えながら歩くつていうのはどうにも性に合わない。だから考え
ずに歩く。そうすれば目の前の事態を解決する神の啓示が空から降
ってくるでも思っているように。

なさそうだな。神様すぐそこにいるもんな。

「はぁ……まぁ、第一発見者が俺なのが、せめてもの救い、か」
とりあえず、トイレだけ済ませよう。ちょっとぐらい現実逃避してもいいだろ。

勇者？ 現る

「ねえ副会長、マジでやんの？　いくら何でもやりすぎじゃないかな？」

「何言ってるんだ！　俺たちが満貫寺の秩序と平和を守らないでだれが守るんだよ？」

「そうはいつでも俺達ただの生徒会だぜ？」

ギロリと、瞳に危ない光がとる。言った瞬間に、自分の一言が致命的だったことに気がつくが時すでに遅しだ。

「ただのって、そんな覚悟で会長やってるとか、信じらんねえ！　生徒会長たるもの」

「わーかった、わかったから腕ひしぎ十字はといてくれ。痛い、もげる」

スカートの裾からこぼれる細い太ももは体脂肪などというものは縁がなさそうなほどにほっそりとしている。にもかかわらず、技の完成度は抜群だ。身長差を補って余りある破壊力に、会長、こと桑戸仁は苦悶の表情を浮かべている。

「まあまあ、暴力はよくないですよ……会計……さん」

「いい加減名前覚えてよな、あーちゃんも。俺の名前は木安、木安春だよ。もー、一カ月以上一緒に生徒会やってるだろ？」

腕ひしぎのまま首だけを起こして声のする方を向くと、そこには等身大のビスクドールが椅子に座っている。と、初めて見た人間ならだれでもそう思うだろうが、ところがどっこい立派に生きている。ただ、こんなところにゴシッククローリータ衣装が座っていれば誰だつて人形かそれに類する何かだと思ってしかるべし、だ。

ただしそのゴスロリ衣装、確かにひらひらふりふりで、レースの装飾や所々花をあしらったワンポイント、果てはエンボスの細かい刺繍なども施されているがよく見ると実はこれ、制服である。原形をとどめてはいないが、改造制服のなれの果てだ。というか、こ

ここまで来ると制服っぽさが微かにするゴスロリ衣装でしかない。

「あはは、あは、ですねえ。どうも人の名前を覚えるのは苦手です」

「ったく、これで勇者だつてんだからな。おい、仁も何とか言えよな、おい」

「あのねえ、春ちゃんはもうちょっと乙女らしくした方がいいと思うんだよね。こんな関節技で屈服させるんじゃないで女の色香で」

「ああん？ 関節が増える関節技かけつぞこら？」

「増えかけたけどね」

生徒会室の長机の上には各種お菓子にチョコレートが並べられているが、おもに副会長である四夜明日菜あすなのカロリーに消える運命のものだ。仁はそもそも甘いものは好まないし、春は菓子など食うなら米を食えという、日本の農家が聞いたら泣いて喜んで米の一俵や二俵ぐらい寄付されそうな主義主張の持ち主だ。というわけで、部屋の片隅では炊飯器が絶賛水蒸気噴出中だ。

「でもね、ちゃんとやらないとこの世界が魔物でいっぱいになっちゃうですよ」

きのことタケノコどつちにすべきかを真剣に悩みながら、明日菜が呟いた。これだけを聞けば頭が宇宙からの電波を受信して邪気眼か中二病でも発症したのだろうと考えるのが妥当だが、そういうわけでもないらしい。

それが証拠に、空いた方の手でピンク色のふわふわした光をつまんで握りつぶすと、蛍のような光はパツとはじけて消滅する。杏子の生み出した魔力を消滅させたというわけだ。はつきりとその光が見えているのは、他の二人も同じらしい。

「不っ思議だよな。ある日突然だもんな。びっくりしたわ、朝いきなり会議で「魔王を倒さないと世界が闇に包まれるです」だっけ？

あーちゃんぶっ壊れたと思ったわ」

炊飯器の炊きあがりまでのカウントダウンに目をキラキラさせる春の意識は、八割が米二割が会話といったところか。

「たしかに、これで例のわけわからん夢見てなきや、俺達も信じなかったよ」

「嘘つけ、おめえは何があっても明日菜の味方のくせに」

「な、何言ってるんだよ！ そ、そ、そ」

わかりやすい青春の構図だが、例にもれず仁の行動の意図するところに明日菜は気が付いていない。味方がいるのはうれしいな、程度だ。それを底意地悪くほくそ笑みながら眺める春、というのがこの三人の定番だ。

「んだけどよ、マジで摩訶不思議だよな。三人そろっておんなじ夢見るなんてよ。しかも勇者のお告げだもんな。どこの宗教だよって思ったし」

「だから、ちゃんとやるです。きつと魔王はこの学校にいます。そう勇者の勘が告げてるです」

「おー、出たぞあーちゃんの『勇者の勘』が。これのおかげで俺たちめっちゃ大変だったっの。科学部が怪しいとか何とかいうから解散させてみたら全然関係ねーし」

「あの人達には悪いことしたね。部室も天王寺さんに乗っ取られちゃって使えないみたいだし。あの人、いろいろ問題起こすからついでに大人しくさせたかったんだけどなあ」

「つつーか、あいつが大魔王みたいなやつだよな。それだったら納得できんだけどなー。マジで違うのかよ？」

炊きあがりまでの残り時間が三分を切った炊飯器は、春の目には宝箱のように見えていることだろう。しかし、美緒の話のときだけはそれも一時中断、手近に転がってあった金属バットに手がのびる所々に見られるへこみは、先日の激闘の名残だ。

「うん。あの人からは特に魔力は感じないです。邪悪ではあるですけどね」

「それ、冗談に聞こえないから」

「ま、あいつはそのうち俺が狩る。世界の平和だの魔王だのは俺にはピンとこねえけど、あいつはのさばらせちゃおかねえ。生徒会会

計の名のもとに」

「はいはい、バットかまえない。あ、炊けてるよ」

「うひょっ！ おっにぎり〜、おっにぎり〜。何はなくとも具はな
くとも〜」

凄まじい手際でおにぎりの量産体制に入る春。女子高生が一升炊
きの炊飯器を抱える姿というのは何やら倒錯的なエロティシズムを
感じないでもないが、色気はない。

糖分が胸に貯蔵されているとしか思えない明日菜に対して、春は
食った分がどこかに消えているとしか思えないシルエットだ。『次
元の狭間』の二つ名はだてではない。

「で、具体的に俺達もパトロールの強化、ってわけ？」

足元に現れた謎の生物を一瞥もせず踏み潰して、光へと変える。
ネズミや小鳥のような、どこか愛嬌を感じる姿をしているだけに、
見てしまうと倒すのが忍びないようだ。

「そうです。ここ数日、魔力が強まってきてるですから、もしかし
たら何かあるかもと、勇者の勘が言ってるですよ」

「こーんなにかわいいのにな」

床に座り込み、両手ではおにぎりを作りながら、足の指で器用に
別の謎生物をつまみあげる。おかげでスカートはめくれあがって中
身が御開帳されているが、本人はさほど気にしないらしい。

「でも魔物です。心を鬼にすることも、勇者には必要なのです」

「まあ、ドラクエのモンスターもかわいいって戦えなきゃやられる
もんな」

「むぐもぐもぐむぐむぐむぐぬんぐんぐんぐ」

「食ってからでいいぞ」

「ごっくん。」

「まあなー。かわいいからってタヌキをやっつけないと野菜も食
い荒らされるもんな」

喩えとしてはどうかと思しながら、大筋でははずれではないと判
断して仁も同意する。ただ、この時の仁の注意のほとんどは、驚く

べき速度で消費されてゆく白米おにぎりに集中している。手品としか思えない。「消えた」という表現が驚くほどしっくりくる。

「というわけです。頑張るです、会長」

「え？ 俺え？ なんか今回俺ばっか活動して」

「やってくれる、ですよな？」

きのことタケノコを両方消費しきった手が、ポツキーに伸びかけたところでふと止まり、静かな視線が仁に向けられる。

どこまでも無邪気で、まっすぐに、絵にかけば星やシャボンのエフェクトを何重にもかけなければいけないような瞳は、それだけで勇者の素養を物語っているようだ。ちよつとうつろで焦点があつてない感じは決して眠いからではない。こういう目なのだ。

「ん、あー、だな。ん〜」

「素直に言えよな、俺に任せとけ、って。どーせ断らねえもぐもぐもぐもぐ」

「うるさいな。黙って食ってろ」

「（ごつくん）だから口にも入ってる間は喋ってねーだろ」

「だからつてももの言いたそうに、何かを伝えたそうにするなよ。さっぱりわからん」

「ったく、乙女心の一つも読めねえで何が会長だよ。ったく」

「お前らは会長をなんだと思ってる」

「雑用係」「実働部隊？ です」

「よくわかったよありがとう」

鼻で笑いながらまんざらでもなさそうなのは、Mだからだ。本人に自覚がないのは唯一の救いだろう。

「なので、今日からはパトロールです。縦一列で、魔物退治です」

「うーい」

「じゃあとりあえず」

甘いものがぶちまけられた机の上に仁が広げたのは数枚のコピー用紙。

生徒会へのご意見ご要望を投書形式で受け付けるといふ、どこの

学校にもありがちな企画だが、ここ満貫寺も例外ではない。ただ他と違って、今年の生徒会のすごいところはその実行力にあった。

投書したご意見ご要望へのレスポンスはほぼ百パーセントという驚異的な数字を叩き出しているのだ。これはひとえに、副会長である明日菜の「やってあげるです」の一言に逆らえない仁のおかげなわけだが、そこに青春の甘酸っぱさはない。

それでも結果だけを見ればきちんと実行する生徒会ということになるわけで、今日も今日とて生徒の個人的な恨みつらみから、部活同士の積年の軋轢まで色とりどりの問題ごとがぶち込まれているというわけだ。その中の一枚をつまみあげて、仁は言う。

「お化け退治、てのが来てるんだけど」

もちろん答えのわかりきった疑問文に、春は目も耳もくれずの残りの飯をやつつける。

「ちようどいいです。やってあげるです」

こうして歯車は回り出した。どっちに向いて回ってどこに行くのか、そもそも自分の歯車が回っているのかさえわからない人間も巻き込んで、時計は回る。

踏み出した足が何かを踏んだらしく、ぱつと床にピンク色の光がはじけて消える。と同時に何故か鳴り響く、どこかで聞いたことのあるファンファーレ。

「お、あーちゃんレベル上がったな」

幽霊？ 搜索

「マミーマートに八時集合」

若干不服そうな顔で部屋に戻ってきた美緒は、それだけを告げるとどこからともなく引つ張り出してきた寝袋にくるまって、寝息を立て始めてしまった。住んでるのか？

もちろん、部の主様がそんな有様なのでその日の部活はその場で一時解散。午後八時という健全と不健全の境界線のような時間に持ち越しとなったわけだ。

もちろん、早く帰ったからといって、自宅で俺を待っているのが安息であるはずもなく、たつぷり七時半まで店の手伝いをして、ようやく七時四十五分。シャワーですっきりしたケツを自転車のサドルに乗っけるにいたったわけだ。

ちなみに、鬼母の経営する喫茶店は、カナメというマスコットのおかげで客足が右肩上がりらしい。だからって俺がフロアに出ると露骨にがっかりするなよな、客ども。あとおっさんども、ナイアガラメイド服に期待してそわそわと長居するのやめる。

昼間は頬に受ける風が心地よい程度だったが、さすがに夏のまだ遠いこの時期の夜は、自転車の風といえども馬鹿にはできない。薄い長袖一枚というのは、さすがに応える。

「もう一枚必要だったな、こりゃ。あーさみい」

「寒い？ 貸そうかあ？」

後ろの荷台に腰かけたカナメが、心配そうにシャツの裾を引っ張っている。

「いや、いい。すぐそこだし」

それに、カナメのジャンパー取ったとなれば、殺される。関係者各位に、一回ずつ。

「それより、そっちこそ寒くないか？」

「うん、ぜんぜん。華美のくれたすかじゃん、暖かいよう」

そりゃよかった。暖かいから？ まさか。俺がよかったと言ったのは、そのスカジャンに書かれている文字を理解できなくて、って意味だよ。神様に『天魔覆滅』なんて刺繍の入った服着せるなよな。」「コンビニに、美緒がいるかなあ？」

「さあな。あいつの場合もしかしたら大魔王の封印ばりに寝てもおかしくねえから、次に目覚めるのは百年後かもな」

「だとしたら何という幸せだろうか。俺も幸せみんな幸せ。世界が混乱に陥ることもなく、まさにハッピーエンドだ。ま、無理なんだけどな。」

「コンビニに、って遠いのお？」

「いや、そこ曲がってすぐの、ほらあの黄色い電飾の看板だ」

顎をしゃくって示した先には、蛍光灯で裏から照らされた黄色の看板。マミーマートだ。全国展開をうたってはいるものの、このあたりの地方に集中しているせいか品揃えは地域密着型だ。近所で採れた野菜を売ってる店もあるらしい。田舎万歳。

「二十四、だあ」

「一応コンビニだからな。でも、深夜なんて買い物来るやついんのか？」

都会なら夜のコンビニというのは不良や良からぬ大人のたまり場、国道沿いならトラックの運ちゃん憩いの場にでもなるんだろうけど、ここはそんな気配は微塵もない。幽霊が来るために開けてる、といわれても信用できるレベルだ。オリジナルブランドの格安商品？ 何それおいしいの、って感じた。

田舎らしく無駄にだだっ広鵜駐車スペースには、一台軽トラが止まっているだけという、店の現状をリアルに物語っていた。

そんな中だったので、駐輪場にどっかりと鎮座した一台のバイクはひと際目を引いた。バイクや車にさほど詳しくない俺にはよくわからないが、何やらめっちゃめっちゃ速そうな奴だという印象を与える一品だ。

「すっげ。ピッカピカだな」

隣に置いた俺のチャリがいつもの三割増しでみすばらしく見えてしまう。それほどにバイクはピカピカに磨きあげられており、エンジンやマフラーは街灯も月の明かりも漏れなく反射してキラキラと輝いていた。

「どうしたね？ 盗んだバイクで走りだしたくなっただかね、しょうね……なんだ、シューターローではないか」

折よく自動ドアの向こうから缶を片手に現れた美緒の姿に、俺は度肝を抜かれたわけだ。フルフェイスのヘルメット片手に缶コーヒ―、バシッと決まったデニムのホットパンツが、ハリウッド映画のヒロインみたいなんだから悔しいよな。ファッションは気合いだよ、と言い切るだけはある。この寒いのに大したもんだ。

「お前のかよ。まあ似合うっちゃ似合うけど」

「いや、私のはそっちだ。私は普通二輪の免許はまだ取得していないのですね」

え？ そっち？ って言われてその向こう側を見ると、確かにそこにも一台の二輪車が鎮座ましまして。こちらこそそれなりに綺麗にはされているが、磨きあげられているというわけではないし、形も速さとは縁がなさそうだ。その代わりと言っては何だが、実に実用的で親しみと愛着を覚えるスタイル。おそらく世界で一番有名な、日本を代表する二輪車。スーパーカブ。俺でも名前を知ってるレベルだ。

「お前、カブにフルフェイスで乗ってるのかよ？」

「安全第一だ」

似合わねえ言葉だな、と思っていると続きがあった。

「これならいつ何時何に襲われても大丈夫だ」

納得。ですよねー。

「んじゃ、あとは委員長が来れば揃うわけだな」

「もう来ているよ。中で会計を済ませて出てくるはず……ん、きたきた」

ピロピロン、というチャイムに反応してそちらを見ると、確かに

そこには吹水の姿があつたわけだが、どういうことだ？　できの悪いコラージュを見せられている気分だ。

首から上は全くいつも通りの委員長。ちょっと眠そうなのはもう夜だからか？　早いな。肩の出たワンピースに履き古したスニーカー、羽織るようにして着ている花柄ニットのカーディガンはうつすらとピンク色。この時点ですでにちぐはぐな感じは否めないが、そんなものは微々たる誤差だ。何より際立っているのは、両手につけられたいかつい皮手袋に、肘からぶら下がるフルフェイスのヘルメット。まさか、うそだろ？

「ほ、僕のバイク……興味、あるの？」

「マジで？」

「マジ、で」

そのかつこで乗るの？　スカートで？　ってか、吹水が？　バイクに？

「ほ、本当はもつとおっきいやつのほうが強そうかなって思ったんだけど、僕の体格だと、このあたりが限界みたいで。重たくって」
「充分だろ」

バイク業界に詳しくない俺には、上がどこまであるのかは分からないが、これよりでっかいバイクに乗っているい吹水は、なんか、イヤだ。

「にしても、これで探して回るのか？　俺、チャリだからついていけないぞ」

「うん、さすがにこれは私も計算外だった。委員長君にこんな才能があつたとはね」

「ご、ごめんなさい。乗り物、これしかなくて。僕、自転車に乗れないから」

「そうか。ならやむを得ないな。私の後ろに乗りたまえ。幸いヘルメットもあるし、フルフェイスだ。これなら顔がばれることはない」
何か色々おかしいが、もちろんスルーだ。世の中って不思議な事がいっぱいありますよねー、って阿呆のふりをするのが賢い生き方

だと知った十五の夜。

「ナイアガラはこねーのか？」

吹水の背中に背負われたウサギからうさが顔を出した。ウサギ形のリュックつて、それであのバイクに乗って来たのか。シールドすぎるだろ。

「うん。他に用事があるんだってえ。放置ぶれえだよ」

「どこでそういう単語覚えるんだ、まったく」

「そっか。言っちゃなんだけどちよつとほつとした。あ、絶対本人には内緒な」

その気持ちはわかる。激しく同意だ。とはいっても、出がけに「何かあった際にはおわかりでござますね？」と、命も凍りつくような視線とアイアンクロウを頂戴した身としては、ある意味いてもらった方がよかったのかもと思わないでもない。

「では、超科学部活動開始だよ！」

「「おお〜」」

美緒の宣言に声と拳を上げて賛同した吹水とカナメ。ひらひらワンプイスと天魔覆滅なスカジャンという凸凹コンビが、夜の街に繰り出した。

「まあ、見つからないんだけどな」

先に行くカブのテールランプをぼんやりと追いかけながら、答えを知っている俺は誰にも聞こえないように一人ごちた。

トイレから出るときに、手を拭きながら目を閉じた。いなくなつてたらいーなー。でもいるよなーたぶん。そんなこと考えながら目を開けると、やっぱりいた。

「ですよねー」

ハテナマークが頭の上に飛び出してるのが見えそうな、見事な角度で首をかしげているのは初めて見る女の子だが、そいつが人ではないことは一目見て分かった。だって見たことないだろ？ 三十センチぐらい宙に浮いて歩く、ふりっふりひらっひらなドレスみたい

な服着た（これはあってもいいか）、エルフ耳の女の子なんて。髪なんかピンクだぞピンク。もちろん二次元じゃない。厚みがあって、しっかりそこにいるわけだ。

「これで謎の喋るちっこい生物と宝石キラキラのスティックを持てれば、日曜朝八時半って感じだな」

「はちじ、はん？」

「いや、こつちの話だ。忘れてくれ」

とれるんじゃないかってほど首を傾げる。瞳は純粹な興味と怖れが混在した不思議な色を灯している。だろうな。なんせ自分が何者かさえわかってないって顔だ。

「見えるの？」

「かなりくつきりはつきり。見えちゃって、ますね、はい」

まあ、この一言でこの少女の出自やら何やらが薄ぼんやりと想像できてしまったわけだが、気づきたくなかったな！。

「ねえ、私ってなんだろう？」

「うーん、なんだろうなあ？ 見た感じだと変身魔女っ子で最近はい子とオタクとニートと大きなお友達のあこがれの的かな？ 俺の知識をもとに判断するなら、魔女かな？」

まあたぶん後者で確定なんですけど、さあどうしたもんかな。自覚なさそうだし。

「まじよ？」

「うん、魔女。悪いこと、する？」

ふるふると首を振る。うん、どうやら悪い奴ではないらしい。自己申告だが。

「魔法、使う？」

ふるふる。うん、じゃあさらに一安心。

「えー、っと……人間滅ぼしちゃえーとかむずむず？」

「仲良く、なりたい」

うーん、魔王があればなら生まれる魔物もこれなのか。さっきまで片付けてたちっこいのも、なんか妙に人懐っこかったもんな。

おっかなびつくりこっちの返答を待つ少女は、叱られているみたいに縮こまっている。こんなときどうすればいいのか、俺の人生経験だけでは最良の答えを導き出すのは難しそうだ。弟や妹でもいれば別なんだろうか。

ただ、一つだけ確実に言えることがあった。

「あのな、今こわいお姉ちゃんがお前のこと探してるから、それにだけは見つからないようにした方がいい」

「こわーい？」

「そう。魔王より魔王で魔女より魔女な、俺達のボス」
「ぼす」

まあ、この表現は間違っではないだろう。嘘でも大げさでも紛らわしいでもない。むしろ足りないぐらいだ。大魔王王、とかなら丁度いいぐらいか？

「とりあえずあっちには近づかないようにウロウロしてりゃいい。

学校なら大丈夫だろ」

「うん」

部室の方を指差した俺に魔女は、小さくうなずいて返事をした。そのぐらいしか俺には言えねえよ。すまんね、ふがない俺で。

そう言って、逃げるように立ち去ろうとした俺の背中に、小さな声がかけられる。

「ねえ」

「んあ？」

立ち止まる。後ろ髪を引かれるのとはまたちよつと違うものが、足を鈍らせる。あとになって思えば、たぶんあれは罪悪感とか、そういう類のものだったんだろうな。

「また、会える？」

曖昧に笑って、手を振った。

反乱？ 行動

そんな、ばれたら獄門打ち首な隠しごとの甲斐あってか、魔女捜索の結果が出ないまま過ぎた一週間。俺にとつては目論見がうまくいってほつと一息なんだが、そうではない奴もいる。言わずもがな、美緒だ。

「こつも結果が出ないと抜本的な解決策が必要になってくるね」

こししばらく昼休みに開かれている定例の作戦会議で、とうとう美緒はこんなことをぶち上げた。相変わらず弁当箱がでかい。

「でも、どうしたらいいかな？」

定番のランチパックを咀嚼しながら牛乳を啜る吹水の食欲は、美緒とは天地の開きがある。吹水がどか食いする姿はどうやっても想像できないが。

「もういいんじゃないか？ 大して実害も出てないわけだしよ。な、カナメ？」

「うん」。あたしもそう思う」

「だめだ！ 超科学部の沽券にかかわる問題だよ、これは」

まあこいつがそう言うんだつたらそうかも知れんが、意地になつてるだけなんじゃねえかとも思う。どっちにせよ、俺は従うのみだ、この件に関しては。

「何探すさ？ 天王寺組の今の活動目的は探しものさ？」

「天王寺組ってなんだよ」

「いやあ、なんかそんな感じに見えてきたからさ。お前らって何だかファミリーっていうか、組とかそういうイメージさ」

どつしりと肩が重くなったのがわかる。何だろう、この絶望感は。しかもカナメや吹水は妙にうれしそうだぞ。俺だけなのか？ 俺の常識がおつかしいのか？

「あ、あれさ！ 最近話題のピンクの幽霊探しをしてるさね」

「何だねそれは？」

それは俺も初耳だ。うちの学校は色んなもんが話題になる（その半分ぐらいは我らが部長様だが）が、最近は美緒に振り回されっぱなしのせい、校内の話題なんかにはとんと疎くなっていたようだ。ガラパゴスの生き物に親近感を覚えた十五の昼。

「あれ、ちがったさ？」

「いいから話したまえ」

そしてお前は、人にもものを聞く時ぐらい弁当箱から手を離れたまえ。

「別に、普通さ。最近部活で遅くなったやつなんかが、校内をふらつく謎の幽霊を目撃するって噂さ。なんか、ピンク色の幽霊とか、ほかにもピンクの之魂がふわふわしてるのを見たって話もあったりするさ」

さして珍しくもない、どの学校にでもありそうな怪談話だが、『ピンク』というキーワードがすべてを物語っている。それは美緒も同じようで、飯を咀嚼しながら眉間にしわを寄せている。まずいな、こいつの鋭さは天下一品だ。下手をすると当て推量だけで真実を導き出しかねない。こいつはそういう奴だ。

「まさか、そんな普通の心霊現象を俺達超科学部がおっかけるわけねえだろ。そういうのはオカルト部とかの仕事だって」

ミスリードしておくにこしたことはない。

『なあなあ、いいのか？ 今の話』

『しいっ』

『ぶー』

「調査の必要、ありだね」

くそつ、あわよくばと思ったがやっぱり無理か。自分の無力さを呪うばかりだ。

「でもよ、別に実害がないってんならほつとしても」

「じゃあ、生徒会vsかが……超科学部、さね。なかなか見ものさ」
「おい、今なんつった？」

今日は牛丼弁当並盛という、およそ学生らしからぬ昼飯を旨そう

にほおばる根隅に、俺と美緒の視線が突き刺さる。箸が止まるほどひるんだのは美緒の視線の鋭さに他ならないが、俺の睨み方も尋常ではなかったと思う。自分でもわかるほどだからよっぽどだ。

「え、べ、別にこれももうみんな知ってると思うさ。今回は珍しく生徒会が乗り出した、って……いつもならこんなへんてこな眉つば話を相手にするはずないのにつて。だから俺は、お前らも噛んでると思ったさ」

最悪だ。こういうのが美緒に火をつけるつてのを、この数週間で誰よりも身に染みて分かっているだけに、これはつらい。もう、止めるすべはないかもしれん。

しかも、よりにもよって相手はあの会計のいる生徒会だと？ 何もない方がおかしい。

無言で飯をかつ込む姿がそれを雄弁に物語っている。神気とも魔力とも違う、禍々しいパワーが美緒を包んでいるように見えた。錯覚ではないっぽい。

「やはり、やつらが勇者ということ間違いはないようだね」

ほら、とうとうこんなことまで言い出してるぞ。つてことは俺達は生徒会様に反旗を翻した反乱分子つてことか？ うわつ、なんか似合いすぎるな。

昼休みが残り十分を切ったところで、俺はカナメの手を引いて廊下に出た。

「な、なによう？ いきなり、な、なにに？」

飯を食いながら悩んだ結果だったか、やはりカナメには言っておかないとまずいよな。というか、俺単独では行動できないつてのが肝だ。どうしても協力が必要になる。

「ちよつと、秘密の話だ。このことは美緒には聞かれない」

「ひ、秘密う？」

その言葉を聞いたカナメは、意を決したように勢いよく首を縦に振っている。いや、そんなに全力でやつちゃうと、それもうヘッド

バンキングだから。もげるぞ。

「あ、あー、なんか壮大なもんを期待してるかもしれないから先に言っておくが、これを聞くと共犯」

「共犯で、いいよう！」

「お、おおう」

ちよつと気圧された。

グーを握って、必死に見開いた眼で見つめられると、なおさら言にくいんだが。まあそう言ってくれるのならお言葉に甘えるでしょう。失敗すれば俺が死ぬのは必定なので、俺は覚悟はできている。
「あのな……」

そこからの俺の話を、カナメは頷くでもなくただじつと聞いていた。というか、そうするしかなかったんだろ。俺だったら開始早々に「んなこと俺に言つなよ」で切って捨てるような話だ。そりゃそうだろうな。誰が美緒の意図やら吹水の願望やらを知った上で、魔女見逃す話なんかできるかってんだよ。普通に考えれば裏切り者だ。

なのに俺は、そうせざるを得なかった、って言ったら都合よすぎか？

そんな俺の懊悩も伝わってか、カナメは終始無言で聞き上手に徹してくれた。そして最後に、

「シュウの、したいようにすればいいと思うよう。あ、あたしは、それでも、いいと」

なんて言われたら、こりゃもう後には引けんだろ。美緒や吹水には申し訳ないが、独断専行ってことにさせてもらうことにした。そしてできればこのまま穏便に、俺だけが事実を胸に秘めて……なんてことにできると、この時は本気で思ってたし、そう難しいことでもなかったはずなんだ。

「だよな。俺、神様の使いだもんな」

浅はかだったんだけどな。

抗争？ 勃発

放課後。

あてもなく歩いてみると学校というのがいかに巨大な入れものなのか実感できる。そりゃそうだよな。千人からの高校生と、そいつらが持て余したほぼ無尽蔵のエネルギーを腹に収めにやなんのだから、でかくて当然か。

しかし、今の俺にはその懐の深さが悩みの種だ。

「シュウウ、次どこ行くのお？」

「ん……どこ行くかな？ こういうとき魔法使いもののアニメとかだと頭の中に声が聞こえたりすんだだけ、ど……な」

さぞアホな顔だっただろうと自分でも思う。

たつぷり一時間は校内を徘徊して、着替えをしていた女子バスケットボール部の人間からは覗き疑惑を多分に混入させたじつとりとした視線を浴びせられ、精神と肉体の両方を疲弊させまくっていたとはいえ、今更気がついたなんて我ながらアホの極致だ。

が、なかったことにするにはもったいなさすぎる事実。

「あー、あー……てすてす。聞こえてますが、受信してますか、いつかの魔女さん」

人類であることを諦めた結果手に入れた、数少ない能力。ごく限られた人種（？）の方々との交信に使える無料通話、テレパシーを発信してみる。もしも携帯電話方式で相手の番号が割れていないとダメってんならアウトだけど、テレビ電波方式であることを願って発信。大丈夫、受信したからって受信契約は結ばせたりしない。

「あー、あー」

「どうしたのシュウウ？ 故障お？」

グサリと突き刺さる一言。周りから悪い影響受けまくってる気がするぞ、神様。口半開きでアサツテに焦点の合わない視線を飛ばして、グラウンドの片隅に突っ立ってる姿は宇宙との交信をしている

ように見えるかもしれないけど、露骨に言っちゃだめだ。

『……は、い』

蚊の鳴くような電波受信。集中！ 感度アップ……できるかどうかはわからないが。

『もしもしも』

『も、一個多い』

うむ、コンタクト成功。人類にとっても俺にとっても偉大な一歩。えと、魔女さん。俺、神の使い。俺、魔女、探す。魔女、どこ？ うほうほ。文章作成って、意外と脳みそ使うんだなと新発見。どうでもいい。

『魔女、探される？ 怖い？』

『怖い、ない。俺、平和。話、対話』

……まさかの圏外？

「魔女、ここ」

『着信アリー！ で、どこだ？ 魔女、どこ？』

「シューウ、何やってるのお？」

「ちょっと、静かにしてなさい。今集中してアンテナ探してる最中だから。くう、もっと早くこの能力に気がついていればな」

「ねえ」

「待ってる、ちゃんと俺が魔女を発見して」

「シューウ」

がつくりとその場に崩れ落ちた。初めて見たわ、景色が垂直に流れるとこなんて。貧血やめまいなんて生易しいもんじゃない。これは、そう、たとえるならマリオネットの糸をぷつぷつと切ってしまった時、というところわかりやすいだろう。もちろん、俺が人形。

「話聞いてくれないからあ、神気遮断しよう」

「……」

電池が切れたおもちゃが動けないように、俺の体はピクリとも動かない。というよりも、自分の体であるという認識すら希薄になつてゆく。

「んもつ。魔女きたよう。話ぐらい」かぶ「聞いてよう」

元気注入。という言葉通り、見る見るうちに感覚やら意識が鮮明さを取り戻してゆく。

「あんまりこれやりたくないんだあ、失敗すると消えちゃうからあえ？ なに？ 今俺軽く死にかけてたとかそいうこと？」

「それよりい、魔女お」

ぐりゅっ、といういやな音がして、俺の首は本来曲がる限界をちよつとオーバーして後ろ向きにされる。ああ、生きてるって素晴らしいけど痛い。と、

「あ、魔女。発見」

「はい。魔女」

「シュウウ、ずっと後ろにいるのにバカの顔してるんだもん。まあ、そういえば最後の方はテレパシーではなく肉声だったような気もしなくもないが、過去は振り返らない。恥ずかしいから。」

「元気だったか？」

「あなたよりは」

ですよねー。だって俺、目の前で死にかけたもんな。

「どうしたの？ いきなり呼び出して」

「いや、なんていうか、ちよつと警告って言うか避難勧告って言うか、お前を狙ってるやつがいるから逃げろっていうか」

「私を、狙って？ 怖いお姉さん？ 私に会いに来てくれる人がいるなんて。ねえ、もう来る？ 今日来る？」

「そこで登場、怖いお姉さん。ほう、これが魔女かね？ 思ったよりもコンパクトだな」

「まじで？」

跳ね上がった心臓が、わしづかみにされたように痛い。

いったいどこから現れたのか、いつの間にか俺の背後に立っていた美緒の声が、俺の魂を瞬間冷凍する。はい、俺死んだ。

「マジだ。君が隠れてこそこそ何かをしているとは思ってたが、まさかこんな抜け駆けとはね。まあ私にとってこの程度の隠し事はあえ

て暴く必要もないが。ウサギ君もテレパシーの傍受で一役買ってくれたしね」

くそう、そんなトラップがあつたとは……ウサめ。

首筋を駆け抜けたのは、熱風に近い風。自然のものとは思えないので、もしかしたら声の主が巻き起こしたのかもしれない。こいつならあり得るから困る。

「というわけで魔女君、遊びに来たよ」

「あ、さ、探してたん、だよ。忘れてたんじゃ、ないからね」

十字を切るべきか合掌するべきか、宗教をもたない俺は最後の瞬間に祈る神を決めあぐねていたが、何のことはない、すぐ隣にちよっどいいのがいる。

「何い？」

「いやな、生まれてきたことを懺悔してだな、せめて楽な方の地獄に行けるようにだな」

「しかしまあ、お手柄だよシュータロー。おかげで生徒会のおぶり出しにも成功したわけだしね。泳がせた甲斐があつたというものだ」
額に例の魔力が見える魔法陣を貼って、魔女の頭をなでなでしている美緒は妙に満足顔だが、俺は納得がいかない。泳がされていた、だと？

「驚いた顔をしているようだが、君はすぐに顔に出るからね。何かを隠しているのは一目瞭然だったよ。まあ、ここまでの大物だったというのは想定外だったがね」

「じゃあ、ここしばらくやけに素直だったのは」

「もちろん、そのためだ。こちらが気づいていることを相手に気づかれてはならない。諜報活動の鉄則だよ。まあ、そんなことをしなくとも、君に設置した十三個の盗聴器がすべてを語ってくれたがね」

「普通に犯罪じゃねえか。ってか返せよ、俺のプライベート！」

一体いつどこでつけられたんだ。もう何も信じられなくなりそうだ。

「じゃなくて、そっちはどうでもいい」

「いいのかい？」

「よかねえけど、でもそれはそれとしてだな、あゝくそつ、見つかつちまつたあ！」

「都合が悪いのかい？」

「そりゃ悪いだろ。なんつっても見つかつちまつたんだから」

「何故だね？」

「そりゃ……美緒に見つかったんだから、そりゃ、そりゃあ……」

「獲って食うとでも？」

「そのぐらいは……あれ？」

「そういえば俺、何でこんなに躍起になって隠そうとしてたんだ？
うゝん……見せちゃいけないっていうか、子供に与えちゃいけないおもちゃっていうか……」

「君の中で我々がどのような扱いを受けているのかが、よくわかるいい例だったよ」

「千古君、そう、なの？」

「そう、なのお？」

「おい！ カナメ、裏切んな！」

「ふええゝ」

おぶうつ！ しまった、久々のボディへの衝撃は間違いなく重く後味を引く一撃。完璧な角度で入ったりバーブロー。こんなもんを放つのは俺の周りに二人しかないない。二人もいるのか、道理でよく死にそうになっているわけだ。

「カナメ様に、なんと？」

「なんでも、ごさいば……せん」

今日は何のコスプレ、ですか？ 白くて丸い、餅ですか？

「白米でございます」

こまけー。そして心を読むな。

「お米は活力のもとでございますよ。美緒様の受け売りでございますが」

「そのと「そのとーおり！ 白米は命の源だよ！」

美緒の声を打ち消してまで主張するそこに、信念を感じてしまうのは凡人故だろうが、それほどに勢いのある声だった。でも記憶のいやな部分しか刺激されない。

「貴様、何の用だ！」

「それはこっちのセリフだっつーの、天王寺美緒お！」

「木安春うう！」

何故フルネーム。そしてどこから出てきたボールと金属バット！

「せえええ」

「待つです！」

ぼわーんとした声なのに、思わず耳を傾けてしまう不思議な声。それはどうやら俺の感想だけではなく、その場にいた全員がそうだったらしい。既に攻撃モーションに入っていた金属バットもボールもぴたりと動きを止めて、声の出所に注目している。

警戒や緊張というよりも、なんとなく見ちゃったという風に視線が吸い寄せられている感じだ。で、見たのが、

「人形だ」

なんだっけ、ラブドール、って言うんだっけか？

「ビスクドール、でございますよ。このど変態どスケベぺどふいりあ畜生虫」

おい、また何か増えたぞ。っていつか、心読むなよな。

「きしょっ、でございます」

心が痛いです。

「しかし、あのような改造制服が美緒様以外にもいらっしやるとは、この学校はどうかしておりますね」

「僕も、あこがれたんだ、けど、裁縫とか、駄目で……」

「今度君のも作ってあげよう。とびつきり魔王っばいやつをね」

おいおい、クラス委員に校則違反させるとか、マジで部の存続が危ぶまれるぞ。そして喜ぶな、吹水。

「ちよっと、話聞けよな天王寺」

「やかましいな。君は小姑かね。もしくは金にうるさいから副会長

君の腰ぎんちゃくか」

副会長……あれがそうなのか。あんなのが副会長って、いいのか？生徒会が校則破りまくってそうなんだが。いや、言つまい。美緒の関係者がまともなわけがない。

「てめえ、ぶつ殺す」

バットを握る春の手に青筋が浮かぶ。枯れ木と勝負できそうな細腕に、驚くほどくつきりと浮かぶ筋は健康そうとは言い難い。それでも、恨み節たっぷりの視線を向け、

「まあ待つです。暴力はダメです」

またしても、おっとりした声音にいさめられて、急速に勢いがしぼむ。

とことこと危なげな足取りでこちらに歩み寄って来たビスクドールは、球体関節だと言われても信じられる動作で首をかしげながら、美緒に向き直った。

「そちらの幽霊さん、引き渡してもらえますか？」

語尾が上がったのでどうやら疑問文だということが判別できたが、日本語の文法は崩壊しているらしい。が、問題はそこではない。

「見えてんのか？」

「はいです。はつきりくつきりと、ですね」

どっかで聞いた言い回しだなと思いつつ、無意識のうちに俺は魔女を背中にまわしてかくまっていた。一応俺の本能は、こいつらも美緒と同類とみなしているらしい。いや、特に美緒からかくまう理由がないのはわかってはいるんだけどな。

そう思いながら、美緒の妄言に近い当て推量が脳裏をよぎる。

『やはり、やつらが勇者ということ間違いはないようだね』

「まさか」と思うのと「もしかして」と思うのが同時だった場合、どうやら俺はもしかしての方に押し負けてしまっらしい。小心者の典型だが、それでいい気もした。周りが楽観主義だけでできてるよなやつらバツ力だからな。

「むしろ、あなたたちが見えることに驚きです。幽霊が見えるって、

「霊能力です？」

「はっ、あ、あの、それは」

切羽詰まった様子で何かを言いかける吹水をさえぎって、美緒がにやりとほくそ笑む。

「我々をなめてもらっては困る。科学の到達する高みのさらに向こう側、魔法の頂を目指す我々にとっては、幽霊なんぞを見る程度造作もないことだよ、副会長君」

え？ という目で俺と美緒を交互に見つめる吹水だが、とりあえず俺は視線の動きだけで『まあ見てろ』と促した。

「あらら、そうなんです？ それはまたすごい部活ですね。しかし私たちも生徒会として幽霊騒動の調査を任されているですよ」

「なら解決だよ。この幽霊君は我が超科学部あずかりとなった。今後もう問題は起きない、これだけは断言しておこう」

「お前が問題起きないつつても信用できねーっつーの」

賛成に一票を投じたいところだが、ここはぐっと我慢の子だ。耐え忍んでこそ浮かぶ瀬もあるわけだ。あれ？ 違ったか？

「身を捨ててこそ、でございます」

「ではこうしようではないか。問題が起きればその時は生徒会あずかりにでも何でもすればいい。現実問題、生徒会としては幽霊の出没が問題なのだろう？」

「そうですね、確かに言うとおりです」

「あーちゃん！」

あーちゃん？ なんかこいつがそういうかわいい呼び方すんのって、似合わないわけじゃないんだが、いつものイメージがな……バツトだもんな。

「んー、っと、き、きゃ……会計さんもそう躍起にならず、です」

そして逆向きのベクトルは名前さえ覚えられていない、と。変だろ、凸凹生徒会。

「というわけで、て……み……」

しばらく何かを考えるように、指先をあごに当てて空を眺めてい

だが、やがて意を決したように頷き、言葉をつづけた。

「部長さん、今日はあなたの言う通りにするです。でも、今日だけです」

何だ、名前思い出せなかっただけか。しかし長い指に……でかいな。

「また胸ばっか見てるう」

「ち、ちが！ これはだな」

「血が見とうございますか。さようでございますか」

「だから違つと」

「てんめえ、あーちゃんの乳ばっか見てやがったな！ あれは俺んだ、やらん！」

「シューウ」

いでつ、いでええええええ！

左手には噛みつかれた八重歯の感触。右腕にはフルスイングされた金属バットの感触。すごいよな人間って、同時にくらった大小様々な痛みをきちんと区別して整理できるんだもんな。人体の神秘万歳。俺、もう、人体じゃないけど。

「そしてなぜ、俺は今顔面にアイアンクローの感触を味わっている？ 脳が軋む音は非常に不快なんだがあだだだだだだ」

「いえ、これは害虫駆除の絶好のチャンスかと、ナイアガラは着想致したしだいでございまして。他意はございません」

そりやねえだろうな。あるのは純粹まっ黒。ピュアブラックな殺意のみだ。くそ、一番いてえぞ、あの女のアイアンクローが。

「まあせいぜい君達は踊り場の鏡に映る首なし日本兵でも追いかけていたまえ」

「え？ そんなのいるの？ 僕知らなかった」

吹水、お前は真に受けるなよ。

「そんなのいるですか？ これは会長に調査を依頼しないとです」

「あーちゃんも真に受けんなっつーの！ いいか、天王寺美緒！

そうそうてめえの思い通りに行くなんて思うなよ、首洗って待って

やがれ！」

「行くんだな、これが」

眉根一つ動かさずに中指を立てるって、なんか美緒らしくない気もするが、そこにあるのが底知れぬ私怨という奴なのだろうか。

いちいち挑発すんな。ほら見る、木安のやつ顔面真っ赤にしてとび跳ねて怒ってんぞ。まあちつこいからとび跳ねても、ぴよこぴよこ跳ねる様がコミカルなだけなんだが。

とまあ、こんなやり取りもあつたわけだが、

「おおむね良好に解決しただろ？」

「う、うん」

「こういうときのあいつの交渉力は異常だからな。ま、我が強すぎるだけなんだけどな」

とことごと危なっかしく歩くビスクドールと、真っ赤になつてとび跳ねるぶかぶか制服を見送ること数分。ようやく訪れた静けさの中、いまだ中指をぶっ立てていた美緒がようやく俺達の方に向き直る。

「いいから中指直せ。俺に向けるな」

「ふん、また連勝記録を伸ばしたわけだが」

全く、何と戦ってるんだか。答えなくていいけどな。

「次の手を打たねばいかな、これは」

「なんのだ？ お前はまた何かるくでもないことをたくらんでののか？」

もう召喚やらなんやらはごめんだぞ。神が来て魔王が来て、次は何だ？ 怪獣か？

そんな想像に半ばうんざりと肩を落とした俺の背筋が、強制的に伸ばされる。見ると力いっぱいこぶしを握ったかなめが希望のまなざしで美緒の次の言動を待っている。そう言えば俺の体、あいつの気持ち一つでリモートコントロールだったな。切ない。

「で、なにすんだよ」

体はしゃっきり顔はぐったりというちぐはぐな俺の声にも、美緒

は元気いっぱい答えてくれた。一瞬だけその元気が教育テレビの歌のお姉さんのように見えたが、一瞬だけだ。歌のお姉さんの微笑みが邪悪であっていい道理はない。

邪悪な歌のお姉さんは、たっぷりためを作ってもったいぶって発表する。

「秘密だ」

お願いします、永遠に秘密にしてください。と願ったのは言うまでもない。

あ、右腕もう治ってる。嬉しいんだかなんなんだか。

急転？ 直下

グラウンドを後にし、校舎へと向かう階段をのぼりながら、ちらりと視線だけで振り返る。グラウンドが校舎のある土地よりも低く設定されているので、明日菜のいる位置からはグラウンド全体を見下ろす格好になる。目の前の藤棚は一年で最も色鮮やかなシーズンを迎え、文字通り藤色の天蓋が視界の下半分に広がっている。

律儀なことに、まだずっと美緒の中指は神様に挑戦するように天を指している。隣に神がいることなど知る由もない二人にとっては、それが実に美緒らしく映る。

たぶん本当に神様相手にも喧嘩するんだろうな、とちよつとだけ尊敬しそうになったのを、明日菜は呑みこむ。ばれたら隣で真っ赤になっている春に、それこそ何を言われるかわからないからだ。

二人の、全く歩調の違う足がそろって校舎の角を曲がり、非常扉を押しあけて校舎に入って歩くこと数歩。無表情に廊下を照らす消火栓の赤い光の前で、フツリと明日菜の足だけが止まる。

それが意味するところを知る程度には、春は明日菜が大好きだ。それが、実はちよつと危ない方向の「好き」であることには自覚がないが、気づくのも時間の問題だろう。

だから振り返って、一言だけ告げる。

「やつぱ悔しいんじゃないか」

「ふん、です」

ぶつくりと頬を膨らませ、唇を尖らせる姿に先ほどの名残はない。ビスクドールだった外見は、今ではただの駄々っ子でしかない。ゴシッククロリータ特有の静謐さが、何ともアンバランスだ。

「絶対、幽霊は生徒会が退治するですよ。勇者ですから」

加えてどこまでも頑固者。

こんな、一昔前のお姫様を絵にかいたような裏表が、どうにも春の琴線に触れて仕方がない、というわけだ。直情一本で口も出る手

も出る足も出る、なんならバットも出る自分にはない起伏が面白いのだが、それだけでもどうやらないらしい。が、そこからは考えないことにしている。めんどくさいことは苦手な質らしい。

「わーってる。じゃなきゃあーちゃんが、「今日だけ」なんて捨て台詞使うわけねえもん」

「うん、です。でも、ぶう……です」

ますますぶぐのようにほっぺたを膨らませると、血色とつやのよい肌はきれいな桃色に染まる。消火栓の赤にも負けないほんのり桃色が、なんとも微笑ましい。

「わーってるわーってる。ちゃんとして正義の味方やつから、安心して」

「ゆーしゃですー」

「そうだった、ゆーしゃゆーしゃせーぎのゆーしゃ。行くぞ、勇者様！」

「ぶう……です」

ピンク色の光の粒子の中を、ピンク色のほっぺたが歩く。ガラガラと、金属バットを引きずる音をひきつれて。

「なあ、あーちゃん？」

「なんですか？」

「あのピンクの幽霊とこのピンクの光と、関係あんのかな？」

「あるですよ、きつと。ピンクつながりです」

「そっか、あるかー。んじゃ、あの幽霊やつつけたら魔王の話もわかるかもな」

「きつとそうです」

「勇者の勘だな」

「そうです、勘です。だから頑張るですよ、きは……き、会計さん。幽霊も、魔王も、私たちがちゃんとやつつけて、世界の平和を守るですよ」

廊下の端っこで金属バットの音が止まり、そんな会話が交わされたのは偶然以外の何でもない。

「いつの間にか世界の平和にまで俺達の責任拡大してやがんのな」
放課後の廊下は、意外とよく声が響く。

「あーちゃん、魔力って感じるの？」

「勘で、です」

「そっか、かんかー」

「うん、勘です」

齒車というのはどこで噛みあうかわからないもののようにだ。

不幸中の幸いは、何をおいても生徒会が魔女のことを噂通り幽霊だと信じて疑わなかったことだろう。まあ、この姿を見て日曜朝の魔女っ子以外の何かを想像するのも難しいんだけどな。よくバレなかったもんだ。

「やつらにはこのまま幽霊だと思っておいてもらおう。彼女が魔女であることがばれると、そのままここに魔王がいることまで嗅ぎつけられかねないからね」

どうやら美緒の中では、生徒会が勇者であるというのはゆるぎない事実らしい。ま、経験知稼ぎって意味では、だれが勇者でもいいんだろうけどな。

「あ、あらためまして、魔王様。えと、魔女です」

「ぼ、僕は、魔王……です。だ。く、くるしゅうない、よ」

仮初めにも程がある威厳だな、おい。とってつけてももうちょっと板につくだろう。

「うむ、これで現状我が部に必要な要素は一通りそろっているようだね」

「この部がどこを目指してるのか知らんがな」

最近やつと自覚してきた。俺はこの部のブレーキなんだ。この部の良心なんだ、と。え？ 逃げ出すだの辞めるだのと言ってただろって？ できないことは夢見ない、これが賢い生き方だ。人間どこでも生きていける。人間じゃないけどね、もう。

「とかなんとか言いながら、楽しくなってきたていらっしやるくせに

でございます」

「だからなんでお前はおれの心の声と会話すんだよ」

「ふ〜ん、でございます」

「うわっ、かわいくねえ。いや、かわいくはないんだが、でかい米粒にそっぽ向かれてもこっち向いてるのが前か後ろかわからんし。」

「一つ聞きたいのだが魔女君。君は魔法は使えるのかね？」

「おいおい、何を期待してたのか知らんが、そもそも俺達の目的はこいつの保護だろう？ 魔法はその後でもいいだろ」

「どうにも美緒は、自分の目的意識が勝ちすぎて物事が本末転倒になりがちでいかん。今に始まった話じゃないが、修正のタイミングを逸してしまうとんでもないとこまで行くからな。今回のこの辺で舵を切っておくことにしよう。」

「流石は超科学部の良心……いかん、言つて悲しくなった。」

「うむ、そうだったね、失敬失敬。その件に関しては一応の案はあるのだよ」

「一応聞こう」

「そして俺は、速攻で否定する準備を整えておく。」

「超科学部の十八番、召喚魔法で本物の幽霊を召喚しまくってそれを生徒会に」

「却下だ！」

「備えあれば憂いなし。俺はこの言葉を会話する前から準備していた。」

「何故だね？」

「何故だね？」

「敢えてのオウム返しだ。前にもあったな、このやり取り。」

「お前は何も聞いとらんかったのか？ 問題起こせば、即こいつは生徒会あずかりだぞ」

「だから、それがどうしたというのだね？」

「こいつを預かってる俺達が、自発的に問題起こしたら一緒だろ」

「おお」

何リングが落つちちたのを見たニュートンのものまねみたいな顔してんだよ。そんなに新事実か？ お前の中の常識の地平がひっくり返るほどに。

「それよか、あいつらの場合何かしかけてくるぐらいの勢いだろ、とくにあの会計とか」

「あり得るね、あの人間凶器」

「一応突っ込んでおくけど、お前が言うな。お前だけは言うな。んでな、どっちっつーとそれを防ぐ方法を考える方がいいんじゃないのか？ 守るっつーか逃げるっつーか」

見まわさなくても、こいつらには似合わない手なのはわかり切っている。後手や後衛といった思考そのものがなさそうだ。専守防衛の国の人なのにな。

「ふむ……やむを、えんか」

ううわ、不本意そうだな、おい。

「とりあえず、魔女君はこの部室に居候したまえ。我々も放課後は基本的にいるし、場合によっては私は終日在席する」

「終日在席すんじゃないよ」

「まあ、私どももおりますので大丈夫でございましょう。モモ様も、こちらにおられてはどうでございます？」

相変わらず米粒のコスプレをしたナイアガラだが、普通の会話をするときの物腰は恐ろしく楚々としていて、米粒のくせに様になるのが腹立たしい。

「うえ、うち？ うちーはー、えーっと」

救いをもとめるようにちらちらと吹水にアイコンタクトを送っている。それを受けた吹水も要領を得たもので、軽くうなずいて救いの手を差し伸べる。

「大丈夫。僕は、さびしくないから。一緒に、いてあげて」

あ、とどめだったな。

救われたと思いついで目をキラキラと輝かせたモモの体が、ぼっ

てりと転がっている。ほんと、床に落ちてると毛玉だな。

「ご愁傷様だな、モモ」

「うう……なんてこった」

「心強いね。それでは我々は通常授業をこなしながら生徒会の強襲に備えるでしょう」

ますます勇者の襲来に備えるラストダンジョンじみてきたな、俺達。

そんな俺達の、努力ともいえない努力を嘲笑うように、現実の歯車は回り続ける。

『幽霊』による『被害者』が出たのは、ほんの数日後のことだった。マジで？

強襲？ 生徒会

「って話さ」

「ピンク？」

「いや、色は知らないさ。ただ幽霊が出て、襲われたって聞いたさ。って何でピンクさ？」

その話を聞いた俺はとつさに美緒の姿を探したが、珍しく昼休みの教室にその姿はなかった。やけに静かなわけだ。

「じゃなくて、あいつ何やつとるんだ？ 委員長、何か知ってるか？」

いつも通り俺の席にやってきてランチパックをもそもそと食している吹水が、驚いて目をぱちくりさせている。相変わらず、いつものタイミングで声をかけてもキョドるな。

「んと、んと、美緒は、出て行ったけど、特には何も」

ここ数日の間に吹水の魔力の制御技術が上達したのか、むやみやたらとピンクの粒子をばらまかなくなっている。うさはなんだか不服そうだったが、そうそう魔力生物なんぞを生み出されてたまるか。

「あたしも知らないよう」

俺と同じ弁当のSサイズを箸で突つつくかなめも、聞いてもいないのに教えてくれる、ありがとよ。

「まあいいや。んで、襲われたって、具体的に何されたんだよ。まさかお化け屋敷見たいに出てきて脅かして終わり、とかじゃないよな？」

それだったら襲われた、とは言わないか。せいぜいが『出た』とか『見た』になるだろう。かといって、俺の知る「あれ」に襲われた場合、間違いなく日曜朝八時が現れた、とかなんとか噂されるはずだ。

「それが、何か要領を得ないんさ」

「なんだふおれ」

海老フライが口から生えてるのに喋っちまった。おかんに見られ
たら鉄拳制裁間違いなした。が、根隅は幸いにそういうのは気にし
ない質らしく、普通に会話が続いた。

「最初は胸を揉まれたって聞いたさ」

「女か！」

「女さ」

「シュウウ、えろいよう」

ぐはっ、何だこの脱力感は。くそ、こんなところで神気を絶つな。
意識が、意識……

「おい、いきなりどうしたさ弁当箱に顔面突っ込んで。そんなに全
力で想像したさ？　いくらなんでも想像力豊かすぎさ」

「ぶあっ、死ぬかと思った」

ギリギリで復活。二の腕に感じる八重歯の痛みはほのかに熱を帯
びている。早く人間になりたいーい、って気分だ。

「もう、エロもほどほどにしないと、こじらせると死んじゃうさ」

それ、俺は笑えないんだけどな。

「んでまあ、なんともエロい幽霊もいるもんだと思ってたら、それ
が別のところからはパンツを脱がされたって話も来たさ」

「女か！」

「女さ」

「しゅ」

「続けてくれ！」

危険回避。クソ、つい本能的に聞いてしまった。思春期のリビド
ー恐るべし。

「で、よくよく聞いてみると人によって全然言ってることが違うわ
けさ。中には階段で背中を押された、なんていう本当に襲われた系
のものもあるぐらいさ」

「要するに、襲われたっていう表現が独り歩きしてる状態か。納得」
となると、部室に仮住まいしている魔女の線は薄い考えてもよさ

そうだな。どうもそういうことをするタイプじゃなさそうだし。

「ん？」

「どうしたさ？ まだ女の話でも聞きたいさ？ エロい噂もまだいくつがあるさ」

ふと何かが引つ掛かる。今の自分の思考をもう一度反芻してみる。魔女、幽霊、噂、女、エロ、襲われた、エロ、えろ、えろ、ちがう！ えーっとなんだ、余計なこと挟んだせいでわかんなくなっただけやねえか、バカ根隅。

「つーかお前ら部屋行かなくてもいいさ？」

「でかした根隅、それだ！ くそっ、何で気がつかなかったんだ！ 行くぞ、カナメ」

「まだご飯」

「んなもん五時間目に食べばいい！ あと念のため委員長は教室にいてくれるか？」

「よ、よきにはからえ！」

何だよ、変なブームきてんのか？ ともあれ、弁当箱に未練たっぷりのカナメをなんとかだめて賺して、俺は廊下に飛び出した。海老沢あたりに見つかればねちっこい説教を食らうのを覚悟して廊下を走りぬけたが、幸いなことに誰に邪魔されることなく本館を駆け抜け、特殊教室棟に飛び込むことができた。

「は、はいよう。待ってえ」

無論、待つ。もしカナメをおいて突っ走ろうものなら、リードした分ワープで引き戻されるというバカを見ることぐらい俺にも計算ができている、成長するのだ、もう人間じゃないけど。

「なんて自嘲ネタやつてる場合じゃねえな」

正面に生物実験室が見えたところで減速。セロテープが粘着力を失っているのか、『廊下を走るな』の張り紙がひらひらと手招きするように揺れる。むろん、お前の言うことを聞いて減速したわけじゃない。

「おら！ 開けろよ天王寺美緒！」

大当たりだ。声だけじゃなくて金属バットのスイング音まで聞こえてきそうな気がしたが、さすがにそれは先入観による錯覚だ。ちよつとだけ謝罪。

「せーとかいい？」

「おお、噂聞いてさっそく部室に詰め寄ってるみたいだけど、美緒の方が先手を打ったらしい。ほんと、あいつのこういうところには脱帽だわ」

噂が立ったことを聞きつけた美緒は、もしかしたら昼休前から部室防衛に入っていたのかもしれない。そういわれれば四時間目にあいつがいた記憶がない。

「寝てたから四時間目の記憶そのものがねえんだけどな」

「シユウウ、よだれ垂らしてたよう」

泥棒コントの泥棒のように壁にべったりと貼りつき、鼻から上だけを覗かせると案の定、部室の前に数人の男女が詰め寄っていた。うち二人はこの間の会計と副会長だ。もう一人も直接面識はないが、知ってはいる男だ。

「生徒会総出だな」

本当ならここで「とうとう会長が」とか「ついにやつまでもが」となるのが物語などでは定番なんだろうが、ここ満貫寺ではそうはならない。生徒会長が副会長の犬であることは誰しもの知るところであり、むしろ何で今さらという感の方が強い。だから、

「何たくらんだ？」

見えない糸が張り巡らされている気がして気味が悪い。そんなことを思っていると、まるでここに俺が来るタイミングを分かっていたかのようにポケットの中で携帯が振動して着信を伝える。授業対策でマナーモードにしたままだったのが幸いした。

渡り廊下に飛び出し、液晶で確認することもなく通話ボタンを押して口を開く。

「何やってんだ一人で」

『やられたよ、まさかこのタイミングで他の幽霊が出るとはね』

「他の幽霊？」

『まあ詳細はメールでも送ろう。とにかく今我々は濡れ衣でピンチというわけだ』

「んー、まあ何だかよくわからんが、魔女は無実なんだな」

『無論だ、あ！』

「どうした！」

しばらくの沈黙。背後で何やら騒がしいのはおそらく会計あたりが扉越しで呼びかけているからだろうが、あんなぼろい扉がいつまでバリケードとして仕事をしてくれるかなんて、考えたくもない。そろそろ本業だつて引退しそうなのに。

飛び出して行って何とかするべきかと、廊下の薄暗がり振り返ったところでやっと、

『ふう、あせつたよ』

いつも通りのトーンで聞こえた。

「だいじょうぶか！」

『大丈夫だよ。まさかここでドローフォーが切れるとは思ってもみなかったよ。せつかく上がりかけたというのに、八枚も引かされて「切るぞ」

『何を言っているんだね。私がここで結界を張って籠城している以上、頼れるのは外にいる君たちだけだ』

だからって中で楽しくウノやってんじゃねえよ。

「んで、具体的には」

『まかせる』

「は？」

『今回は君に一任しよう』

「まて、ば」

『神頼みだよ、シュータロー。頑張ってくれたまえ』

ふざけやがれ。俺ひとりであんな化け物集団（特に金属バット女）とやりあえてか？ 無理無理無理無理！ 何がなんでも、せめて美緒だけでも引きずり出してやる。

そう思ってたんな脅し文句を使ってやるかに思考を切り替えた瞬間、

『期待している。信じているよ、奇跡を』

そう言っただけ通話は切れた。

今、なんだった？

「シュウウ、どうするの？」

どうするのか。俺が聞きたいよ。とはいえこのまま飛び出して行っても何が出来るわけでもないし、へたすりゃ立場が悪くなる。美緒やナイアガラのような凶太さを持ち合わせていない俺は、どんなぼろを出すかもしれない。

「生徒会、やっつけるの？」

「いや、別に悪いことしたわけじゃないんだから、やっつけることねえよ。むしろ世間的には俺達の方が悪なぐらいだ」

「おお、悪う」

何でそこでちょっと嬉しそうになるんだか。お前、神様だろ。

と、そこで手の中の携帯が先ほどとは違うパターンで振動して着信を告げる。今度のパターンはメールだ。もちろん送信者は美緒。仕事の早いことだ。

「で、何だよこれ。詳細でも何でもねえじゃん」

開いた本文を見てうっかり自分の携帯を破壊してしまいそうになる。

何が『ヒントは魔王』だ。

「ヒントの前に問題よこせ問題！」

「クイズう？」

まあそうだな。ただし、恐ろしく難しくてもしかしたら答えが用意されていないかもしれない、クイズ地獄と呼んで差し支えないクイズだ。くそつ。

「とりあえず、ヒントのところに帰るぞ、くそつ」

「ヒントのどこお？」

神頼み、の前にちつとは自分で動いてみるか。こういう歪んだ努

力も、青春ってことになんねえかな……ならねえわな。

魔界？ 接近

五時間目も六時間目も授業なんて上の空だった。いや、いつも身が入っているかといわれるとそこは微妙なんだが、今日のは格別だ。いつスピーカーが『バツツ』という音とともに起動して、超科学部総呼び出しを食らうか、気が気じゃなかった。

そんな想像に反して授業は当然のように終了し、掃除も終わった教室にはカナメと吹水、そして俺だけが居残っている。幸い、根隅は今日発売のゲームがあるとかでだれよりも早く教室から消えていた。いたらうるさいから蹴り出さねばいかんところだった。

「それで、い、いちだいじ、って？」

昼休み終了直前、それだけを伝えたところで教師がフライング気味に表れたのは痛恨の極みだった。しかもあの野郎、手伝いのために次の休み時間は吹水を呼び出しやがって。うちの魔王に何やらせんだっつーの。

中途半端に伝わったせいで、六時間目の吹水はそわそわと落ち着きがなく、時折こちらを見ては半泣きになっていた。悪いことしたな。

「ああ。ざっくり言うと、美緒のやつが部室に籠城してる」

「ええ！」

「えええ」

「カナメ、お前は知つとるだろ」

「ここは空気を読むべきかなあ、と」

だから、何でそんな余計なことばっか覚えんだよ、この神様は。大丈夫か、この世界？

「ろ、籠城って、閉じこもってるの？ どうして？」

と、カナメのボケにつきあっている場合じゃない。俺は昼休みの話題から自分なりに推理した内容と、それがあながち間違っていないかっただけを伝えた。

別の幽霊。生徒会による魔女の接收。それを防ぐために部室に結界を張った美緒。

「他の幽霊が出てくるなんて、タイミング悪いにもほどがあるけどな」

日頃の行い、っていうなら俺や吹水に罪はないはずだ。カナメも、たぶん神様だし除外だろう。となると間違いなく美緒だ。というか、美緒以外あり得ない。

「無茶苦茶に見えるけど、たぶんこれが最善策だったんだろうな。でなきゃ今頃、魔女が生徒会に連れていかれてて、美緒あたりが殴りこみかけてただろうし」

そうなれば、きつと俺達の部はその時点で活動停止処分なりを食らっていたんだろうな。流石に、公に生徒会に殴り込みをかけて処分なし、というのは無理だろう。

「でも、それじゃ、誤解なんだから」

「誤解を解くすがねえんだ。そもそも一般の生徒にとつちや、幽霊騒動そのものが眉唾もんなのに、そこにさらに「今回の騒動はうちの幽霊じゃありません」なんて説得力もへったくれもねえしな」

「そんなあ……」

うなだれる顔には、責任を感じているのが見て取れた。そりやそうだよな、突き詰めて幽霊＝魔女の存在が発端であり中心なんだと言われれば、反論もできないだろうし。泣きそうな顔になってるのなんて、目も当てられない。

でも、だからって目を当てないってのも性に合わない。そういうのは、俺の青春じゃない。すでに魔道に堕ちてるのにまだ青春できると思ってるあたり、樂觀的だけだな。

確かに美緒のいない今、超科学部は決定的に戦力不足の感はない。いや、魔王も神様もいるからほんとには戦力はぶつちぎりのはずなんだが、いかんせん、この二人だし。というわけで、

「俺だつてたまにやがんだよ。実力で青春しねえと、青春になんねえし」

決まらねえなあ。わかってるよ、決まってないのは、だからそんな気の毒な目で俺を見るな、二人とも。

「でだ、さっきの話だけど、幽霊ってのが生徒会にとっちゃネックになってるはずだ」

だてに午後の授業を上空で過ごしたわけではない。その研究成果を発表する。

「どうしてえ」

ちよつとは自分で考えろ、とは言わない。このあたりはカナメにはなかなか想像が付きにくい概念だろうからな。それに、俺も別に事情通を気取りたいわけではないので、さつさと解答編に移行する。「幽霊の存在なんて言ってしまうえば不確かなもんだ。いるかないかの証明でさえ曖昧だしな。だから、生徒会は具体的手に出られない」

「ああ」

察したらしい吹水が、ポンと柏手を打っている。でもとりあえず続ける。ちよつとぐらい名探偵気取りもいいだろ。意外とこういうのも悪くない。美緒の気持ちがちよつとだけわかった気分だ。

「あの魔女さえ渡さなければ生徒会といえど決定打は打てないわけだ。あくまでもこないだの話はうちと生徒会の、暗黙の約束だからな。さすがに、幽霊騒動を理由に生徒会が一部活動を叩くとなれば、バッシングは避けられない。あとは生徒会がどの程度常識的かなんだが、こればっかは神のみぞ知る、だな」

「あたし、そんなこと知らないよう」

「ものの例えだ」

「それで、美緒は部室の守りを、固めたんだ。すごいね」

ほんとにすげえよ。頭の回転と発想力は、同世代の中じゃずば抜けてるだろう。もしかしたら人類の中でも上位かもしれん。少なくとも俺なんかじゃ相手にならないのは間違いない。でも、隣りで見えていたおかげで、今自分が何をすべきかの参考にできる程度には、俺だって阿呆じゃないつもりだ。

悔しいけど、行き詰ったら考える。美緒ならどうする、って。そこから非常識とやりすぎと理不尽を削り落すと、答えは見えてくるはずだ……たぶん。

「だから俺達は、その間に今回の事件の謎を解くわけだ」

「おおっ」

感心したカナメの目がきらきらと輝いている。ふふん、もっと称えていいんだぞ。

「んだが……何か、もう、解決した気がするんだ、俺」

得意げに腕を組んでいられたのは、ほんの数秒だった。

あれ？ 疲れてんのかな？ あれ？

瞬きする。眉間を指でつまんでみる。うゝん、肩こりか。バキバキ。うわっ、すっげえ関節が鳴ったけどおっかしいな、まだ疲れている。やっぱり慣れないことなんかするもんじゃねえか。知恵熱出たか？ とどうとう幻覚が

「ねえ杏子う、これ、だれえ？」

「え？ ぼ、僕の知り合いにはいないけど……、誰だろうね？ 誰かの保護者、とか」

「やっぱこれ俺だけに見えてる幻覚とかじゃないのか。ってか、こんな保護者、見たことないだろ」

いきなり何の前兆もなく現れて教室の中をうろつろつしているのは、背丈以外は全く保護者の要素を持たない、いや、それどころか人間要素すら希薄な方々だ。

「どー見ても、魔界的悪魔的なたかに見えるんだが」

二足歩行で尻尾を揺らして教室を横切る実にかくましい殿方は、背中に翼的な何かを背負っていらっしやる。かと思えばその隣、歩行してすらいらない空飛ぶご婦人の腰から下は、毒々しいまでに色鮮やかなバラの花だ。花がくっついてるんじゃない、バラから上半身が生えている。その向こう側なんかでん虫だろ、完璧に。

「透けて、るね」

あんまし問題じゃなさそうだけど、確かに向こう側が透けて見え

ている。かと思っていると、ある程度離れたところで、そいつらの姿はすっと消えて見えなくなってしまう。

「何だ、今の？」

今日の前にあるのは、ちょっと夕方の橙色を帯び始めた西日に照らされる、何の変哲もない放課後の教室だ。わずかばかりの寂寥感
は、放課後独特のカタルシスだ。

しばらくぼんやりと眺めているが、再びあの謎の存在が現れることはなかった。いや、出てこられても困るんだけど、出ないのは出ないで気持ち悪い。

グラウンドで運動部の活動する喧騒が届いて、ようやくそこが日常の延長線なんだと実感できたのは、さらに少したった後の話だ。四時半を告げるチャイムの音を、どうしても現実のものだと認識できなかったのは、どうやら吹水も同じだったようだ。

と、またも図ったようなタイミングで俺の携帯がブルブルと震えている。

「どした？ 攻め込まれたのか？」

『笑えない冗談だが笑ってやろう。あっはっはっは。で、要件だが』
笑い声がバカにしきってやがる。畜生、バカにしゃがって。

「なんだ？ 魔界の住人でも見えたのか？」

『なんだね、知っていたのか』

やっぱりな。こんだけ絶妙のタイミングってことはそれぐらいしかないと思っただが、それにしても向こうでも見えたか。

「こっちでも出たんだよ。デビルマンみたいなのと、空飛ぶお花とその他もろもろが」

『こちらのは実に妖艶な美女であつたよ』

「すぐに行く、待ってる！」

『来なくてもいいよ。というか、むしろ来られると計画が破たんするではないか』

しょんぼりだ。くそっ、何でこっちにはそんなサービスカットがなかったんだ

「シュウウ？」

「まずい、意識が朦朧とする。」

「あ、いや、すまん。少々混乱していたようだ。それで何だ？」

『うむ、うさぎ君が言うにはだね、彼らは魔界の住人だそうだよ』

「なん…だと？ にしても、何でいきなりそんなもんが出てくるようになったんだ？ お前、また何かしたんじゃないやねえだろうな」

『失敬な。この件に関しては完全にノータッチだよ』

その言い方だと、もっと他にもっとでかい問題がありそうではないやんなんだが。

『その辺はうちが説明するよ。ん、ここに向かって喋ればいいのか（ごごご）よく聞けよ、あのな、ありや魔界の住人だ』

「そりやさつき聞いた」

『あ、そうか。んでな、あれはまだこっち側に現れてるわけじゃないやなくて、でも見えてるだけなんだ』

うん。全っ然わからん。

『なんでだよ！ わかれよな。つまり、二つの世界がシンクロし始めて、波長が合い始めてんだよ。このままいくと、混ざって一つの世界になっちまうんだよ。どうやら杏子の魔王の素養は思ってたよりもでかかったみたいだ。すげえな』

なっちまうんだよ、って言われてもな。しかも「すげえな」で片づけんな。

「わかるか？」

「ん、ごめん。ちょっと、いまいち。僕には、難しい」

無言で首を振る力ナメ。つまり、前途多難ってわけだな。

「ってわけで、もうちょっとわかりやすい説明を求めろ」

『では私をご説明いたしましょう。困った時のナイアガラ、でございます』

困ったことになるナイアガラじゃないのか？ でもなんか無駄に説得力があるな。まあいい、聞こう。

『つまり、魔界と人界というのは平行して存在する別の世界。まあ、

あなた様のような中二秒の脳みそにはパラレルな世界軸、平衡世界と申せば想像しやすいでしょうか？」

電話の向こうでは「おお、なんと想像しやすい」と美緒が感嘆の声をあげている。まあ、あいつが一番の中二病患者だから、いいんだけだな。

『その二つの世界の境界線が今、曖昧になり始めているのでございます』

なんとなく、想像できなくもない。二本の平行線が溶け合っていくようなイメージが、頭の中に形成される。

『もともと相関性の強い世界同士でございます。境界の溶融はさほど想像に難いことではございませんが、いざ現実味を帯びるとやはり問題は発生するわけでございます』

「というところ？」

『簡単に申しますと、キャパシティの問題でございます』

ほうほう。そろそろ脳が軋み始めるが、がんばるぞ。熱心に聞いてはいるもののちょっと頼りない吹水と、聞く努力すら放棄した力ナメを見ていると、俺でさえやる気を出さざるを得ない。

『いまいちわかっていらつしやいませんね、愚鈍な修太郎様？』

「いや、だいじょうぶだ。たぶん」

『わかりやすく申しますと、キャパシティとは風船でございます。それぞれの世界を、水か空気とでも思ってくださいませ』

ほうほう。思った。続けてくれたまえ。

『空間的、エネルギー的に世界には許容量がございます。しかし今、二つの世界が一つに交わろうとしているということは、世界二つ分のエネルギーが一か所に集中する、ということと同義なのでございます』

えーっと、風船がキャパシティで世界が水で、一個の風船の中に二個分の、水？

「破裂するんじゃないの？」

『とうとうーん。正解でございます。まあ何も褒美はございま

せんが』

わーい正解だ。くそっ、どいつもこいつも馬鹿にしゃがって。

「じゃなくて、それってつまりやばいんじゃないのか？」

『おおやばでございます。最低でもどちらか一つの世界は完全消滅するでしょうし、場合によっては残った方にも致命的な影響が出るでしょう。最悪両方ともボツシュートでございますでれってれってーん』

そっという効果音は抑揚をつけて楽しそうにやってくれ。さもないと必要以上におどろおどろしい。

『というわけで頑張ってくださいまし』

『というわけらしいのだが、私の推測では先日現れた幽霊というのは、この魔界の住人のお歴々ではないかと思うのだよ。どうだね？ どうにかなりそうかね？』

「ああ、俺の頭がな。なに？ 何か知らないけど、この幽霊問題って実は魔界にお住まいのAさんのことで、世界の存亡の危機だったて、そういう落ちってことか？」

『とうっとうるーん』という相変わらず抑揚の全くない声が、美緒の背後で聞こえている。どうやら正解のようだ。っていうか、変なもん気にいるなよ、神界の人。

『まあ、どうやらこれも魔王誕生の影響のようだが、瑣末なことだよ。むしろ委員長君の魔王としての順調な仕上がり可喜すべきではないか』

「これも委員長の影響？」

『うむ。どうやら彼女の魔力が魔界そのものを呼び寄せていると推察されるようだ。まあさして驚くべきことではないだろうがね』

「一応言っておくが、俺は『魔界』なるものが存在することに、まず驚きを禁じ得ない」

いまさらなだけだね。いや、あるかないかって言われると、何かあるっぽいのかなー、程度には思ってたんだよ。うさぎとか出てきたし。でも今まではつきり「ある」って言われなかった気もする

し。ま、愚痴だ。

『愚痴も聞き終わったところで、やるべきことはわかってるね。では期待しているよ』

あ、ちょ……切れたし。

「なんか、過剰な期待されてないか？」

「それだけ、美緒は、せ、千古君のこと……信じて、るんだよ」

おい、そこで赤くなるな。聞いてる方が拷問だろ。

「でもお、どうするのよう？ 杏子やつつけるのぉ？」

「ひ、ひいつ。や、やつつけないでえ」

「こりゃ」「はうう」

ぺちつ、とカナメの広めのおでこにデコピンを入れておく。怖がらせてどうすんだ。

「確かに抜本的な解決策っちゃそうだが、それじゃダメだろ」

「んゝ、やっぱりそうかあ」

「そうだあ。んなことすつと、美緒にどやされて結界の中に封印されっちまうぞ」

適当なこと言ってるけど、あいつならこのぐらいさうとやってのけるだろうから、できる前提で喋っても大丈夫だろう。しかし、吹水は吹水で相変わらず魔王としての威厳はないな。ほんとにこいつが魔界呼び寄せてんのか？ 実は美緒じゃねえのか？

「んゝ、じゃあ、魔界やつつけちゃうう？」

それこそ神も悪魔も何もかもを巻き込んだアルマゲドンの勃発だろ。

「なあ、一回その『やつつける』の発想から離れないか？ まったく誰に似たんだよ」

心当たりがありすぎる。

「んむう……」

しかし、そうなると確かに手詰まりの勘はある。吹水が魔界を呼び寄せるなら、呼んでる方が呼ばれてる方のどっちかを消してしまっう、ってのが根本的な解決なのは間違いがないだろう。かといって

それは避けたい。

「や、やつつける、の？」

あゝあ、委縮しきつちゃってるじゃねえか。これじゃ、俺が勇者様でも退治するのめらうレベルだぞ。

「ごめんね、なんか、僕のせいで。僕、魔王に向いてないのかな？」

まあ、向いてるかどうかに關してはノーコメントだ。はつきりとは言わない優しさって、あるだろ？

「やつつけねえよ。俺達は魔王軍の配下なんだろ？ まあ、事実上のトップはあの魔法使い志望だけだな。それよか、なんかいい方法ないのかよ？ 委員長の祈りのパワーで魔界にお帰り願う、とか」
魔界の権力者なんだつたらそのぐらいできてもいい気がしなくもない。

そんな話をしている間にも、時折視界の隅っこを半透明の魔界的生物がふわふわと横切つてゆく。今度のはほぼ蝙蝠の形をした生物だが全体的なデザインが爬虫類っぽい。

こうして見てみると、やはり吹水の力で生み出された魔法生物が、いかにメルヘンチック要素を加味されているかというのがよくわかる。

「なんだか、昨日モモに聞いたんだけど、僕の力はまだまだ不安定なんだつて。だから、こんなことになったのかも、つて……ほんとごめんね」

謝られると、何だかこっちも申し訳なくなる。

「不安定、ね」

「うん。魔力が漏れるのは抑えられるようにはなっただけど、魔王としての安定期に入っていないとか、言われて」

安定期に入った魔王つてのがどんなもんなのか想像もつかないが、それならもしかしたらと、もう一度俺は携帯に手を伸ばす。あくまでもご都合主義な「もし」に賭けて。

通話ボタンを押す。と、コールゼロで通話がつながる。

『何だね、我々は今忙しい（ジャラジャラジャラジャラ）』

「おい、雀牌をかきまぜるような音が聞こえた気がしたが」

『当然だ。ウノをやりつくした我々には、もうドンジャラしか残されていない』

「あんまふざけてつと生徒会に売るぞ。うさぎに代われ」

『ガチャン、ガシヤガシヤ』と携帯を放り投げてジャン卓に転がしたとは思えない不愉快な音。しばらくしてようやく電話口にウサギが出る。

『なんだよー。この形だと電話持ちにくいんだぞ。あ、ありがとな。あんたいい奴だな』

誰のことだ？ あ的面子にいい奴なんかいるのか？

「魔女か？」

『そつだよ。んで、用って何だよ？ あ、こら！ 美緒積み込むのやめろよな！ 一列全部しずかちゃんだったぞ！ ツバメ返しやるつもりだろ』

『君は目ざといね。仕方がない、今回は見送ろう』

「何言ってるかわからんから端的に聞くぞ。委員長の力が不安定なのと、魔界が寄ってきてるのは関係があるのか？」

恐ろしいまでの当て推量。これで無関係だったら目も当てられないが、今は何でもかんでも関連付けて考えてみてもいい時だろう。どんな非常識が起こってもおかしくなんだからな。言ってみれば、非常事態ならぬ非常識事態だ。

『ん……』

しばし黙考するモモのかわいらしい唸り声と、牌を掻き混ぜるじやらじやらが耳の中を行ったり来たりする。何だこの光景。

じやらじやら

『たぶん、だけどな。杏子個人で賄いきれない部分を補うために、魔界そのものが召喚されてる可能性はある。やっぱ魔族や魔力つてのは魔界にあつてこそ安定するもんだしな。魚が水の中で生き生きするようなもんだ』

「珍しくわかりやすい説明をありがとう。じゃ、安定したらこの状

態は解決すんだな？」

『約束はできねえけど、たぶんな。あくまでもこんな不安定な状態になってんのは、色んなもののバランスが崩れてるからだから、それだけとは言えねえけどな。でも、どうか一か所がしっかり安定すれば、他も連鎖的にってのも』

「やってみる価値は」

『なきにしも非ず、って感じかな』

ホールドボタンを押し、通話を終了する。と、目の前、液晶のすぐ手前を横切るように見たこともない鮮やかな色の魚が泳いで横切る。絶対に見慣れないデザインだな。

ゆっくりと息を吸うと目の前の魚を吸い込んでしまいそうな気がしたが、勿論そんなことはない。見えてるだけでまだこっちの世界には出てきてない、ってこういうことか。

ゆっくり息を吐き出しながら、本来手に入れるべきだったバラ色の青春ライフの中では、決して口にしなかっただろう言葉を吐き出す。慎重に言葉を選んで。だって言い間違えたら黒歴史確定だ。いや、言い間違えなくても黒歴史か。

通話中からずっと俺に注がれていた二人分の視線の密度が増す中、ようやく決心のついた俺は、肺に残った空気を押し出すように発声する。

「委員長、魔王に、なっちまうか」

あゝあ、言っちゃったよ。そして、輝いちまったよ、二人の顔が通電した豆電球のように笑顔を浮かべるが、どこか照れくさそうに頬に朱が入った吹水。大して何かわかっていなさそうながら、隣が楽しそうだからとりあえず笑っておこうという感じのカナメは、頭の上のハテナマークが透けて見えている。と思ったら、そういう形をした、タツノオトシゴ的魔界生物だった。紛らわしいな。

まあとにかく、こうやって俺の青春は坂道を転がり落ち始めたわけだ。

もう十分落ちまくってたとかいう意見は却下だ。俺はまだ、自分

の青春が息を吹き返すと信じている。

悪事？ 計画

自転車置き場で、端から順にサドルをはめていく。高さ調整は本人に任せるとして、とりあえず今重要なのは一刻も早くサドルをはめることだ。

俺の傍らでは、自転車のサドルを専門に扱う業者かつて程の、山盛りのサドルが自転車置き場の片隅を埋め尽くしている。

「くそ、これなんて拷問だよ……」

「せ、千古くん。こっちの列は、終わったよ」

ギョツと力を込めて一台完成。さらにその隣でばかりと口を開けたフレームにサドルを突っ込んで、ぐりぐりと押しこむ。まだまだ先は長い。

「おお、こっちはまだただけど、とりあえず部活終わりまでには間に合うと思うぞ」

「う、うん。じゃ、じゃあ僕は、向こうの列、行くね」

言いながら吹水は、サドルの山からいくつかを抱えてたたたと別の自転車の列に駆け寄っていく。なんとも頼りないフォームだ。典型的な女の子走り、ってやつだな。

トタン屋根と錆びたフレームがあるだけのやつつけない駐輪場は、下校時刻も過ぎたおかげで幾分閑散としてはいるが、それでも部活をしている人数分は自転車が残っているわけだ。ざっと見ただけでも数十台。

そのことごとくがサドルのない間抜け面を、長閑な春の日に晒している。

で、俺はそこでそいつらにサドルをはめて回るといふ新手の嫌がらせを受けているわけだが、ではなぜこのくそ忙しくて切羽詰まった時にこんなことをしているのかというと、時計を三十分ほど巻き戻す必要がある。

場所は「委員長を魔王にする宣言」が行われた直後の、春つらら

な教室だ。

「というわけで」

なんだかこの常套句を乱用する知人がいたけど、今は記憶から抹消だ。

宣言した勢いをそのままに、俺は口を開いていた。あとから考えればこの『勢い任せ』ってのが敗因なのは明白なんだが、ノリって大事だろ？

「魔王たるもの悪事に手を染めてなんぼだ」

「「おおー」」

放課後の教室に、イマイチ勢いに欠ける二つの拳が突き上げられる。言わずもがな、カナメと吹水だ。やる気だけは満々らしく、二人ともなぜかジャージに着替えている。かく言う俺も学校指定の臙脂色のジャージ。だっせー。

「まずは何をする？」

「あたしの神気の手でえ、人類滅ぼしちや」

「却下だ！ やりすぎだろ。ってか、そんなことできちゃうのかよ。やるなよ」

「はあーい」

うん。人類滅亡はやりすぎだよな。いくら魔王になるためとはいえ。さらに世界の危機まで救っておいた。危ういところだ。

「タバコ、吸う、とか？」

「んー、何か地味だな。それに俺、タスポ持ってねえから買えないし」

それに、たばこの臭いなんかさせて帰るとおかんにブツ殺される。調理場入るのに味がわかんなくなるとかなんとかで、その辺はうるさいんだよな。

「そつかあ……僕も持ってないや」

というわけで、これも却下。

「じゃあ、こ、これえ！」

そう言っただけと目を閉じたかと思うと、カナメが薄ぼんやり

とした光に包まれる。ほどなくして、俺たち三人で形作る三角形の中心の空間が薄らと輝き始め、その光が徐々に輪郭を持ち始める。何度か見ているが、神の力を行使して奇跡を起こす時の光というのは、何とも神秘的だ。

「おお……」「ふわぁ」

感心しきりの俺と吹水の目の前で、なおも力を行使し続けるカナメ。

何かがその場に現れ始め、光に包まれたものがはっきりと見えるようになる。

が、見えるにつれて、がっかりの色が濃厚になってゆく。
どさどさどさどさ

現れた無数の『それ』の中から一つを拾い上げる。実に見慣れた形の、しかしそれ単品で見ることにより慣れていない物体。

「なんで、サドル？」

「これないとお、みんな困るんじゃないの？ この間、テレビで見たよう」

いや、困るよ。困るけどさ。自分のチャリんとこに戻ってこれなかったら殺意すら覚えるよ。でも、

「なんか違う気がするんだよな。魔王とサドルって」

「ううー、シュウー、我がままぁ」

我がままでもいいよ。世界中のサドルを集めて魔王になるって、そんな魔王いやだろ。

「とりあえず、返すか」

「ねみゆいい……」

「おい！ カナメ、おい！」

で、回想終了。ただいま現実。

「ま、そもそも悪事に向かない三人でした、と」

回想シーンの間に体が勝手に動いてて実はもうサドル返却作業終了、ってのをちょっとだけ期待してたんだけど、当然のように俺の隣にはサドルの山がこんもりだ。駐輪場の端っこが、今は世界の果

てに思える。

世界の終わる場所とサドル。三流B級映画にさえならなさそうな組み合わせだな。

サドル山の隣では、奇跡を起こしたせいで浪費した体力を回復させるために眠っているカナメ。凄まじく無防備な寝顔が陽光を浴びて輝いている。こうやって見てると神様そのもので神々しさもあるんだけどな。

なんとなく悔しかったので、頬ぺたをつまんでみょーんと伸ばしてみると思いのほか伸びた。文字通り餅肌。

そんな日曜の午後のようなことをしながら、それでも俺の中では一つの策がふつふつと温度を上げ、芽吹こうとしていた。って言うのと、嘘っぽいよな。でも本当だ。しょーもないところで前向きな自分の一面を発揮する。

「前向きじゃないとやってられん境遇に追い込まれたからなんだがな」

ただし、一か八かの側面が強いうえに、失敗すると俺の心が回復不能の大ダメージを受けることになるわけだが、

「ワン・オア・エイト……でいいのか、一か八かの英語訳って？」

そんなどうでもいいことに脳を使いながらでなければ、この単純作業はつらすぎる。じわじわと精神力が消耗するのを実感しながら、俺は流れ作業の仕事は向いていないという事実を噛みしめる。早く、早く来てくれないと……

「！」

ガラガラと、金属の棒を引きずる音が俺の鼓膜を震わせた。次いでこたまする、アニメ声といって差し支えのない、鼻にかかったような独特の声。

「てめえら、何してやがんだこらあ！」

来た！

「おっせえ！ やっと来たのか！」

ようやく現れた声に、俺は涙ながらに振りかえった。来てくれな

かつたらどうしようかと思っただじやないか、畜生。

「な、なんだお前、気持ち悪い奴だな」

「もつと早く来いよな」。お前にわかるのか、延々サドルを返し続ける俺の辛さが！」

「お、おう。そりゃ、わ、悪かったな」

予想外すぎたのだろうか、俺からの叱責に一瞬はひるみながらも、はつと我を取り戻して、厳しい表情を再構成する。うん、さすがは生徒会。美緒とためを張るだけはある。

というわけで現れたのは、金属バットを構えたただぼカーディガン。木安だ。

「じゃねえ！ あつちはあつちだと思ったら、こつちもこつちで何わけわかんねえことやってんだお前ら！ どつかおつかしいんじやねえのか？」

俺もそう思う。たぶん全体的におかしいはずだ。でも、

「やかましい！ こうやってのこのこ現れたってことは、部室は今ノーガードだ！ 引つかかったな、今頃美緒達は」

「向こうは会長と副会長が張ってる。お前らなんざ俺一人で十分だ。おら、わーったらとつとと降参するか、俺に頭かち割られる」

「マジで？」

「まじだよ。しかもあいつら、ドンジャラに夢中だぞ。何やってんだあいつら、人のことバカにしゃがって、くそう」

「ほんとにすまん。あんな部長で」

心の底からの謝罪がでる。ここまで限界突破で人をばかにした態度というのは、さすがに関係者としては胸が痛む思いだ。

「じゃなくてだな。あれだ、よくものこのこ出てきやがったな。まずは会計のお前から血祭りに上げて、そのあとせいとかい」

ぐしやあ

目の前で自転車がひしゃげる。まあ、もともとそんなに頑丈な乗り物じゃないし、フレームっても所詮は中空のパイプだし、そりゃ金属バットを全力でたたきつければ前半分が原形をとどめないほど

のぶっ壊れたって不思議じゃない、よな。

「なわけ、ないよな」

「俺を血祭り？　そういう冗談吐くのは天王寺美緒だけだと思ってたけどな。まあいいわ、フラストレーション溜りまくりだし」

スイッチが入ったように木安の目元が鋭くなる。元来睨みつけるような目つきだけど、今は何もかもが気に食わないとでもいうような眼だ。小型の草食動物なら、この視線だけで捕獲できるだろう。

「あの、まだメンバー揃ってないっていうか、あの、おい、いいんちょ」

「とりあえず、死んどけや。葬らん」

「いやあ、死なないからだなんですけどねあはは……んぶう」

逆袈裟にふりあげられたバットの真芯が、見事に俺の体の真芯を捉える。ホームランの語源って相手を確実に葬らん、から来てるんだぜなんていうアホなネタを思いついたが面白くない。背骨と内臓をいっしょくたに絞りあげられるような痛みが脳髓に到達するまで、時間はかからなかった。が、その短い時間さえ体を支えることはできずに、気がつけば前のめりに崩れ落ちていたわけだ。道理で土の味がする。

「まだ生きてるか？　んじゃ次行くぞ」

「ま、まで……ほ、やばい、もしかしたら」

「葬らん！」

「まじ、か？」

今度こそ意識はふつつりと途切れた。

激突？ 金属バット

膝と顔面で体を支える三つん這いの体制から、何とか首だけを起こしたところへの、これまた鋭いスイングは本人の宣言通りホームランバッターの威厳と風格だ。腰の入った一撃が、再び俺のわき腹にジャストミートし、俺の意識は宇宙のかなたまで吹っ飛んだ。ちなみに後から聞いた話だが、体の方も見事に駐輪場の果てまでふつとんだらしい。

死なない体のおかげで無事なのか、死なない体のせいで苦痛が増したのか。

考えるまい。

わずか一秒で宇宙の果てと地球の往復という、エンデバーもコロンビアも真つ青の記録を成し遂げた俺の意識なわけだが、本当に同じ地球に帰って来たのか？ パラレルワールドに迷い込んだんじゃないのか？ 何もかも輪郭がぐにゃぐにゃだぞ。

「それは俺の意識が朦朧としているからであって、宇宙は今日も並べてこともなし」

「何言つてんだ？　しかし頑丈な奴だな。俺がこんだけぶつ叩いても折れねえとか」

「いえ、折れてるんですよ。ぼつきっぱきに。ただ治りが早いだけでそうでもないように見えるっていうか、損な体質って言うか、ちよ、まだぶつ叩くおつもりかよ？」

さすがにまずい。傷つかないわけではないので、きっちりダメーじは蓄積されるわけで、そうなるも膝が言うことを聞いてくれないダメーじを負った今の俺は、ただの的な訳で、

「やめてー！　俺のヒットポイントはもうゼロよー！」

「だったらくたばりやがれ！　葬らん！」

そっという名前の必殺技なのか、というほどに言い切った木安の顔には、なんとも決意に満ちた表情が浮かんでいる。快樂のためでは

ない、明確な信念のもとに行動している決意が、こちらにも伝わる。だからって暴力が正当化されるなんて、たまったもんじゃねえけどな。

「死にたくねえ」

死なないけどな、と心の中で自分に突っ込みを入れる。むなしい。

「せ、千古くん。あ、あの、あのね、は、はま、はませんせ」

ぶおん、という風切り音が衝撃になって耳孔内に荒れ狂う。びゅわんびゅわん反響して、それだけでも恐ろしい。目の前でまつ毛をかすめて静止している金属バットの先端が、鈍く輝くのも俺を恐怖に駆り立てた。

が、死ななかった。

「せ、せえふ」

玉が縮みあがった。ちびらなかったのは偶然でしかない。

「さすがに目撃されると言い訳できねえからな。くそっ」

何という完全犯罪思考。が、おかげで助かったのも事実なので、今だけは拾った命のありがたみを噛みしめる。と、それはそれとして、何やら焦った様子の吹水が駆け寄ってくる。吹水が焦っているのはさほど珍しい光景ではないが、やけに慌ててるな。何だ？

「どしたんだよ？ そんな血相変えて走って」

といつてもめちゃくちや足遅いから、知らないものからすれば駆け足しているかどうかとも危ぶまれる。

「はう、はあ、あの、サド、サドルが」

「ああ、まだ山盛り残ってるんだけど、とりあえず今はそれは置いていいわ。本来の目的の方が出てきたし」

「目的？」

ようやく駒が揃った。揃うまでに一回俺は虫の息なんだけどな。脇腹が死ぬほど痛い。

「そうだ。今回の真の目的、それはあいつを倒すこと！」

びしつと勢いよく人差し指を突き出す。当然指先にいるのは長さのあまりまくったカーディガンをぶらぶら揺らす、金属バット女。

「ええ？」

「あいつぐらいの経験値があれば魔王として大幅レベルアップするのは間違いない」

と思う。俺の知る限りのRPGでは大体そうだ。

「あ？ やんのか？」

ほら見る、めちやくちゃ凶暴だ。経験値たつぷりのボスキャラの風情だろ。

「無理、だよ。ぼ、僕なんかじゃ、相手になんないよ」

「ものは試しだ。攻撃魔法とか一発当ててみて」

「無理無理無理無理、そんなの使えないもん」

「駄目もとでやってみたらもしかしたらうまくいけば俺の首が何だか意志に反した方向に捻じ曲げられて」

「おい、あたしのチャリのサドルどこやった？」

鼻孔に突き刺さるような甘ったるさはブルーベリーガム。そして今、俺の頭をわしづかみにしているのは我らが顧問。

「浜？」

「先生をつける、先生を」

「あの、頭が割れるように痛いんですが」

「もう一回聞くぞ。あたしの、チャリの、サドル……どこやった？」

うおつ。声聞いただけで全身鳥肌まみれて、どんだけどすの利いた声だ。

「吹水に聞いたんだがお前、学校中のチャリからサドルばくったんだつてな」

あれ？ 何だこの流れ？ いや、俺じゃないっていうか、俺といえは俺なんだが。

「あの、ね、浜先生の自転車も、サドルが、ないって。それで、千古君が持つてるかも、って。そ、そっちの山に、ある？」

そういう事情でしたかほうほうそうですか。にしてはダメージがでかいぞ、これ。

「あたしはな、コンビニ行ってプリンを買ってこようと思っただけ

なんだ。それなのにチャリにサドルがない。これは犯人探し出してぶつ殺してもいいレベルでの犯罪だよな」

「いや、途中がだいぶぶつ飛んでますが」

「いいよな、プリンの邪魔して生きていられるなんて思ってたないよな？」

やばい、目がマジだ。覗きこめば命を食らいつくされそうな、どす黒い光が宿っている。これが狂気というやつか。

「ち、ちがうんです。これは部の活動の一環というか」

「いつからうちの部はサドルパクリ部になったんだよ？ 他のはいいとして、あたしのパクるってどういう見だよ」

駄目だ、既にこの大人の中に常識や良識はない。最初からなかった気もするけど。

こうなったらやむを得ない。本来の趣旨を説明するほかない。でなければ、俺はきつと無間地獄に匹敵する苦痛をうあああ頭痛い頭痛い！

「こ、これはですね、悪事を働くことによって吹水に魔王としての経験値を稼がせて、魔王としての覚醒を促すという本来の部の活動趣旨に沿った実験なんですうう」

最後の方は絞り出すような声になったが、何とか言いきった。と思う。

とたんに駐輪場からは音が消え去り、風が木の葉を撫でる音だけがざわめきのように流れてゆく。話し声やその他雑音もさることながら、この一瞬で場の空気そのものが一変したような気がした。

頭を締め付ける力が弱まり、解放された俺はよろめくようにして後ずさり、周囲を見回す。が、一度では何が変わったのかは分らない。せいぜい吹水が近付いたぐらいか。

二度、三度と視線を巡らせてようやく、その原因に気がついた。

「お前、今なんつったよ？」

俺を睨みつける、木安の視線が先ほどとは一変していた。なんというか、それまではメンチを切って敵視しつつも、あくまでも生徒

会や個人としての使命感のような、まっすぐな感情がその奥にはあった。しかし今そこにあるのは、そうした悲喜こもこも全てを覆い隠してなお余りある、憎悪。嫌悪。

なんだなんだ？ 何でいきなりこんなえげつないもん向けられてるんだ？

「いや、まあ大したことないっつーか、な。聞き流して」

「魔王を育成と言ったんだ。それがこいつらの部活の趣旨だからな。お前ら生徒会なのに、聞いてなかったのか？ ちなみにこいつが魔王な」

「ひゃう」

吹水の首根っこを捕まえた浜は、鉄壁の能面のまま木安にご対面させる。片手で人間一人持ちあがる腕力つてのもすごいが、襟首つかまれて猫のようにおとなしくぶら下がる吹水もどうかと思う。

「ほんと、なのか？」

「あー、まあなんて言うか、そういうのもやってるっていうか、サイドビジネス的に」

「ぼ、僕、魔王だよ」

チーン。どこかで電子レンジでもなったのかと思ったら、どうやら俺の脳内再生だったらしい。しかも電子音ではなく、仏壇に置いてあるアレ。（あれの正式名称は鈴と書いて「リン」と読むらしいとは後日談だ。美緒らしからぬ雑学だ）を鳴らした音だ。

「なんでわざわざ名乗るー！」

「え？ でもでも、この間美緒も言ってたけど、こそこそするなんて、ま、魔王らしく、ない、って。ぼ、僕もそう、思うし」

「にしても今このタイミングはないだろ。ほらー、あいつやる気になっちゃってる」

バキバキ拳を鳴らして、首も鳴らしてる。わかりやすいやる気の発露だし、なんか携帯で誰かと喋ってるっぽいんだがこれもいやな予感しかない。あれ？ もしかして今、俺の周りで死亡フラグがたちまくってる？

「バッキバキにな」

「あんたのせいでしょ！　ってかサドルだったらその中から好きなの持って行っていいから、どっか行ってくださいよもー」

そそくさと手近なサドルを一個ひつつかむと、トレードマークの白衣を翻して颯爽と去ってゆく保険教師、浜茜。どさくさで一番きれいで新しいサドルを持っていったのには目をつぶっておこう。今はそれどころじゃないから。

これで二対一。ちなみに、浜は敵力ウントだったので、先ほどまで俺の認識では二対二だった。有利になったわけだ。なんつう顧問だ。

「もうすぐ三対二になる。あーちゃんとバカも来るからな」

「誰だよそれ？」

「副会長と会長だよ。わかれや、ボケ」

そう言えばこの間、副会長を「あーちゃん」と呼んでたな。つてことは会長が「バカ」に相当するわけだ。なんだろうか、ほとんど面識がないのに親近感がわくな。

「んでも、来るころにはもう終わってるけどな」

「あ、何か物騒なこと考えてる顔だ。そして、めっちゃ嫌われてるな、俺達」

「そりやそうだろ。誰が魔王とその手下を好きに何かなるかよ。なんせこつちには勇者がいるんだからな、覚悟しやがれよな」

あー、やっぱいたのか勇者。しかも美緒の推察（願望？）どおりに生徒会が勇者様ご一行とか、ますます俺たち詰んでるだろ。学園生活的にも。

「ってことは、やっぱ会長が勇者だったりすんのか？」

「んな訳ねえだろ。あのバカはあーちゃんについた悪い虫だ。いつか駆除してやる」

「じゃ、お前が」

「相手見てもの言えよな。俺みたいな素行不良が勇者だなんて世も末だろ」

「ご自分のことをよくわかっていらつしやる。となると……へえ、あのおっとりした副会長が勇者な訳か。なんかタイプが違うって言うか、俺の知ってる勇者とはジャンルそのものが違いそうだな。」

「甘ったるいこと考えてると、ミンチにすんぞ」

「や、それはちよつとご遠慮願いたいというか、不死身でも今はまずいってどうか」

ちらりと木安の背後に鎮座しているサドルの山に目を向ける。そのふもとには、器用にサドルを枕にして眠るカナメの、穏やかな寝顔がある。確認、まだ睡眠中。つまり、

（やべえ、これ以上やられるとさすがに俺の存在も危ういかもしれん）

ダメージのせいで俺を構成する神気が幾分か消滅してしまったのだろう。

この時点で俺の意識は半分眠っているようにピンボケで、体の感覚もいまいちはずきりしない。立っているのもふわふわと雲の上にいるようにおぼつかない。多分最後の一発で完全に気を失わなかったのは、この感覚の鈍化のせいだ。いいのか悪いのか。

「……ってわけだから」

俺と木安の声が見事にハモる。向こうは完ぺきにそのつもりだ。こつちもこつちでそのつもりだが、どの「そのつもり」なのかは、次の言葉ではつきりと明暗を分けた。

「往生せいや！ 葬らん」「にげるっ！」

俺は力強く宣言し、力の限り地面をけり、力いっぱい腕を振った。「あ、てめ」

「脱出！」

見事なまでの奇襲作戦。完璧に相手の機先を制することに成功する。背後に、行き場を失った金属バットの処理に困って啞然とする木安の顔を確認する。おそらく瞬きほどの間に追撃態勢を整えて全力で追ってくるだろうが、その一瞬があだになる。

「伊達に美緒から逃げまくってねえよ」

ちなみにこの逃げ足については美緒以前はおかんから逃げるために鍛えていたのだが、惜しむらくはその両者から逃げおおせたことはないということか。ただ、それは化け物相手の戦績だ。相手が人間なら確実に逃げきる自信がある。

情けないと言っな、生きるためなんだよ。

背後からの「待ちやがれ」の声がドツプラー効果を引き起こす勢いで駐輪場を駆け抜け、校舎の角を曲がる。目指すはグラウンド、さらにはその奥の焼却炉。校舎裏に不法に投棄されたゴミ袋を飛び越え、放置されて半ば化石と化した野球のボールをけり飛ばし、第一次産業部の飼育する鶏に罵声を浴びせられながら、とにかく全力で駆け抜けた。既にこの時点で勝負は決しているといってもいいが、とにかく今の俺がやるべきことは今のうちに一秒でも差を広げて引き離すことだ。なぜなら俺が逃げて、行きつく先には、

「お、おかえり」

「ただいま」

カナメが待っているんだからな。

うまく角を曲がったあたりで消えたので、たぶん俺が消えたことすら木安にはばれていないはずだ。だとすれば奴は今頃、見当違いの方向に向かって全力疾走しているはずだ。追ってきてくれるかどうかはギャンブルだったが、どうやら推測した性格通りだったようだ。俺、グッジョブ。

さすがにこの時期だと、全力疾走すれば滝のように汗が流れるが、贅沢は言っていられない。あごを伝って落ちる汗のしずくを手の甲で拭い、ゆっくりと息を整える。

心臓が耳元にあるみたいにバクバクうるさい。耳鳴りがずっと付き纏うのも鬱陶しい。

「これでうちのボスを引つ張り出せるわけだが、ちょっと目を離れた隙にこれは……」

「う、うん。ごめんね……何か、色々起こって、ちょっと混乱して、そしたら」

「まあ、謝りたい気持ちもわからなくもないんだが、もう今さらだしな」

「う、うん」

ワープで帰ってきてびっくり。なんせ、先ほどの教室とは比べ物にならない濃さで、魔界の方々がうろついている上に、周囲の景色も何だかどんよりと淀んでいる気がしないでもない。時折、悪魔的な紳士に優しく微笑みかけられたり、直立二足歩行するナマズみたいなのと目があったりするのは愛嬌だ。

どうやらこの魔界現象は、吹水の状態に大きく影響されるらしいことが判明したわけだが、

「いよいよ、色んなもんが佳境っぽいな」

こんな風に目に見えるクライマックスって、何かいやだな。

カナメを背負った俺は、魔界の方々に愛想笑いをふりまきながら一路部室を目指す。

「でもたぶん、あの場所で色んなもんが決着するんだろうなー。美緒いるもんない」

何の根拠もないが、俺の本能がそう告げていた。

「さっすが俺、神様の下僕だぜ」

神様の体温は、背中にほんのり暖かい。

「汗臭いよう」

「だったらためえで歩け」

「かれーしゅー」

「断じて違う」

かぶっ

「痛い」

燃料補給完了。はあ、ガス欠になるまで働かせてもらいますよ、神様。

怪獣？ 大決戦

生物実験室の角を曲がるあたりで、何やら言い争う声が聞こえてきた。

「なんだ？ もう何か始まってんのか？」

角を曲がって、薄暗い廊下の奥に目を凝らすと、数名のシルエツトが目に入る。この距離だと顔ははっきり見えないが、それぞれの特徴的な輪郭でおおよその想像がついた。

腰まであるポニーテールが美緒、ビスクドールのようなフリルひらひらが副会長、その隣の男子生徒がおそらくは会長だろう。なぜだか会長に気安く手を振ってしまいそうになるのは、先ほどのやり取りのせいだろう。

ただそうもいかないのは、廊下を所狭しと歩き回る魔界の方々のせいだ。

まだこの世界では実体化していないとはいえ、その密度はこちらの世界にある物体とそう変わらないほどにはっきりと見えている。

それが壁をすり抜けたりして普通に歩きまわっているのだから、下手なホラーハウスなんかよりよっぽど恐ろしい。

そんな中を、美緒の元気いっぱいの声突き抜ける。

「だから言ったではないか、我々の幽霊君は今回の一件とは全く関係ないと。見たまえ、この光景を。先日的事件、原因はこれだよ」

「だから来てるんだろー。もう幽霊どうのこうのじゃなくて、魔王いるって聞いたぞ。もう変なのいっぱい呼んじゃって」

「君は黙っていたまえ、会長君。私はこの、自称勇者君と話しているのだよ」

「自称じゃないです、ちゃんと勇者なのです。天使からの任命を向けたのです」

そう言って紙切れを美緒に向かって突き出してるけど、なんだ？ 「雇用、契約、しょ？」

「そうです。私はきちんと勇者として、神の使いと契約したのです。おかげでこうして魔力を見ることができですし、経験値をためるとレベルも上がるのですよ」

「にしてはレベルが二十とは。そのレベルでクリアできるRPGなどあるのかい？」

「仕方ないだろ、二十になった時点で急に魔物が出てこなくなっただから。ちなみに俺は二十三ね」

何のことかわからないので、とりあえず近づくことにした。にしても、ぶつからないとはいえ魔界の人、邪魔だな。すり抜けりゃいいんだけど、なんかイヤだし。

「お、来たねシュータロー。いよいよ最終決戦だよ」

「何が最終決戦だよ、だ。それよか先に片付けることあんだろー」

「そうだね、先にこの自称勇者たちを葬り去らなければだね。流石はシュータローだ」

もう溜息も出ねえよ。

「れ？ 春ちゃんはどうしたの？ 君らのとこに行かなかった？ まさか、春ちゃん倒せたの？」

「なんで俺の周りには『倒す』とか『やっつける』っていう発想が普通に出てくる輩はつかなんだよ。どこの世紀末だよ、この学校は」
「ごーめんごめん、ついついこの人たちといるとそういう発想が普通になっちゃって」

なっっちゃって、じゃねえよ。好青年な笑顔を振りまいてはいるが、やっぱりこの会長も一癖も二癖もありそうな匂いがぶんぶんする。

「で、倒したのかね？」

「お前も何を気にしてんだよ。倒してねーし倒せるわきゃねえだろ、あんなん」

「ちなみに春ちゃんはレベル九十九だからね」

「なんであいつだけカンストしてんだよ！」

道理で一発でチャリが粉碎されるわけだ。まともに戦わなくて良かった。

「きや、き……会計ちゃんは、すっごい気合い気入ってたですからね。一人でもずっと校内で狩りまくってたですし」

そつえばさっきも経験値がどうこうとか言ってたな。世迷言にしては、木安のレベル九十九が妙に現実味を帯びているし、気になるな。

「ってか、レベルとか経験知って何なんだよ？ あんたらほんとに勇者なのか？」

美緒が確認してるだろうけど、とりあえず美緒フィルターを通らない情報を確認しておくべきだと判断する。背中では何やらカナメがごそそと動いてくすぐつたい。

「私たちは真正銘勇者です。これがその（ごそそ）証明の契約書です」

そう言つて、さっき美緒に見せつけたらしい紙切れをポケットから引つ張り出して、俺の鼻っ面に突き付ける。

「なにになに？ 『勇者雇用契約書』だと？ うわ、字こまかつ！」

A4用紙一枚にびっしりと書き込まれた内容は、文字が細かすぎて一行目で読むのを放棄したくなるが、契約書というのはそもそも読む気を起させない目的でこんな細かいという話を聞いたこともある。しかも、悪徳な契約であればあるほどに。

「んで、えーっと雇い主が「神の使い」で、業務内容が「魔物退治」と。うっさんくせえな。そもそもこの神の使いつて……」

ん？ 何かがひっかる。が、目の前の契約書の内容に目を奪われた俺は、迂闊にもその引っかかりを重要視することはなかった。それより目を引いたのは、契約書の備考欄に書かれた「魔物」の欄についてだった。

「何だこの「魔物の定義については魔王、大魔王を含むものとする」って」

しかもご丁寧に、黄色のラインマーカーで線まで引いてある。

「そこが重要なのだと、神の使いが言っただす……夢の中で」「夢？」

訝しがる俺を制するように、会長が割って入る。用意していたセリフを言うようななめらかさがちよつと鼻につくな、こいつ。親近感、撤回。

「そ。俺たちみんな、夢の中で契約してたわけ。俺のもあるんだけど、俺のは勇者のサポートって名目だし、春ちゃんに至っては職業欄を自分で書き換えちゃったらしいよ。狂戦士に」

まあお似合いな職業ですこと。

「それにほら、レベルも上がったのです」

そう言いながら会長は前髪を書きあげ、ずいっとおでこを差し出してくる。そして何を思ったか、口を閉じて「ん」と力み始めると、見る見るうちに顔が真っ赤になる。頬っぺたや目の周りが赤く染まるのはなんだかほえましい光景だ。

「あ、ほんとだ。パラメーター出てるな」

しばらくすると、会長の額にはうつすらと文字が浮かび始め、それが次第にはつきりと読める濃さになったところで、ゲームなんかで見慣れた構成であることが判明する。

名前と、その下にはご丁寧ヒットポイントやレベル、ステータス異常まで表示されている始末だ。ほんと、まんまRPGな奴らだな、こいつら。

「しかも、『天然』って……これ、ステータス異常だったんだな」

「それには俺も驚いた」

じゃあ、これで行くと吹水は『混乱』で、美緒は『暴走』あたりが出そうだな。って、そんなことはどうでもいいな。とりあえず問題なのは、本当に勇者が現れて立ち塞がった、ってことだからな。ますますこの世界が信じられなくなってきたよ、俺。

「で、ここしばらく学校のあちこちに湧いて出た魔物を倒して経験値をためていた、ってわけだよ。ちなみに、レベルが上がるとちゃんとファンファーレも鳴るんだよな」

その言葉が、どうにも俺には座りが悪い。喉に魚の骨が引っ掛かるような不快感とでも言えばいいんだろつか。それに何だろつかこ

の、胃のあたりがムカムカすんのは。

隣にいる吹水も同じらしく、ギョツと下唇を噛んで、つま先に視線を落としている。表情こそわからないけど、グーを握った手が痛々しい。

「で、その勇者様ご一行は、我々に何か用でもあるというのかね？
「だから、言ったですよ。て、てん……部長さん、即刻魔王を引き渡すです。先ほど、うちの会計から連絡があつたですよ。委員長さんが魔王だと」

やっぱりさっきの電話はそうだったか。そう来るか。そうなるよな。勇者だもんな。

「だが断る」

見事な即答。そしてやっぱり、こっちはこうなるよな。天王寺美緒だもんな。

まあ、これには俺も賛同だ。何だか知らんけど、この勇者たちに味方してやる気には、どうしてもなれない。

美緒が副会長と吹水の間に立ちふさがるように仁王立ちしたので、俺もその隣にそそくさと移動する。一応それでも男の子だからな。

「あのさー、こんな変なもんがうじゃうじゃ出てきてんのに、そんなこと言っでどうすんの？ 普通の生徒とかに見えるようになったらパニックどころじゃ済まないよー」

言つとおりだ。恐ろしく正論だ。こいつの言うことは徹頭徹尾間違つちやいない。

腹がたつぽどにな。

「というわけです。さあ、魔王を」

「断ると言つたはずだよ。我々の目的は彼女を魔王たらしめることだ。たとえどんな困難が付き纏おうとね。ひいてはそれが超科学部の到達点、魔法への最短距離だからね」

そしてこっちは徹頭徹尾、間違っている。普通の頭で考えれば、どっちを応援するかなど考えるまでもない。幼児にもわかるレベルだ。

「そんな無茶苦茶な！。君らの理屈で学校中に迷惑かけていいはずなんて」

「ぼ、僕は」

それまで蚊帳の外のように、ポツンと輪のはずれでつま先ばかりを見つめていた吹水が、唐突に口を開いたかと思うと、なんともらしくない勢いで身を乗り出した。美緒さえもが一步引くほどの勢いに、生徒会ズもたたらを踏んでいる。

「強くなりたくて、魔王になることを選んで、でもまだまだ弱くて、でも、でも」

言葉の一つ一つがきちんと選別されていないせいで意味をなしていないが、その必死さにはさしもの会長も口を挟みあぐねている。

その間にも、魔界の住人はうろろと周りをうろついているが、不思議なことにその誰もが吹水のことを一瞥するように視線を向けて歩き去ってゆく。たぶん、俺達に向こう側が見えているように、向こうからもこちらが見えるようになってるんだろうな。その手始めに、やっぱり魔王から見えるようになる、ってことなんだろうか。『ピンポン正解だ。多分もうちょっとしたらお前らのことも見えるようになるって、たがい意志の疎通とかできるようになり始めるぞ。そしたら、魔力が見えない奴らにも見えるようになるだろうな』

『相変わらずいきなりだな。んで、大体どれぐらいの時間がかかるもんなんだ？』

『わかんねえよ、そんなもん。だって、こんなことになったの初めてだからな。ただ』

『ただ？』

うわ、ここで一番聞きたくない一言だな。

『時間よりも、なんかでつかいきっかけでもあれば一発だろうな』
なんともあてにならない話だが、とりあえず大ピンチなのは確認できたわけだ。が、

「僕は、立派な魔王になる！ 魔王に、なって……こ、高校生活を、楽しみたい！」

この宣言に、胸を撃たれたように思考がはつきりする。それまでのもやもやとした考えが、霧があはれるようにクリアになったのがわかった。

理屈や道理じゃない、けれど人の心を掴む力のある言葉というのは、いつでも唐突なくせ、有無を言わせない。これがまさに、俺にとつてのそれだった。

（なんだ、単純なことだったんじゃないか。悩んだのがあほらしくなる）

青春したくて、何かが起きそうな気がしてずるずると美緒につきあった自分と、積極的に自分から楽しむために、美緒のところに飛び込んで頑張った吹水。一緒だなんていうには俺は何もしてなさすぎる。でも、わかる気がした。

思わず口元がゆるんでしまうのを引き締められない。

「何を勝手なこと言ってるの。そもそも君が魔王になんかなったから、いろんな問題が起きてるわけで、とっとと魔王をやめてもらうか俺達に退治されちゃってさ」

「よく言った、委員長君！ 君のその覚悟に私のハートは震えまくったよ」

「うん」

何やらやり切った感のある吹水は、紅潮する頬に満面の笑みをたたえている。ただの近眼用になったセルフレームの眼鏡が斜めに歪んでいるが、いい笑顔だと思った。

「はあ〜？」

対して会長は、まあ、そりやそうなるよなっていうリアクションだ。どう考えたって自分の方が正しいのに勢いだけで押し切られた時、人間ってアホの顔になるんだな。知ってたけど、目の当たりにするのは初めてだ。俺っていつもこんな顔してたのか。

「というわけで会長君。我々は忙しいのだよ。彼女を大魔王として覚醒させ、なおかつこの世界をも救う。どちらもやらなきゃいけないのが、我が超科学部の選択だよ」

「そんなこと、できるはずが」

「できるかできないではない、やるのだよ！」

何だこの自信。どっから湧いてくるんだよ。とはいつものことだが、今日の美緒は一味違った。どこが、と言われても困るんだが、何やらいつもの無茶なノリだけではない何かを感じさせる。そう、まるでまだ切り札を隠し持っているような……まさか、

「おい美緒！」

「というわけで出でよモンスター！ 勇者どもを駆逐するのだ！」

「やっぱいい！」

スカートのポケットから引っぱり出される、見慣れた魔法陣。何と書いてあるのかは俺には判別不能だが、知りたくもない。派手に閃くスカート、開くスリット、生々しい太ももの向こう側にちらりと見えるかもしれないもののために俺は少しだけかがんで

「シュウウ」

意識がもうろつとし、その場に崩れ落ちる。

「今、美緒のパンツ見たでしょう」

「い、ちが……」

思考が混濁し、脈拍が弱まっていくのがわかる。視界が暗くなる。ああ……。

「何をやっているのだねシュータロー。パンツならあとでいくらでも見せてやる、今は」

「マジでか！」

「ふわあ、シュウがあたしの束縛を振り切ったあ」

思春期のリビドーをなめるな、ということだ。しかし何故だろう、涙が止まらない。

と、こんなアホなことをやっている間にも、美緒の展開した魔法陣はどことも知れない世界につながったようで、溢れだす光の中からたくましい人型のシルエットが現れ始めている。まだ輪郭だけで細部は全くわからないが、それでも筋骨隆々っぽい上半身や、天井に頭がつきそうなほどの巨体は、なんと頼りがいがありそうな

がつしやああん

「あーちゃんに何すんだ、ざけんなよ。どおっせえええい！」
「あ」

砕け散るガラス片をもともせず、廊下に飛び込むもう一つの影。ぶかぶかカーディガンが見えたときには、既に金属バットの一撃が魔法陣の光の中に叩き込まれていた。

ただそれだけ。その一撃で、すべては終息した。ここ、二階なんだけどな。

霧が晴れるように光は霧散し、断末魔の声どころか姿を見せることすら叶わずに、魔物は消滅したわけだ。いったいどんな奴だったのか興味は尽きないが、それはまたの機会に。と、

ぱららっばっばっばん

「あ、レベルが上がったです」

「おおー、一気に三十。かなり上級なモンスターだったってことか見えなかったけど」

鳴り響くファンファーレの中で、会長と副会長の額の数字が書き変わる。

「やれやれだ」

「やれやれじゃねえ、レベル上がっただろ、あいつら！」

「なんとも困ったものだね。というか何をやっているのだね君は。早く手を打ちたまえ」

「手を打つて、どうしろって」

「おらあ！ やつと見つけたぞ魔王の手下あ。さっさと往生しやがれ！」

さすがにもう時間稼ぎは終了か。レベル九十九の情報を聞いたせいか、さっきよりも恐ろしさ三倍増し、金属バットもエクスカリバーに見えてしまう。

ともあれ、

「なんか、いつの間にかクライマックスの気がするんだが」

「奇遇だね、私もそんな気がしなくもないよ。うん？ どうしたね、

いい顔をして」

「どうもしねえよ。てめえこそ楽しそうだな」

「そりやそうだ。楽しくないわけがない」

そんな状況だというのに俺と美緒の顔には焦りや不安というものはかけらも見えない。むしろ、ちよつと危ない笑みが浮かんでいるほどだ。自分の顔はわからないが、頬がひきつっている気がするの
で、かなり変な顔で笑っているはずだ。

「かくなるうえは！」

「うえは？」

美緒が勢い込んで床を踏み鳴らし、歌舞伎俳優もかくやという勢いで髪をなびかせる。

「実力行使だ。来たまえ、木安春！」

「じよおおおとおだあ、天王寺い。ここで俺の経験値にしてやん
よお！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7035x/>

かみ・つき

2011年10月20日18時53分発行